道存

明治己亥

臺四公人中秋

雜學中堂

皇國俚諺叢序

順五外

教之亦多術矣肩正言曰諭之者肩喻言曰諭之者聖賢之訓言可崇可敬諭之固莫善乎此而苦其解之之不易天下多不宜不諭之之而解聖賢之訓言者十無一二是教育者之所深憂也解之甚易而其意概不背聖賢之意者惟俚諺焉然俚諺非必出乎俚人之口其中出於識者之言者亦不尠曰其由俚語發之世人不

甚尊重之然其中寓至理肩不在聖語之下者少友松本士張著皇國俚諺欄間掛刊而問於世余閱之蒐輯古今俚諺至四千二百條之多可謂勉矣讀者採其醇棄其醨而活用之則於脩己教人其益肩甚大者是書已出於世余將見吾邦學者活用之巧拙如何焉

明治三十二年五月東京西村茂樹識

西村茂樹

皇國俚諺叢序

古詩三百篇。往々有出於田夫紅女之口者。彼聖王不止取以觀民風資政治。列諸經典以垂教何哉。雖其言有善有惡。要皆發於性情而無所矯飾也。所謂俚諺俗語者。其亦如此歟。其詞鄙猥瑣屑。雖或不軌於正道。皆根於人情自然。間有至理存。其言易入。其義易曉。其善者足以裨補風教。而惡者亦可以爲鑒戒矣。本邦俚諺。好事者或輯錄之。然概皆零卷片册。僅止一隅。未有能集而大成者。而其典證亦多鹵莽附會。不足爲據。信陽松本鐵山將刊其所

輯皇國俚諺叢。微余一言，採摭極廣。裒然累帙而典引正確。足以發蒙。視夫零片鹵莽之書。固相縣矣庶幾乎合於葩經之旨。而嘉惠後學歟。於是乎言

明治三十二年己亥八月於臺北官舍

櫻溪逸人　中村忠誠撰

序

俚諺者里巷之常言耳。而其醇者。則發于仁義忠孝之性。合政治經濟之理。往々與聖賢遺訓相符。而其妙乃在辭之卑近。夫近則易知。卑則易從。故雖不學者亦有以得也苟玩索演繹而用之則身可以修。家可以濟。天下國家可以經綸。惟運用之妙存于其人耳。豈可以辭之卑近輕視之乎。余往年罹疾。廢讀書數月。病間偶聞侍童誦古諺。竊覺其妙趣。爾來用餘力於旁求遍索。五年于茲矣。徵諸群籍。凡得四千二百條。而不別醇離。其原書有註者。亦概併

收之、時有附愚見者漸積爲堆。今逐伊呂波之序編之、名曰皇國俚諺叢。若夫日用彝倫之間、就其醇者以求其適。則庶幾有餘師。

明治三十二年四月識於東京四谷之僑居

鐵山松本眞弦

凡例

一皇國ノ俚諺、ハ里俗ニ始マルモノアリ、漢籍ニ原ツクモノアリ、佛書ニ出ツルモノアリ、蓋シ中古文化ノ然ラシムル所ニシテ、所謂漢紅ノ和錦ニ織成サレタルモノ少ナカラス、今並ニ收メテ分ツコトナシ、

一西洋諸國ノ諺俚モ、亦漸ク我カ人口ニ上リ、終ニ彼此分タサルニ至ルヘシ、本書ハ其未タ混淆セサルニ迨ヒ、之ヲ輯錄シ以テ後昆ニ傳ヘ、兼テ本邦文化ノ變遷、風俗ノ源委ヲ窺フニ便セント欲ス、故ニ玉礫同架ヲ免カレズ、讀者採擇メ可ナリ、

一本書ハ語々流傳ノ時代ヲ徵セン爲メ、原書ヲ表示ス、其注尾

ニ書名ヲ附シタルハ本語ト共ニ同書ニ出ツルモノナリ、一語數書ニ出ツルモノハ、一書ヲ舉ケ他ヲ畧スルコトアリ、又未タ成書ニ見エサルモ、人口ニ膾炙スルモノハ概子之ヲ收取ス、條下ニ書名ナキモノ即チ是ナリ、其注尾ニ書名ナキモノハ、編者自ラ屬スル所ナリ、

一俚諺ノ出處注解ハ、舊說往々穿鑿ヲ免レサルモノアリ、此編亦敢テ臆斷ヲ須ヒス、務メテ本來ノ面目ヲ存シ、以テ後日ノ考徵ニ資ス、只其義名教ニ關スルモノハ、畧ボ辨正スル所アリ、且注脚甚タ冗長ニ失スルモノハ、間マ節畧檃括ス、又類語ヲ群籍ニ取リ以テ注脚ニ充ツルモノハ、出處トシテ引證スルニアラス、要ハ本語ノ意義ヲ發揮スルニ在ルノミ、蓋シ易ニ常占ナク、詩ニ定詁ナシ、諺ニ於テモ亦然リ、讀者注解ニ泥マス、意ヲ以テ志ヲ逆ヘテ可ナリ、是余ガ毎語ニ贅註ヲ附セザル所以ナリ

一編中語意分明ナラサルモノ少ナカラス、蓋シ辭ニ古今都鄙ノ別アルニ依レリ、是亦强解ヲ索メス、仍ホ後考ヲ待ツ、

一本書ハ初メ數十門ニ分類セシガ往々廣義ヲ一局ニ畫ルノ嫌アリ故ニ改メテ語頭ノ發音ニ依リ、いろはノ序次ニ分ツコトヽ爲セリ而シテいゐヲ混シ、をゑヲ合セ、江ゑヲ一ニス、專ラ索引ノ便ニ從フノミ

一余ガ陋見寡聞自ラ量ラス敢テ此書ヲ纂ムト雖モ、皇國ノ俚諺未タ必シモ此ニ盡キズ、冀クハ後來同好ノ士、集メテ大成スルアランコトヲ、

明治三十二年四月

編者識

引書目次

一皇朝古諺	編者不詳	未刊
一毛吹草	同	正保四年刊
一和漢世說故事苑	同	正德六年刊
一吾吟我集	石田未得著	慶安二年刊
一世話盡	編者不詳	明暦二年刊
一世話支那草	同	寛文五年刊
一本朝世諺俗談	松浦默譔	延寶七年刊
一野語述說	畫峯仲允著	貞享年間四次刊
一漢語大和故事	著者不詳	元祿四年刊
一諺草	貝原好古纂輯	元祿十四年刊
一和漢古諺	貝原益軒編	寶永三年刊
一本朝俚諺	井澤長秀輯	正德五年刊
一和歌民のかまど（和歌ノ二字ヲ略ス）	佐々邊青人著	享保十一年刊

一物類稱呼　著者不詳、　安永四年刊
一和訓栞　谷川士清纂　安永六年刊
一類聚名物考　山岡明阿彌著　未刊
一諺百首和歌　小島橘洲著　享和二年刊
一淺瀬のしるべ　松室（名剛）　文化九年刊
一和漢訓蒙故事要言（和漢訓蒙ノ四字略ス）　梅園（姓名不詳）著　文政十二年刊
一俚言集覽　村田了阿編輯　未刊

此書所引、北條時分諺留ナルモノアリ、其解題ニ云、跋ニ云、右北條氏直朝臣ノ頃、申ハヤリタル諺ノ一帖ハ、元本物茂卿先生ノ父蓬莨主人自筆ノ由ニテ甚古雅ノ一冊也、今不斗而、堀口氏率貞ノ藏本ヲ見ルコトヲ得タリ、因テ之ヲ乞需メテ其文ヲ本ノマヽニ寫シ又、云云安永二癸巳首夏廿六、多賀氏常政誌之、○此本近藤守重ヨリ借寫ストアリ

又引書、森寺玉山書ハ、享保十六年、俗名森寺一學男森寺晦浦輯トアリ、是等ハ複引ナレモ、未タ世ニ出テサル書ナルヲ以テ、特ニ此ニ附記ス、

右ノ外古事記、日本紀、萬葉集、三語、五草、等ヲ始トシ、隨筆雜書ニハ、下學集、尤の草紙、醒睡笑、秋齋閒話、駿臺雜話、南嶺子、幽遠隨筆、年々隨筆、閑田耕筆、閑田次筆、四方の硯、技癢錄、一話一言、燕石雜誌、擁書漫筆、瓦礫雜考、嘉語、北邊隨筆、安齋隨筆、橘庵漫筆、遠魂紙科、骨董集、用捨箱、一宵話、嬉遊笑覽、撈海一得、世事百談、其他ノ諸書ニ散見スルモノヲ蒐輯ス

皇國俚諺叢

信濃　松本眞弦編纂

諺字の解

諺は一に世話といひ（俗に世話をするなどいふ世話とは意異なり）又名目（めのとのさうーに語を名目といへり）喩（たとヒ）（昔のたとひ古人のたとひなどとて物の本に見に又いろはたとひなど此類なり）など稱せり（說文に傳言也段玉裁注、傳言古語也、古字從十口戩前言）（廣韻）に俗言也（尙書無逸蔡傳）に俚語曰諺（下學集）に同世話之義、又世話風俗之鄕談也とあり（古事記傳三十）に云、諺は許刀和邪（コトワザ）と訓り云云、許刀は言和邪は童謠（ワザウタ）、禍（ワザハヒ）、俳優（ワザヲギ）、などの和邪と同しくて、今の世にも、神又は人の靈などの祟るを、物の和邪といふ是なり云云、何事にまれ、人の口を假て、神の歌はせ給ふを、和邪歌といひ、言はせ給ふを、言和邪といふなり、斯れは本は神の心にて、人にいはせて、吉凶ことを示喩たまふをいひしが、轉りては、只何となく、世間に偏く言習はしたる、言をも云ふなりとあり、（愚按）諺の特性は、某の事實ありて、始めて某の言辭の起れるにあり、古へ虛諺なし即ち出來事に就て、至當の理を表明し、若くは其事を豫言せしものにて、其語、經傳子史に基くものあるも、徒に之を空言に載するにあらず、必ず事物に因て相發するか故に、廣く人口に膾炙し

て失はさるなり、是に因て觀れは諺は、言と事との義をかねて、一の名詞と成たるものならん、

諺字を當てたるは後の事なり今本編に就き概觀すれは、下の如く定解を下すを得へし、曰く、

諺とは、世俗普通の常言にして、教誡諷刺の意を寓するものをいふ、

因に云ふ、朝鮮には、古來一種の文字あり諺文と稱す、恰も本邦のいろはの如し、現に新聞雜誌等に用ふるもの是なり、此諺文を用ひて註解したるものを、諺解と名つく、然るに、此方の國字解の書を、之に擬して諺解と題せるは、當らずと謂ふへし、要するに、朝鮮の諺文は、一種字體の名稱にして、俚諺とは、其義各別なる事を知るへきなり、

いゐ之部

一は萬物の始り〔俚言集覽〕

〔老子〕道生一、一生二、二生三、三生萬物、〔漢書董仲舒傳〕臣謹按春秋謂一元之意」注師古曰、隱公始即位、何不稱一年、而言元年也、一者萬物之所從始也、

一を以て萬をしれ〔毛吹草〕○一を以て萬をしる〔和漢古語〕

〔荀子非相篇〕以近知遠、以一知萬、以微知明、〔劉子新論〕一可以知百、觀此可以知彼、

一を打て萬を知る〔俚言集覽〕

〔恩地左近太郎聞書〕恩を知らさる者に誠なし、一を打て萬を知るの心、常に忘るへからす、

一事か萬事

〔莊子天地篇〕記曰、通於一而萬事畢、〔子華子〕大道醇酢、應對而加費、故曰、通於一萬事畢此之謂也、是諺の意に近し、

一事兩樣

〔醒睡笑鈍副子〻條〕弟子の女人といひたるを、咎めたる所に、「ろなたは我に阿彌陀經を教へて、善男子善女人と云へといふてれゐて、今は又さうはいはぬとは、一事兩樣なる事を、なとさんざんにからかひて云云、〔俚言集覽〕

一度か末代

一度惡事を犯せは、汚名末代に殘るを云、

一舉兩得

〔晉書東哲傳〕一舉兩得、外寶內寬、〔戰國策〕富丁曰、我一舉兩取地于秦中山也樂毅曰、一舉而名實兩附、

一粒萬倍

いゐ之部

〔大方便佛報恩惡友品〕世間求利、莫先耕田者、種一得萬倍、〔孝經千典〕

一騎當千〔藤草同之〕

〔涅槃經〕、喩如人王有大力士其力當千、更無有能降伏之者、故稱此人一人當千」とあり俗語佛說に本つきたるならん〔漢語大和故事〕 ○〔李陵答蘇武書〕疲兵再戰一以當千〔北齊唐川邑傳〕强幹一人當千

一紙半錢

佛家にて布施物の少なきを云ふなり〔大藏一覽〕に菩薩本行經に曰、所施雖少、歡喜心與、淸淨心與、恭敬心與、不望報與、〔中畧〕所施雖少獲報弘大、猶如良田所種雖少收實甚多」是は貧女の一燈長者の萬燈といへる、阿闍世王受決經の說なり、〔漢語大和故事〕

一心不亂

〔阿彌陀經〕執持名號一心不亂〔大和寶山記〕到秘密淸淨本地、一心不亂〔全〕

一處懸命

〔古事談〕六條顯季、與刑部義光〔頼義三男新羅三郎〕相論領地、白川法皇召顯季曰、雖無件庄、汝不可事闕、彼一處懸命の由聞召云云、此事十訓抄にも見えたり〔庭訓往來〕諸代和傳之分領、一處懸命の地、〔本朝俚諺〕

一生の華

一字千金〔毛吹草〕 ○一字千金に換かたし〔世話鑑〕

一字を學ふの益ある事、千金にもまさるといふ事なり、〔史記呂不韋傳〕以呂氏春秋布咸陽市門、懸千金其上、延諸侯游士賓客、有能增損一字者予千金、諺此に出たり〔藤草〕 ○〔王獻之帖〕揚州一老母、惠臣一餐、無以答其意、臣作一字、令就市償、近觀者三、遠觀者二、未經數日遂獵千金〔鍾嶸詩品〕陸機擬古十四首、驚心動魄、幾於一字千金、〔張說詩〕大風將小雅一字盡千金、〔吳融書光上人草書歌〕不係知之與不知、須言一字千金値、〔通俗編〕

一字の師

〔風璞〕に僧齊己、詠早梅詩云、前村深雪裡、昨夜數枝開、鄭谷曰、數枝非早也、未若一枝、齊己拜谷爲一字師、〔藤草〕 ○張逈の詩に虬鬚白也無の句あり、齊己也を改めて在となす、逈又齊己を拜して一字の師となす、宋の張乖崖の詩に、獨恨太平無一事の句あり、蕭楚材恨を改めて幸となす、乖崖楚材を以て一字の師となすと〔詩話總龜〕等に見えたり、

一字一點を許さず

いゐ之部

〔從政名言〕一字不可輕與人、一言不可輕許人、一笑不可輕假人、

一日の師をも疎んすべからず

一文字は無文字の師〔他我身の上〕

一文不通

一字か恩に舌をぬけ〔俚言集覽〕

一文錢か生爪か又　一文錢を破て遣ふ〔文錢を伽羅鋸て破る〕

〔荀子〕爭利如蚤甲注蚤同爪〔全〕

一文錢へ鳴らぬ

〔傳家寶〕孤掌難鳴〔韓非子〕人主之患在莫聽之、故曰、一手獨拍雖疾無聲、孤獨にては事を成し難きをいふ〔全〕

一文なしの旅立〔全〕

一文凧のきれたやう〔全〕

一文まうけの百失ひ〔世語盡〕○一文惜みの百しらす〔故事要言〕

此は吝嗇にして、金錢を有益に用る事を爲さゝる者は、必す無益の事に之を失ふものなり

と云ふ事なり、〔大學衍義補百四十八〕殷雄上書曰、百年勞之、一日失之、費十而愛一、と諭の意に相近し

一寸の舌て五尺の身を損す〔俚言集覽〕

〔童子教〕人以三寸舌破損五尺身

一寸延れは尋のびる〔毛吹草及和漢古語〕同之　○一寸延ればひろれぞる

此は何によらす油斷の心を起して、今日ならすば明日爲さんと、打捨置く時は、又必す急くへき用事其間に重なりて、終には大なる害となるものそと戒めたる詞なり、〔故事要言〕

一寸先はやみ〔毛吹草〕○一寸先は闇の夜〔故事要言〕

〔福惠全書〕前程事暗如漆、

一寸の地獄

俗に船にのりて水行するを、一寸の地獄といふ、風波の難はかりかたく、至て危き事なれはなり、〔朝野僉載〕に乘船走馬去死一寸と諺此に出るにや〔蘆草〕

一寸の虫にも五分の魂〔毛吹草及和漢古語〕同之

〔故事要言〕に著聞集を引て云へるは、或る田舍人、京上りして、侍けるが、宿にて日南北向

して居たりけるに、頸の痒かりけるを、探りたれは、大なる白蟲の喰付たりけるなり、ろれを何となくて、腰刀をぬきて、柱を少しけつりかけて、其中にへし込て、働かぬ樣に押れはひけり、扨此主田舍へ下りぬ、次の年上りて又此宿に泊りぬ、有し折の柱を見て、扨も此中にへし入し虱如何なりぬらんと、覺束なくて、削りかけたる所を、引わけて見れは、白虫痩枯て獨あり、不思議さに已か腕に置てければ、やがて喰付しが、其喰たる跡瘡になりて、終に命を取られけるとぞ、是諺にかなへり、

一寸斬ても血が出ぬ

一日延れは千日にむかふ〔俚言集覽〕

一時の徒居（タヽヰ）は三年の惑ひ〔世話盡〕

一時ゝ榮華に千年をのべる〔俚言集覽〕

一時三里は人の道

一度で懲りぬ者は二度目には死ぬも知らぬ〔俚言集覽〕

一度餅を食へは二度食はう〔全〕

一言の約

〔今昔物語〕に、河内守源頼信、上野守にて任國にある時、其乳母の子、兵衛尉藤原親孝か家に、盗人を捕へ、押込め置たりしか、一日圍を脱し遁んとせしに、遁れふせず、親孝か男子の五六才許りなるを質にとりて、膝下に押伏せ、刀を腹にあてゝ、少も寄らは、刺殺すへき風情なり、頼信來り之を見て、盗人に向ひ、汝其童を質に取たるは、命を助からん爲か、但は殺さんとのみ思へるにやと問ふ、盗人敢て殺し侍らんとにはあらす、只命を助からんとて、質には取候へと申す、頼信然らは兒をゆるして其刀を捨よ、命は助くへし、予か一言の約を違へさる事は、汝も兼て聞及ひたらんと、言はれしかは、盗人暫く思案して、仰かしこまり候とて、刀を捨、兒を引起して助けたり、頼信郎等に言ひけるは、此男身わひしくて盗をなし、命を助からんとて人質を取しかとも、強て憎むへきにも非す、又某か免せと云言葉に從ひしは、物に心得たる奴なり、予亦一言の約違へがたし、命を助けよ迚、ゆるして追出されたり、是よりして、頼信に人の歸服する事、いやましなりけり、〔本朝俚諺〕

一は功にたつ〔毛吹草〕

一撰のよりあひ〔全〕○言ひかち高名一撰のよりあひ〔和漢古諺〕

一把藁の雲助同前〔俚言集覽〕

ひ ゐ 之 部

一身に味方なし　又　一心に味方なし

一切くふ役

〔般若心經〕に、度一切苦厄の語あり是より轉訛したるなるべ

一切起れは二さい起る〔民のかまど〕

一かばちか

〔後漢書班超傳〕に、不入虎穴不得虎子といへるに、其意相近し、

一議に及ばず

〔大平記廿八〕直冬蜂起に、將軍一議に及ひたまはす、〔俚言集覽〕

一も二もない

是は唯々諾々の意なり、又事の去て再ひ爲すへからさるなどにもいへり、

一もとらず二もとらず〔毛吹草〕全之

是は何に寄らず、よさ目的ありて、既に其事に着手せば、必其事のみ一途に仕れはせて、結果を見るへしとの戒なり、〔事文類聚前集廿六〕に云、獨の貧さ者ありて、陶甕を賣に出たり、或宿に泊りて思ひけるは、此甕を賣れは價若干錢あり、此錢を以て市に出て買ふに甕二ッあり、

又是を賣れは二ッの價にては甕四ッ、四ッの價にては八ッを買ふと、段々に倍して見る程に、後には數限りもなき、福者となる事を思ひ續けて悅ひ、覺えす起て舞けるか、餘り興に入りて、手に持たる物を取落し、甕は微塵に碎けゝるとかや、〔故事警言〕

一に掃除二に勤行（禪家の諺）〔俚言集覽〕

一に看病二に樂〔全〕

一に播磨二に越前（是は善國の次第也）〔全〕

一に愛多羅二に正宗三に與力の明渡し

是は江戸の諺にて、高價の物の次第なり、〔全〕

一に心二に手綱三に鞭四に鐙（騎馬の法）〔全〕

一富士二鷹三茄子又一富士二鷹三茄四扇五多波姑六座頭〔全〕

〔木村芥舟の黃粱一夢〕に云、五弓士憲言、嘗在江都日、聞之于佐藤一齋先生曰、兒女以夢見岳鷹茄三物爲吉祥、不知其何據、嘗聞之快烈林公、曰、昔照祖在駿城、一日東行至江戸、猷廟欣迎之問曰、大父君在駿、近日以何爲樂乎、公笑曰、望岳第一、放鷹第二、茄美第三、駿樂唯有此三事、而汝旦夕勤苦、他日成立爲良主、吾樂更有勝於此者、故老所傳如此、但未知

其眞否如何耳」、〔幽遠隨筆〕或人春より秋に至るの間に、不二、鷹、茄子を、三度に夢みたりとて、余に問へり、余曰、一不二、二鷹、三茄子は瑞夢なりと、俗間にふるくもいひ習はせて、今に捨てず、富士は我朝の靈山にして、不二のいひなるべし、鷹はよく鶴を追ひ、鵬を制するの勇ありて、しかもぬくめ鳥に仁あり、力草に智あり、茄子は淺漬のゆるし、色めてたしといへども、己か秋を嫁に惜むはにくし、不二又亢龍の愼をもいふべし、只鷹ころよけれと、其の夢みし人にねくる、「よき事を聞する鷹の勇哉」

一を知て二を知らす

〔莊子天地篇〕子貢以漢陰丈人事告孔子、孔子曰、彼識其一不知其二、〔說苑臣術篇〕孔子與子貢論管仲子產曰、女知其一不知其二、

一を聞て十を知る

人の聰敏なるを稱す〔論語〕に、子貢曰、回也聞一以知十、賜也聞一以知二、

一天四海を掌に治む

〔中庸〕に、郊祀の禮、禘嘗の儀を明にする時は、國を治むる事、其掌をみるか如しとのたまへり、言心は、いとやすきなり、但是より掌に治るの詞はしまる、又論語に見ゑたり、〔世話支那草〕

一花開けは天下皆春

一葉落て天下の秋〔和漢古諺〕全之

事々物々の端、微にして、人其勢の盛なるを知らさるなり、諺の意も其始の小なるを見て、其終の大なるを察せよと也、〔淮南子〕、以小明大、見一葉落而知歲之將暮、睹瓶中之氷而知天下之寒、是諺の據なるへし〔諺草〕

一眼の龜浮木にあう○盲龜の浮木

逢ひ難きにあふ悅をいふ〔法華經〕に、佛難得値如優曇波羅華、又如一眼之龜値浮木孔、〔新後選集〕に郁芳門院安藝「まれにとく御法のあとをきて見れは浮木にあへる龜井なりけり」〔本朝俚諺〕

一生は夢のうち

〔李太白が宴桃李園の序〕に曰、夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生如夢、〔俚言集覽〕

一生は風前の燈〔全引大友興廢記〕

一人を害して百人を助けよ〔全引義貞記〕

〔漢書尹翁歸傳〕其收取人心也、以一警百、吏民皆服恐懼改行、〔商子〕賞一以勸百、罰一以懲

いろは之部

衆、〔鹽鐵論〕刑一而正百、殺一而愼萬、

一人の好士より三人の愚者〔毛吹草〕

一念天に通す

〔參同契註〕精勤不退一念通天〔本朝俚諺〕

一念は緒とも二念を發すな〔大和故事〕同之

是は世に言ふ初一念の意にわらす、只他人の適と幸ありて、富貴立身する事ありとも、我も是程の事、などか爲さゞらんなど、羨み慕りて、眞似をする事なかれとの誡めなり、〔故事要言〕

一番生は御師匠樣（寺子屋の世話）〔俚言集覽〕

一番樂は棺の中

一年三百六十日

是は俗に日がな一日、年がな年中などいふて、絶間なきの意なり、〔書蘐典〕期三百六十有六旬、〔漢官志周太常諺〕一歲三百六十日、三百五十九日齋〔施肩吾春游樂〕一年三百六十日、賞心那似春中物、

一年の計は元日にあり妻を娶ふるは初見にあり〔失書名〕

〔顏氏家訓〕俗諺云、敎婦初來敎子嬰孩、誠哉此語、〔梁元帝纂要〕一年之計在于春、一日之計在于晨、

一指痛て身安からす〔俚言集覽〕

〔莊子〕蚊虻噆膚通昔不寢〔鶡冠子〕一蚋噆膚不寢至旦、半糠入目、四方不治

一指前に蔽へは泰山も見えす〔全〕

一陣敗れて殘黨全からす〔全引太平記論判〕

一犬虛を吠れは十犬實を傳ふ〔世話集〕○一人虛を傳ふれは万人實を傳ふ〔諺草〕

此は無根の說も、世間に信するもの多きをいひ、又は一人爲にする所ありて言ひ出せは、餘は只人眞似の論をするをいふ、〔潛夫論〕、一犬吠形百犬吠聲〔晉書傅咸傳〕一犬吠形群犬吠聲、慣於群吠遂至叵聽〔傳燈錄〕一犬吠虛千猛唯實、又一人傳虛萬人傳實

一疋狂へは千疋の馬もくるふ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕○一疋の馬か狂へは千疋くるふ

一盲衆盲をひく

〔大智度論〕云、譬如一盲無見千盲俱爾、〔無門關〕云、拚身能捨命、一盲引衆盲、〔本朝俚諺〕

一丈を說き得んよりは一尺を悟り得んにしかす〔俚言集覽〕

一物あれは一累をそふ

〔經組堂雜志〕云、頃年畜兩鶴既乏專人看顧、朝放暮收不免關心、又恐擾隣圃稚童兒、羽翮再完一旦飛去、自是遂省一事、以此知有一物添一累也、〔彤草〕　○是尚書旅獒に所謂る玩物喪志の意なり

一升入りの袋は一升より上は入らす〔本朝俚諺〕　○一升入瓢は一升又一升ふくべは大海に入れても一升〔俚言集覽〕

〔枕草子〕方弘はいみじき人に笑はるゝもの哉と云條に、あやしの男や、一人して二人の物をは、いかで持つべきぞ、ひと升瓶に二タます入るや云云、〔沙石集〕に、一升入る瓶はいつくにても一升入るぞ云云、〔愚按〕是は人々、己の量を知て事に從ひ、又人を使ふに於て、之を器にせよとの意なり、〔梅園叢書〕に、一升入る器に一升、一斗入る器に一斗入る時は、少しさはりても打こぼして、剩へ器さへ損するやうに成ゆく者なり、まして一升入るものに、二升も入れんはかるをや、易の象に亢龍有悔盈不可久也、といへり、

一樹のかげ一河の流れ〔毛吹草〕〔彤草〕　○一樹の蔭一河の水一トひらさめの雨やどり〔和漢古彤〕

いにしへ白拍子のうたひものに、一河の流れを汲一樹のかげにやどるも、みな他生の縁といへるは〔說法明眼論〕に、宿一樹下汲一河流一夜同宿、一日夫妻、皆是先世結緣」、と見えたり、この書は、世に聖德太子の作といひつたへたれと、僞書なること辨を待たす、〔源平盛衰記〕〔太平記〕、〔義經記〕、〔保曆間記〕、などにこの詞見えたれは、ふるき詞とおもはる、さて珍書考といふ書に、古文類談と云ものに載すと云ひ隋張即之が詩に汲流一川接彌深屏用一樹思殊親」とあるか來處なりとあり、この詩を〔夏山雜談〕、〔閑田次筆〕などにも、引たれと、疑ひなきにあらす、〔世事百談〕

一飯も必むくふ〔俚言集覽〕

少の恩も忘れぬを云ふ、漢の李固曰、感古人懷一飯之報と諺是より出たるならん、古人とは〔左傳〕に、靈輙か趙宣子の一飯を受て、爲に其難に死し、〔史記〕に、韓信か漂母に寄食し、後志を得るに及て、厚く之に報ひしなとをいふなるへし

一日くらし〔全引他我身の上〕

一夜けんぎやう〔毛吹草〕　○千里ひとはね一夜けんぎやう〔和漢古彤〕

撿校はもと僧の職名にして、中頃旨人の職名となれり、撿校は座頭の長なれは、旨人に在ては

無上の榮譽にして、容易に得へからず、故に一夜撿校といへるは、意外の僥倖、又は一時の得意なとにいふなるべし、

一里一トはね〔毛吹草〕

一利一害

物事一利あれは、必す一害あるものなり、〔梅園叢書〕に云、金は天下の至寶なり、之を貯るものは家富めり、されど是によりて身を失ふ者あり、人參黃耆は藥の隨一なり、されと是を服して、命を落す者あり、劍術兵法は身を衞るものなり、されと是によりて身を殺す者あり、醫術は人を救ふものなり、されとも是によりて人を殺すものあり、飲食は生を養ふものなりされと是によりて我體をやふる事あり、國の大臣は國を治むべきものなり、されと是によりて國を亂るもの有、此境よく〳〵工夫すべし」、又耶律楚材の語に、興一利不如除一害とも云へり、

一得一失

〔史記淮陰侯傳〕廣武君曰、智者千慮必有一失、愚者千慮必有一得、○又一利一害の意に用ふ

一唱三嘆

〔禮記樂記〕清廟之瑟、朱弦而疏越、壹倡而三歎、有遺音者矣とあるに出つ、詩文を賞讃するに用ふ、

一分八間〔類聚名物考〕

毫釐の差千里を謬るといふか如し〔易乾鑿度〕云、正其本而萬物理、失之毫釐差之千里、

命は寶の寶

寶の中の寶といふ事なり〔大智度論〕云、設滿世間寶、無有直身命〔鬱草〕○〔尙書洪範〕五福一曰壽、蔡傳云、人有壽而後、能享諸福、故壽先之、

命にかへる財寶なし〔世話叢〕

命は法の寶〔毛吹草〕

命あつての物種〔俚言集覽〕

命の親〔全〕

命のかけかへはない〔全〕

命とつりかへ〔全〕

命から二番目（至て大切なる物をいふ）

命は食にあり〔俚言集覽〕

いの之部

〔日本書紀安閑天皇詔〕食者天下之本也、黄金萬貫不可療飢、

命の二ッあるもの（子あるものをいふ）〔全〕

命を全う持つ龜は蓬萊にあふ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕○命長けれは蓬萊を見る〔俚言集覽〕

〔吾吟我集〕「酒屋にも命をまたう持龜は正月毎の蓬萊にあふ」〔列仙傳〕云、有巨鱗之龜、背負蓬萊之山、抃舞而戲滄海之中也、

命は義によつてかろし　又運は天にあり命は義によつてかろし〔職人盡歌合〕

〔後漢書朱穆傳〕情爲恩使、命緣義輕、〔風雅集〕「命をばかろきになして武士の道より重き道のあらめや」〔俚言集覽〕

命を鴻毛より輕くす

〔司馬遷報任安書〕人固有一死、死或重於泰山、或輕於鴻毛、用之所趨異也、〔景行錄〕大丈夫用心剛、故輕死生於鴻毛、〔全〕

命は塵芥〔全引初井家日記〕

命長れけは辱多し

〔莊子〕壽則多辱〔古今集〕「殘なくちるそめてたき櫻花ありて世の中はてのうけれは」同抄めてたきは目やすきなり〔本朝俚諺〕

命を的にかける「命をかける」

〔源氏ふじばかま〕「數ならばいとひもせまし長月の命をかくるはぎぞはかなき」〔目さまし草〕病をもしらぬ醫師の毒の矢に命を的にたてるはかなさ」〔全〕

命の洗濯〔全〕

命の土用ほし〔全〕引〔モエクヒ〕

命の際〔全〕

命からく〔全〕

命が手にからむ〔全〕

命が盛む〔全〕

命を削る〔全〕

命かぎり又命限り根かぎり

〔童兒字盡〕に天命〔イノチカギリ〕〔續拾遺集〕「いかりれろす船の繩手はほろくとも命のかぎりたゆじとぞれもふ」〔全〕

いろ之部

命は風前の燈

〔五車韻瑞〕阮瞻元日會親友曰、人生如風中燭〔法苑珠林〕命如風中燈〔本朝俚諺〕

犬もとき

按するに犬も時と云事にや〔狹衣卷一〕いぬもときとたかやかにいふ、いとあやしきたとひなり、〔皇朝古諺〕

犬と猿

〔古本今昔物語廿六〕犬と猿とは中不吉者をいふ〔仝〕〔犬子集〕「猿廻し通りかゝるや犬の傍」

犬もくはぬ

〔前漢書九十八〕元后傳、太后知其爲莽求璽、怒罵之曰、汝屬父子宗族、蒙漢家力富貴累世、既無以報、受人孤寄、乘便利時奪取其國、不復顧慮恩義人如此者、狗豬不食其餘、天下豈而兄弟邪〔類聚名物考〕

犬もあるけは棒にあたる　棒にあふとも云

事をするものは禍にあふ事ありとの喩なり、一説に思ひ寄らずして、よい目にあひたるに用る諺なりとぞ、〔俚言集覽〕

犬も尾を掉る〔仝〕

犬ゑのこにもなじめばれもふ〔毛吹草〕○犬猫にもなじめはれもふ〔俚言集覽〕

犬猿もシイレに從ふ〔俚言集覽引梅草〕

〔愚按〕シイレは、仕入にて、躾をいふなるへし、無智の畜類にても、しつけ次第にて、用に立つものなり、まして人は、教育こそ肝要なれと云意なり、

犬は三日飼はれると三年忘れぬ

犬骨折て鷹の餌になる〔世話盡〕○犬骨折て鷹にとらるゝ〔尤之草紙とらるゝ物の品々〕

犬の前のかしこめ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

犬の尾をくふてめぐるが如し〔仝〕〔仝〕

犬の錢見たるが如し〔和漢古諺〕

犬の年寄りたるが如し

徒らに年寄りて、無才無能なるをいふ、〔前漢書貢禹傳〕云、犬馬之齒八十一、是諺の意に同し、又杜子美か詩に、空催犬馬年、と云句あり、〔證草〕

犬の子

いゐ之部

司馬相如が幼き時、其親相如を寵愛して、犬の子といひける事、史記に見ゑたり、日本にては小兒の覺ゑたるを、犬の子々々々と呼ぶ事とせり、〔全〕

犬の星をまもる　○犬の星を拜むやう〔俚言集覽〕

いやしき者の、及ひなきまゝに、心をかくるをいふ、〔愚管抄卷七〕末代には、犬の星をまもるなどいふやうなる事にて、ゑ心得ぬなり、〔十訓抄卷三〕連歌「花を見すてゝかへる猿まろ」を云ふ句に「星まもる犬のほゆるにぞろきて」と、俊成卿女のつけたるも同し〔皇朝古語〕

犬の子を屋根へ上たやう〔俚言集覽〕

犬に殺（サカナ）の番

〔白氏文集六十三〕渴馬守水、餓犬護肉、〔全〕

犬も朋輩鴈も朋輩〔全〕

犬になるとも大所（オホドコ）の犬になれ〔全〕

犬の遠吠

〔淮南子泰族訓〕人主有伐國之志、邑犬群嗥、雄鷄夜鳴、〔全〕

犬の川端歩行

好て出歩くも、一錢を費さゞるを云ふ、〔全〕

犬々三年人一代○人々三年犬一代○（儉約を守るをいふ）〔全〕

犬の齒に蚤　犬の齒にかみあてた　猫の齒に蚤〔全〕

犬にもくれず棚にもをかず〔民のかまど〕

犬はつぶてにかゝれとも之を投たる人にかゝらず

石臼藝○石臼藝つふて文字○〔和漢古語〕

人の藝能多けれとも、精しからさる者は、石臼の物として碾らさるはなけれとも、其器貴からさるか如き故、世話に石臼藝といへり〔醒草〕〔俗說辨〕云、武田信玄の家人長坂長閑、ゐる日今川氏眞、北條氏政二人の短冊を、信玄に見せたり、氏眞は甥にして氏政は婿なれは、信玄悅はれんと思ひしに、左もなくて、國持の武勇なうて、きやしやなるは、猫の鼠はとらて、毛色うるはしき如くなり、武道さへあれは無能なりとも、至てきやしやなりと云ふへし、武勇は武士の能なり、家の能にもあらぬ歌道の勝れたること殘多けれ、石臼は種々の用にたてとも、座敷にはあげず、茶臼は茶を挽く一能にて、座上にも至るなり、兩人の歌と手跡は石臼藝なりと批判せられたり云々、

石臼さらんより茶臼きれ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

石に花咲○岩に花〔漢語大和故事〕

あるまじき事の喩なり、然れども石上の花と云ものあり、〔代醉篇〕云慈利縣、武口寨、石上有花、如堆心牡丹、枝葉繚繞、雖精於畫者莫能及、或以物擊破其花拂拭之、其花復見、〔證草〕○〔和訓栞〕に本邦にも享保元年四月に、伊豫國禰祇尾村雲邊寺に、石に花を生す、葉は牡丹に似、花は山茶の如し云々、

石の物いふ世のならひ○岩も物いふ〔毛吹草〕

〔左傳昭公八年〕石言于晉魏檢、又晉劉曜傳云、石言於陝〔日本紀〕葦原中國者、磐根、木株、草葉、猶能言語、ちはやふる神代には、石に限らざるべし、〔證草〕○〔吾吟我集〕「山人の聲に答る谷わひのあたまをきけは岩も物いふ」

石佛にも物いはする

〔棠陰比事〕云、晉高祖鎮鄴時、魏州冠民縣華村僧院有鐵佛一軀、高丈餘、中心且空、一旦忽云、佛能語以垂教戒、徒衆稱賛聞于鄉縣、士庶雲集施利填委、縣申州府、高祖莫測其事、命循將尚謙、持香設供且驗其事、有三衛張輅、請與僧行詣其妖狀、乃卒入園寺、盡遣僧出避道場、

輅乃潛開其僧房、搜得一穴、通佛座下、即由穴入佛身、厲聲歷數諸僧過惡、衛將遂掘其魁、高祖命就彼戮之、以輅爲長河縣主簿、と是諺に似たり、〔本朝俚諺〕

石の上にも三年すめはあたゝまる〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

石に腰かけたるか如し〔全〕

石車に乘りたるか如し〔全〕

石て手詰たるか如し〔毛吹草〕全之

是はもと碁より起りたる詞なり、然るを、俗にあと先知らすに、物事をうけ合ひて、其事未だ果さゝる内に、又もだしかたき急用ども、ひたと重りて、終に約束の期來り、跡へも先へも、行かれぬやうに、なりたるなとにいへり、〔故事要言〕

石を抱いて淵に入る〔毛吹草〕全之

〔韓詩外傳〕申徒狄非其世、抱石而沈于河、〔二程全書〕釋氏其實愛身放不得、故說許多、譬抱石沈河、以其重愈沈、終不道放下石頭、惟嫌重也、〔證草〕○〔吾吟我集〕「後世しらで罪重き身は三途川の石を抱きて淵にしづまん」

石を以て水に投す

〔韻典折疑〕李蕭遠運命篇、張良受黄石之符、誦三略之説、以遊於群雄、如以水投石莫之受也
及其遭漢祖也、如以石投水莫之逆也、

石橋も叩て渡れ〔和漢古諺〕

石か浮んで木の葉か沈む

石に印判

家に鼠〔毛吹草〕○家に鼠國に盗人〔俚言集覽〕

〔徒然草〕其物につきて其物をついやしろこなふ物、數をしらずあり、身に虱あり、家に鼠あり、國に賊あり、小人に財あり云々、

家は弱かれ主は強太かれ〔全〕

家に勝た太鼓

家賣れは釘の價〔和漢古諺〕

家い高いより床の高いがよい

昔の家筋より今富榮なるがよしとなり〔俚言集覽〕

家貧くして孝子出る〔全〕

〔唐話纂要〕家貧則孝子、世亂識忠臣、

家貧にして親知少なく身賤きは故人うとし〔芦刈謠〕

〔愼子〕家富則疏族聚、家貧則兄弟離、〔文選曹顔遠感舊詩〕富貴他人合、貧賤親戚離、

家は一代名は末代〔俚言集覽〕人は一代名は末代とも〔全引初井家日記〕

色を見てあくをさせ〔毛吹草〕全之 ○色を見て要を察す〔續草〕〔世語雜〕

〔犬子集〕「色を見てあくさせべにの村もみぢ」〔鷹筑波〕「あくならで色を見てさせ花の枝」色を見て灰汁をさすの方是なるべし〔俚言集覽〕

色香にも出さぬ〔全〕

色の白いは七難かくす〔全〕

色の黑いにはにくまれぬが口故にくまれる(烏に喩ふ)

色氣より食氣〔俚言集覽〕

いろはのいの字もしらぬ

〔毛吹草〕「山はまだいの字もしらぬいろはかな」〔全〕

色は思案の外〔全〕

或曰破廉不如色と信なる哉、海志弱行の徒、動もすれは陷て禽獸行をなし、而して自ら恥ちず噫、

芋頭でも頭は頭〔全〕

芋がらで足をつく〔全〕

芋をもむやう　奉公人は芋をもむやうな〔全〕

芋をあらふやう　（雜沓の貌）〔全〕

芋の煮ぬたもしらぬ〔全〕○芋のにいたもでそんじない

芋ほり坊主

中山三柳の説に云、僧のつたなきを芋ほりばうすといふ、山の芋をほるに、冬はかれて見えす、むさとほりあさりては得へからす、芋のかれたるつるを尋出して、其すぢをたがへされはほり得る也、無智無學の僧にて、佛性の性の字は、女偏なり抔いふたぐひも、師匠のあとをつぎて、後住となりぬれは、先住のつるを失はしと、諸檀越の捨さるいはれ也、〔本朝俚語〕引〔醒睡隨筆〕

醫者の自藥効なし

〔韓非子〕諺云、巫咸雖善祝不能自祓、秦越雖善醫不能自治也、〔遯齋閑話〕云、田昆と云者閩人なり、醫を以て天下に名を著はす、尤も善く癆療を治す、病者群集して、常に數百千人に及ふ、形を觀脉を察して、病の深淺を知る、時日を期して愈やす、一も差はす、後に自ら癆療を患ふ、是に於て平日用る所の方藥種々を試るに曾て驗なし、遂に死す、

醫者の不養生

學者の不身持、神道者の不正直、坊主の不信心、陰陽師身の上さらす、なと、皆同し意なり

醫者もさじを投る〔毛吹草〕

〔駿臺雜話〕に扁鵲齊の桓公の疾を見て、二度までは尙は言ふ事ありしが、三度に及では、最早療治の手なしとて、藥匙をすてゝ、驚き走りき云々とあり、蓋自暴自棄の者には、力を附る所なきをいふなり、

醫は意なり

〔橘庵漫筆〕に諺に云、醫は意なりと、不朽の確言、諸事に通す、按するに、醫は衣也、衣服美ならされは行はれす、醫は威なり、威儀敦重ならされば服せられす、醫は異なり、異言異

體能く用ひらる、醫は夷なり、動もすれは人をそこなふ、醫は稻荷、よく尾を出さす人を誑らかす、〔子華子北宮意問篇〕醫者理也、理者醫也、意其所未然、意其所將然、而謹訓于理、夫是以謂醫

海鰛の頭も信心から〔毛吹草〕〔諺草〕

〔風俗通〕に汝南鯛陽に、田にして一の鑿を得たり、主未だ取らざる內、商人等、車に物を積て通りけるか是を見て、取りて車にのせ去りけり、不意の物なればとて、鮑魚一喉を其處に殘し置けり、頃ありて、其主往て見るに、最前の鑿はなくして、鮑魚のみありけり、因て大に怪みをなし、徧くかたり傳へけるに、次第に發向して、病を祈り福を求むるもの、引きもきらず、終に宮をたて、鮑君神とわかめ、巫など集り、もてはやしける程に、數百里間傳へ〳〵、其事大かたならず、其後程へて、かの商人來り、此由を聞き、是は我置し魚なりとて、堂上に上り、取て捨けるが、其後何のしるしもなく、成行けり、物の所聚斯有神、人共奬成之耳といへり、一喉の鮑魚、さまで禍福をいかで爲し得ん、されども人の信行するに至ては、此心迷ふが故に、病增しぬれは運盡たりと思ひ、或は神のうけなきと明らめ、驗あれは神の德とれもふ、物每我心にかくあらんと思へは、左あるやうに覺ゆるものなり云云、と〔梅園叢書〕に見えたり、是諺の善解と爲すべきなり、

鰯の頭をせんより鯛の尾につけ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

鰯のしけなる年は氣候かわるい

鰯で飲て精進落す

折角の精進も、鰯に氣の付かぬ爲、無効にする如く、鎖細なる事に注意せすして、思はす重大なる過失に至るをいふ、

いろがはまはれ〔諺草〕同之

〔醒睡笑〕いろかはまはれといふこと、物てとにあるへき遠慮なり、宗長のよめる歌に「武士の矢はせの渡り近くとも、いろかはまはれ瀨田の長橋」云々〔俚言集覽〕〔愚按〕急きて捷徑を求むる時は、巷曲に迷ふて却て迂回し、事急成を期する時は、錯誤ありて却て成らさるものなり、〔論衡〕に急行無善步〔陳師道詩〕卒行無好步、事忙不草書、とあるも諺の意にかなへり、

いろげはまはる

〔北條時分諺留〕に、此諺もいろがはまはれより出て、轉しいふなり、〔小町跡〕冬、時雨「山風のいろげはまはる時雨哉」知德〔同書〕冬、炭「くらべんと共にいろげはまはる炭」立圃〔俚言集覽〕

いろがは高火○急がば高鍋

上野國の諺なり、高火とは物を煮るに鍋を高くするをいふ、〔全〕

いろぐ鼠雨にあふ〔全〕○いそぐ鼠穴にまよふ

せいては事を仕損すると云に同し〔太田道灌が慕景集〕に短慮不成功のこゝろを「いろがすばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ村しぐれかな」、

伊勢や日向の物語〔皇朝古諺〕引〔伊勢物語知見抄〕

あなたこなたの一方ならぬ物語をいへり〔神代紀一書〕云、天鈿女復問曰、汝何處到耶、皇孫何處到耶、對曰、天神之子則當到筑紫日向高千穗櫛觸之峯、吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上と是より起れる諺なり〔諺草〕○本朝俗諺志には、伊勢人と日向人と、或寺に登寢せしに、魂互に入替りて、伊勢人は日向に返り、日向人は伊勢に歸りたるより、此諺起れるよし記せり

猶次條を參看すへし、

伊勢人はひがこと○伊勢はひがこと〔皇朝古諺〕

〔袋草子〕に、伊勢物語の事をいへる所に、伊勢は僻といふ故なりとて、僻事のやうに云ひ習はせり、此事古き諺にてあるへし、堀河院百首の中に、池の題にて、藤原忠房「いせならはひがことそとも思はまし大和なるてふみさかの池」かくいへるも、其世の諺ならは、かく歌には取入られまじきか、己に古代の事なれば用ひられしなるへし、又西行法師の歌にも、伊勢人はひかことしけりさゝ栗のささにはならで柴にころなれ」是等皆故由は、今更何の事とも知られさるを、或人の云く、此事強ていはゝ二説あるへし、一にはかの齊宮の犯されたまふ事の誠にて、京童のわざうたに、それとはさゝで、いせ人はひかことしけりとうたひけるか、後までも諺に傳へしにや、又伊勢や日向の物語とて、これらの國の人一所に寢たりけるが、魂の移りかはり侍れは、伊勢人ハ日向に、日向人は伊勢に行たりと云事のあれは、其事をや僻事といふならん、二ッの中齊宮の御事は、物語に侍れは、似つかはしき所も侍らんかといへる、げにさにてもあるべし云々、〔類聚名物考〕

伊勢へ七度熊野へ八度

伊勢屋稲荷に犬の糞（江戸に多き物）〔俚言集覽〕

痛い上の針〔毛吹草〕○いたむ上に針をたつる

痛む上に鹽をぬる

〔萬葉集〕山上憶良、沉痾自哀文ニ諺曰、痛瘡灌鹽、短材截端、此之謂也」、同歌「痛伎瘡爾波

鹽乎灌知布何其等久、益々母短物乎端伎流等云之何如（前後集）〔本朝俚諺〕

痛うなき腹さぐられな

此諺の意は、萬事に就て、人の疑をうけぬやうにせよと云ふとなり、〔拾遺集〕公任「山里の紅葉見にとやれもふらんちりはてゝこそ問ふべかりけれ」〔文選〕君子行に、君子防未然、不處嫌疑間、瓜田不納履、梨下不正冠、」是俗諺に類する語なり〔醒草〕

井の中の蛙大海をしらず〔毛吹草〕仝之

〔莊子〕云、井蛙不可以語於海、拘於虛也」〔後漢書馬援傳〕馬援謂隗囂曰、子陽井底蛙耳」〔醒草〕

井戸端の茶碗〔世話盡〕

井戸から火の出たやう〔俚言集覽〕

井のほとりに小兒を置か如し

あやうき事の喩也〔東坡志林〕云、聖人視天下之不治、如赤子之在水火、〔本朝俚諺〕

いつも新參

此は王渙之か、仕官常以其不過處、則無事、といへる意なるへし、〔和訓栞〕

いつも正月〔毛吹草〕

いつも月夜に米の飯〔俚言集覽〕

蜀山人の狂歌に「世の中はいつも月夜に米の飯さて又もふし金のほしさよ」

居るとこくぼむ　○ふむとこくぼむ〔仝〕

居たとこべつたり（懶惰なるをいふ）〔仝〕

ゐずばであへ〔毛吹草〕

砂長じていはほとなる〔毛吹草〕

〔古今集眞序〕に、沙長爲巖之頌、洋々滿耳、〔醒草〕

砂の中の黃金

生物に餌あり

生馬の目をぬく

田舍は口はつかし〔故事要言〕○都は目はつかし田舍は口はつかし〔和漢古諺〕

田舍に京あり〔毛吹草〕〔故事要言〕○京に田舍あり

田舍の學問より京の畫寢

威權を笠に着る〔俚言集覽〕

威勢爭ひ職がたき〔和漢古語〕

いとれしき子に旅させよ〔毛吹草及和漢古語〕全之　○可愛い子には旅させよ

大凡人の子たるもの、家にのみわる時は、父母の愛育を恃て、必怠惰放縱にして、恭敬揖讓を知らず、若一旦出て羇旅に在るときハ、艱難苦痛して、性を忍ふの道を知り、又人の爲に侮を受、辱めを得て不快百起、其心胸を苦しむ、此時に常て、邪氣自ら滅し、曲心自ら直に、人の善惡を見て已か身を省る、誠に旅に在るの益ならすや、程子曰、在旅之時謙讓柔和乃可自保而過剛自高、失其所宜安矣」と云々〔漢語大和故事〕

いとれしき子を杖に敎へよ

上畧「世の中の麻は跡なく成にけり心のまゝのよもきのみして」といふ如く、麻なくしては、よもぎも思ふまゝに、ゆかみねぢれて蔓るべし、親たらん人の分には、夫々の師をもとめて、よく〳〵敎ふべし、其上にあしからんこそ、子の罪なるべけれ、いとれしき子を杖に敎へよとは、道にかなひたる諺なり、〔梅園叢書〕

市にわざはひを買ふ

是は我方よりまうけて、惡事をまねく事をいへる諺なり、〔本朝俚語〕　○〔釋氏要覽〕に雜譬喻經曰、昔有一國、五穀豐熟、絶無兵疫、人民常樂、其王忽問群臣曰、我聞四方有禍祠似、對曰、臣亦未識、王遣求覓要見、臣遂推求、是時天神化作一物似猪、賣於市中、其臣問名、曰是禍母、四方之禍皆由此生也、問食、曰日食針一升、遂買進王、勅令畜養飼針、國乏乃牽於民、民輸不堪逃移他土、有智臣請殺、乃至斫刺無能傷害、遂焚之、身亦同火躍走入城、一切燒盡、此買禍母所致也、喩比丘不護戒身、欲火所燒身名俱失、

市の中の隱者〔毛吹草〕

〔文選〕晉王康琚反招隱詩に云、小隱隱陵藪、大隱々市朝〔匡草〕

言はぬは言ふにまさる〔毛吹草〕同之

〔源氏物語〕の歌「いはぬをもいふにまさるといひながらかれしこめたるは苦しかりけり」又「ことに出ていはぬもいふにまさるとは人にはぢたるけしきをそ見る」〔古今六帖〕「心には下ゆく水のわきかへりいはでおもふぞいふにまされる」〔本朝俚語〕○〔易繫辭傳〕默而成之、不言而信存乎德行、〔山谷詩〕云、萬言萬當不如一默、

いはぬが花

〔史記李廣傳〕引諺曰、桃李不言、下自成蹊と、いへる意に近し、

野猪武者　○ゐのしゝ武者兎兵法〔和漢古語〕

梶原景時、源義經の事をさして、野猪武者といへり、是進む事をしりて、退く事をしらすと云喩也、なべて進退の法をしらす、徒に勇める者を、猪武者と云、〔前漢書食貨志〕に云、匈奴侵寇甚、莽大募天下囚徒人奴。名曰豬突豨勇。〔服虔注云。豬性觸突人。故取以喩。〕是も野猪武者と云意に同し、〔醒草〕〔吾吟我集〕「侍のゐのしゝ武者といはるゝも虎口につよきさばをもつゆゑ」

缺唇（ヰグチ）が膳（エクボ）に見ゆる〔故事要言〕

池の端に子を置く　○井の端に子をおく

此は手をあてるはとしたはしくれもふを云、〔孟子〕より出たるならん、〔故事要言〕○〔尤の双紙〕あふなき物の品々「池の端に子を置く」「くせ馬の一さん」「馬の上の居眠り」〔孟子公孫丑上〕今人乍見孺子將入於井、皆有怵惕惻隱之心、

いやしむかなぎで目をつく

東國の俗諺なり、〔中臣祓〕に、天津金木乎、本打伐、末打斷氐、云云」度會延佳曰、金木（カナギ）は小き木の枝を云、奥州の俗、小木を金木といへり、〔文選〕に以筳撞鐘銑註云、筳小木枝也、言以木枝擊其鐘、聲音終不可發矣」、是筳を金木とするの證なり、物をあなどりて、れもひの外に、おくれをとりたる事などにいへり、西國にては、小きをかならしきと云ふ、〔本朝俚諺〕

いすかのはしのくひちがひ

いすかは小鳥にして、鵙、交喙、鶺鴒、などをよめり、此鳥、嘴の上下くひちがひて合はず、故に事の齟齬するを、いすかのはしと云ふ、〔吾吟我集〕「吾中ははなれもやらずおひもせずいすかのはしのねをのみぞなく」

陰德あれは陽報あり〔醒草〕同之

〔世說〕に云、有陰德必有陽報〕〔列女傳〕云、有陰德者陽報之德勝不祥仁除百禍といへり此れは楚の孫叔敖と云者、稚き時外に出遊て、兩頭の蛇を見て、殺して埋め、家に歸りて泣く、母其故を問ふ、叔敖の曰く、兩頭の蛇を見る者は必す死すといへり、我今日見たり、吾死せは母君をいかにせんと云、母其蛇何處にあるととふ、叔敖か曰く我は是非なし、餘人に見せましき爲め殺して埋めり、母の曰、陰德ある者は陽報あり、汝死せさるへしと、果して死せす、後令尹の官に舜り、楚國の政を執れり、是陰德とてひそかに德を修め、人の爲に善をなせい、人は知らされとも、天道に合ふによりて、顯はなる報ひありて、災難を遁れ、福隱を得る事をいふ、〔漢語大和故事〕○〔淮南子〕有陰德者必有陽報有隱行者必有昭名、

有名無實

〔漢書董翟傳〕漢淳敬撲、並行僞貌、有名無實、〔通典州郡部〕東魏將侯景、以河南地降梁逆亂相尋、有名無實、〔通俗編〕

今參り二十日〔毛吹草〕全之

奴婢の始めて來り仕ふるものを今參りと云ふ、〔源氏物語東屋の卷〕にも、いまゝゐり口をしからぬ事なめりとあり、俗諺の意は、奴婢のはじめて來り仕ふるもの、よく言行をつゝしみて、主人に忠をいたすも、わづか二十日ばかりの間にして、其久しきに及ては、必懈怠せざるはなしといふ事也、〔說苑敬愼篇〕云、官怠於宦成」是異語同旨なり云々〔匹草〕○〔吾吟我集〕「家なれぬはゞはわいらし今まゐり廿日鼠ものちはあれぬる」〔和訓栞〕今參り廿日と云俗諺あり、輟耕錄に、凡納婢僕初來時曰擂盤珠言不撥自動、稍久曰等盤珠言撥之則動、旣久曰佛頂珠終日凝然雖撥亦不動」、と見えたり、俗語に佛頂珠等と云ふ是なり、

息の香の臭きに主しらす

是は我身の行跡のわしき事あるをも正さすして、他の落度あるを咎むるを喩たる詞也〔漢官儀〕に刁存と云者、桓帝に仕へて、侍中尙書郎の官に至り、天子に近つき奉りて事を奏し、又は勅を奉はる、此の人殊の外に息の臭かりけれは、桓帝やかて雞舌香を賜ひしに、刁存は結局我に罪ありて、君より毒を下されたるならんと思ひ、家に歸りて妻子に暇乞しけると也、此故事より出たり〔故事要言〕

逸物の麝も放さねはとらす○**逸物の麝も放さねはしれね**〔民のかまど〕○**百貫の麝も放さねはとらす**

是は人才智ありとも、之を知る者ありて、用ひさるときは、世の用をなさゝるの心なり、〔麝臍方〕云、星山李剛曰、其爲物也、猛烈俊逸、搏鮮而食、浴水而潔、凌風而娛、一舉千里、自在無礙、及被羈紲心煩氣束、渴病生焉、庸夫不察緊定帽纓、掩塞鼻孔、不與之水、囚諸烟房、是但殺之而已、〔同〕

意馬心猿

〔自鏡錄序〕云、從意馬之害群任情猿之矯樹也」〔是心銘〕云、識馬易奪心猿難制」古歌に「ひかれてはわしき道にも入ぬへし心のこまにたつなゆるすな」〔本朝俚諺〕○〔參同契の注〕心猿不定意馬四馳〔林子三教會編卷六〕林子曰、心本淨也、而世人謂、之心猿者何也、蓋心之憧々往來、如猿猴之性、輕狂不定故也、後世不識寓言之微而謂猿猴能習定惑矣、

いくさ見て矢はぐ、〔毛吹草〕仝之　○敵を見て矢をはぐ

〔夫木集卷廿五〕浦、讀人不知「軍見て矢はきの浦のあれはころ宿をへたてゝ人はいるらめ」

〔素問四氣調神大論〕に云、夫病已成後藥之、亂已成而後治之、譬猶渴而穿井鬪而鑄兵、而不亦晚乎〔說苑雜言編〕に云越石父曰、人勿言也、譬之猶渴而穿井臨難而鑄兵雖疾從而不及也、〔皇朝古諺〕

いさかひ過てのちぎり木　○いさかひはてゝのちぎり木〔和漢古諺〕

今俗に喧嘩過ての棒ちぎりと云へり〔平家物語卷十一〕四國をは九郎判官せめたとされぬ、今は何の用にかあふべき、六日の菖蒲會にあはぬ花、いさかひ過てのちぎり木かなと、笑はれける、〔仝〕　○〔和訓栞〕ちぎり木は棒の如き杖をいふ、長さ我乳にくらべて截る故に名づくといへり、〔源平盛衰記〕に、いさかひ終りてのちぎり木の、風情なりと見たり、

いりまめのすましらひ〔和漢古諺〕　○いりまめのすましろい〔毛吹草〕

煮豆に花

〔吾吟我集〕節分の夜半にまきぬるいりまめも花咲春の種とこそなれ」〔倭訓栞〕いりまめに花

といふ諺は、白骨に肉づけるといへる類なり、

碇をおろす

嫌な妻も離縁した時は三百文損した心地する〔俚言集覽〕

いやしき妓の言葉に世のすみにごりを知る

是はふるき諺なるよし義政公の筆に見えたり〔和訓栞〕

以心傳心

〔傳燈錄〕佛付法於加葉以心傳心、

いぼわひもち〔毛吹草〕

いたちなき間の貂はこり　○いたちなき間のねずみ

〔盛衰記卷卅三〕鼬のなき間の貂誇とかやの樣に」〔源氏物語花鳥餘情〕東居、鼬のなき間の貂誇といふ事あり」〔空物語〕國讓上、こよひは、いたちの間とこそ、きゝたまひけるは云云、〔同上〕同、いたちのなき間のねずみ〔皇朝古諺〕

鼬が道を切たら石を投ぬとばかさるゝ

いねむりも奉公　○寢るも奉公〔俚言集覽引太平記〕

いゐ之部

〔吾吟我集〕「いねひりも奉公顔に梓弓いびきの音のする夜半かな」

磯際て舟をわる〔俚言集覽〕

入船の逆風は出船の順風　○我舟の順風は人の船の逆風

〔百川學海〕東坡泗州僧伽塔詩、耕田欲雨就欲晴、去得順風來者怨、此乃槩括劉禹錫河卜賦中語、同涉于川其時在于風、沿者之吉、泝者之凶、同蘄于野其時在于澤、伊種之利、乃穫之厄、

いぬる魚を惠美酒に備ふ　又逝る魚を惠比酒に頼む〔世話盡〕（就一作刈　穫一作穡〔本朝俚諺〕）

慇懃無禮　○慇懃尾籠

〔細川幽齋聞書〕男下のあまりに過たるは、かへりて慇懃尾籠になるなり、〔俚言集覽〕

戴くものは夏もお小袖

因果は車の輪今は錢の輪〔民のかまど〕　○因果は車の輪の如し　又因果覿面〔俚言集覽〕

怒れる拳笑顔にあたらず〔俚言集覽引齋藤記六〕

漢士の諺に瞋拳不打笑面といへり

違亂は未練の相〔俚言集覽〕

胃の腑にねちぬ〔全〕

いけんと餅はつくほどねれる

糸をひく

糸をひくに二義あり、一は貨縁禁援を云、川柳の句に「納豆の出世は上で糸を引き」といふ是なり、一は傀儡師の木偶をつかふ如く、陰に居て、人を引廻はすをいふ、

いづみのわく如し

いづる日つぼむ花〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

いたうとれはといやうに〔未詳〕〔墨朝古諺引樂華物語〕

◎ ろ之部

六道は目の前〔世話盡〕同之

是は人々後生の恐るべきは知れども、今生に六道ある事を知らず、既に今日は昨日の後生、朝は前夜の後生なる事をしらず、只日夜貪慾に耽り、恩愛の爲に人を傷ひ、恨を起さしむる事あれども、皆其報ある事をしらず、現世の報應は、死せされは受けすと思ふは、愚なりとの心なり、〔景德傳燈錄〕、唐山節度使、于頔と云人、始め湖州の刺史たりし時、紫玉禪師に

問曰、黒風吹其船舫、漂墮羅刹鬼國とは如何と、紫玉答て云、于頔は客作漢の風情にて、何の辨へたる事ありて、問立てするぞといひしかば、頔眞黒になつて怒る氣色あり、紫玉指さして云、それ今の詞一ッにて、早貴殿は、羅刹鬼國に漂墮せられんとするはと示されたり、〔故事要覽〕

六道に邊なし〔毛吹草〕

六十年はくらせと、六十日はくらしかぬる〔全〕

六十の手習　又　七十の手習

六尺踊り沖のこのしろ〔俚言集覽引世話雙六〕

六具をしむる

六具とは、甲、冑、頬當、鉄、佩楯、脇當なり、六具の中一具缺ても軍用に利あらず、六具をしめて後戰場に赴くべし、凡ろ人も思慮を胸中にしめて、事をさばく事、武士の六具をしめて戰場に臨むか如くする時は、動ずる事なくして、堅固なり云云、〔雅言〕　○〔和訓栞〕俗に、六具をしむると云は、甲をかためるより出たる詞也、僧家の六物など云事に、習ひたるにやといへり、六具は、身甲、鉄、背甲、脇盾、脛盾、髓盾、是也といへり、されと是を鎧の六具とす、又身堅の六具あり、戰場の六具あり、大將の六具あり、騎兵の六具あり、兵卒の六具、備の六具、攻戰の六具、相鬪の六具、警固の六具、番所の六具等あり、云云、

六段目　又末一段

是は、これきりにて仕舞ひといふ事なり、〔還魂紙料〕に昔の淨瑠璃は、總て六段なり、十二段をさきーも京都にては、井上播磨より、五段につめたりといふ、江戸にては、寶永正德の頃迄も、猶古風を失はず、土佐椽、和泉太夫等が、淨瑠璃皆六段なり、故に何にてもあれ、是ぎりといふ程の事を、六段目じやなどいふ諺、今もまれ〳〵にいふものありて、彼の梵天國の意に通するもあり、又末一段といふも同し云云、

論語讀の論語よまず　○論語よみの論語しらず〔和漢古諺〕

此諺學者の病痛に當れり、吾儕論語を讀まざるはなしといへとも、其中の一言も、これを身に行ふ事をしらす、誠に聖門の罪人ならん、程子曰、讀論語、有讀了全然無事者、是諺の意なり、〔雅言〕

論するものは中からとる

〔史記張儀傳〕に、卞莊子といふ者、よく虎を刺す、或時兩虎あるを見て、之を刺さんとせしかは、豎子之を止めて云、兩虎今まさに牛を食はんとす、牛うまくんは必爭ひ奪はん、然ら

は強き虎は傷を被ふり、弱き虎は鬪ひ死なん、其時に臨みて之を刺さは、一舉に二虎を得んと云ふ、卞莊子之に從ひ、果して兩虎を得たりとあり、世に此故事を以て、諺の出所とすされとも、穩當ならす、諺の意は、凡事を論するには、過不及なく、中を執れといふ事なるへし、〔全〕〔愚按〕卞莊子の話、移して一舉兩得の條下に注すへし、此諺はあらろ、ふものは中からとると同しく、蚌鷸の喩よく當れり、あ之部同條下參看すへし、

論をせんより證據を出せ、〔木朝俚諺〕○論より證據

論に負て實にかて ○論に負て理にかつ

理窟と道理とは、れのづから別あり、よし理窟には負る事ありとも、道理に背かさるを可とす、〔梅園叢草〕に云理窟と道理とへだてあり、理窟はよきものにあらず、たとへば親羊をぬすみたるは、親のあしきなり、親にてもあれ、惡は惡なれば、直に訴ふ可しといへるは理窟なり、親羊を盜むは惡ながら、親惡事あればとて、子是をいふべきやうなしとて、かくしたるは道理なり、人死しては再ひかへらず、歸るべき道あらば、なけきても歎くべし、歸らぬ道なれは、歎きて益なしといへるは、理窟なり、人死して再ひ歸らず、歸るべき道あらば、歎かずともあるべけれど、かへらぬ道こそ悲しきなど歎くは、道理也とあり、名言なり、道同しからざれは相與に謀らざるに如かず

籠鳥実を繰ふ〔毛吹草〕全之

〔鶏冠子〕、籠中之鳥、窒窺不出〕〔東坡詩〕、鳥囚不忘飛、馬繫常念馳〕〔勸善錄〕、籠養飛鳥繫閉走獸、爲其音聲形狀可悅吾耳目、爲我漑樂、令彼憂愁、又何不仁、若放之山林便得自在、何異罪囚得脫牢獄、一身自戒則一家必不殺、一家不殺一鄉漸效之、〔諺草〕

艫三年に棹八年 又艫三年に櫂の一時 又 棹三年に艫八丁

是へ棹をさすの、習ひかたきをいふ、〔俚言集覽〕

ろれつがまはらぬ〔全〕

〔和訓栞〕にろれつは、呂律の轉せるなりといへり、又れつがまはらぬとも云ふ、

◎は之部

鼻さきに身なる ○成るものは鼻から

〔韻會〕に云、人胚胎鼻先受形、故謂始祖爲鼻祖、〔書言故事〕に云、人受胎於母、其生始生鼻、〔孟海集〕に云、人之受氣而生、則先生鼻、々通肺々主氣也、男爲陽、々生於子、女爲陰、陰生於午、衆衞之行、子丑循膽肝、午未循心小腸、是以男子生鼻之後、目即生焉、目應肝膽、

女子生鼻之後、否卑生焉、否慮心小腸、目現於體外、陽之用也、否隱於體內、陰之用也、〔本朝俚諺〕

鼻の下長けれは命長し

〔五雜組〕に、漢武帝、ある時臣下に對して、相書に鼻の下の人中、長さ一寸なるは、年百歳に及ふとありといはれしに、東方朔、傍に居て大に笑へり、各、朔か無禮なる体を、帝に告げ申す、朔陳して、某かつて帝を笑ひ奉るにあらす、彭祖か面の長からん事をねもひて、笑ひ侍るといふ、帝其故を問はるゝ時、朔か曰、只今相書の說に、人中一寸あるは、百歳と見ゑ候へは彭祖八百歳と承るときは、人中の長さ八寸にや、其面定めて一丈もあるへし、此故に笑ひ候ひぬと、答へしかは、帝も又大に笑へりと見ゑたり、〔全〕

鼻の下か長い　又鼻たらし　（痴人をいふ）〔俚言集覽〕

〔王褒僮約〕に鼻涕長一尺〔北史齊宗室傳〕に文宣性唯懦、時有涕出、永安王浚恒責左右、因何不爲二兄拭鼻

鼻毛がのびた　○鼻毛　○鼻毛をみぬく　○鼻毛をかぞへる　○鼻毛をよまるゝ　○鼻毛亭主　○鼻毛にて蜻蛉をつる　以上〔同〕

〔尤の双紙〕見くるしき物の品々に「鼻毛のなかき」狂歌に「はなけにてとんはをつりし罪咎はあほう羅刹のせめやうくらん」〔犬子集〕「ふきちるもしらぬは春のはなげかな」〔全〕

鼻の下六万坪

〔傳家寶〕云、寧填万丈深坑、不填鼻下一横〔全〕○〔復齊漫錄〕云、劉諭爲豐城尉、性不飲酒、時推官某、善飲啖、抵邑公會、以諺語戲曰、小器易盈眞縣尉、劉答曰、窮坑難滿是推官、

鼻の下の建立〔全〕

鼻をつく

俗に主君の前を遠ざかるを、鼻を突といふ、〔空穗物語俊蔭卷〕に云、御供つかふまつりたりし人々は、皆はなつきはなたれぬ、〔清輔袋草子〕に云、少突鼻衆也、〔本朝俚諺〕○〔下學集〕「突鼻」日本世話

鼻をかく

〔平治物語〕に、一日さるがくに鼻をかくといふ、世俗の諺に見ゑたり、〔新撰字鏡〕に、銅をはなかくとよめり、今も「時の用にはなをかけ」といへり、〔和訓栞〕○（と之部參看）

鼻かけ猿

は之部

〔古本今昔物語卷五、二十三條〕世の人鼻欽猿と云は此事を云ふ〔皇朝古語〕

鼻にかける〔俚言集覽〕

鼻に反を打つ（高慢なる事）〔全〕

鼻につく（物に倦るを云）〔全〕

鼻へ手をあてゝ人をつかふ〔全〕（酷なる貞）

鼻藏たてゝ寢る〔全〕

鼻前分別（サキ）　又鼻前思案　又鼻前知慧

〔吾吟我集序〕「人の心鼻のさき思案になりにける」〔小町踊〕春上、名花、當長「名は花のさき案内かけふの春」〔全〕

鼻くすり（賂を云ふ）〔全〕

華も實もあり

〔揚子法言〕實無華則野、華無實則史、〔源氏物語〕に明石上（アカシノウヘ）のことを、月まつ花たちばなの、花も實も具して、れしれるかほりれはゆ、〔本朝俚諺〕

花のものいふためし

〔著聞集〕菅家、太宰府にはしたちける頃、「こちふかはにほひをこせよ梅の花あるしなしとて春な忘れそ」とよみ置たまひて、都を出て筑紫にうつり給ひて後、かの紅梅殿の梅の、片枝梅に向ひ給ひて、「ふるさとの花のものいふ世なりせはいかにむかしの事を問はまし」とながめさせ給ひたりけれは、かの木、先久於故宅、廢離於久年、（久十訓抄作レ猶）麋鹿於住所、（於住所十訓抄作ニ）猶樓所一無主又有花、（又有花十訓抄作ニ獨碧天一）かく申たりけるこそ、あさましともあはれとも、心もことはもれよばれね云云、予按するに、此花の物いふの歌、菅家の詠にあらず、〔菅家金玉集〕〔天滿宮故實〕及〔行狀〕〔和光傳〕〔神社考北野篇〕〔羅山文集菅家傳〕にも見えず、殊更〔後拾遺集〕に世尊寺の桃の花をよめる、出羽辨の歌にあり、云云〔本朝俚諺〕○〔俚言集覽〕此歌十訓抄にも菅家の詠とあり

花は根にかへる〔毛吹草〕全之

〔千載集〕崇德院御製「花は根に鳥は古巢にかへるなり春のとまりを知る人ろなき」〔老子〕夫物芸々、各歸其根、〔蘐草〕

花はみよしの人は武士　○花は櫻に人は武士

〔尤の双紙〕物の頭の品々に、一休の狂歌「人は武士柱は檜の木魚は鯛小袖は紅梅花はみよし

の」〔シカタ咄〕に小袖を絹に作る、〔俚言集覽〕

花は折りたし梢は高し〔鵜衣自在笑頭〕

花見て枝を手折る〔毛吹草及和漢古諺〕

花も折らず實もとらず〔俚言集覽〕

花か見たくはよしのへでざれ〔全〕

花より團子

〔犬筑波〕「花よりも團子と誰かいはつゝこと」〔吾吟我集〕櫻「佛にも彼岸櫻の花よりは團子と れもふたむけなるへし」〔寒川入道筆記〕花よりも團子の京となりにけりけふもいし〳〵あも もいし〳〵」〔堀川狂歌集〕「花よりも葛團子をやれもふらんよしのゝくにあたる山賤」〔犬 子集〕「花よりも團子ありてや歸る雁」〔全〕

花をやる

年若き時の風流なるさまをいふ、〔榮花物語〕初花「なは〳〵しき人のたとひにいふ、時の花 をかさす心はゐにや、〔續古事談〕時の花にてありけれは云々、時めく人をいふなり云云、

〔嬉遊笑覽〕

花に三しゆんのやくあり〔毛吹草及和漢古諺〕

〔鞍馬天狗謠〕花に三春の約あり、人にひと夜をなれうめて、後いかならん、

花のもとの半日の客、月の前の一夜の友〔毛吹草及和漢古諺〕

花咲き實なる〔俚言集覽〕

〔西王母謠〕是は三千年に、花咲實なる、桃花なるが云云、

馬鹿に兵法なし〔世話盡〕

馬鹿の冠辭は最多く使用する所にして、何人もしらざるものなし、然るに其詞の原く所、疑な き能はす、馬鹿の文字は〔史記始皇本紀〕に出づ、曰、二世皇帝三年、八月巳亥、趙高欲爲亂、 恐群臣不聽、乃先設驗、持鹿獻於二世曰馬也、二世笑曰、丞相誤邪、謂鹿爲馬、問左右、左 右或默或言馬、以阿順趙高、或言鹿者、高因陰中諸言鹿者以法、後群臣皆畏高云云、とあり、 蓋人をばかにするの意にとりて、馬鹿と云ふと、是普通の說なり、然れとも音訓を混し呼ふは、 本稱にあらさるへし、果して此文字より出んには、バロクとか、ウマシカ若くはマカと、呼 ふへきを、バカと呼ふは、穩ならさるに似たり、頃日〔翻譯名義集〕を閲するに、莫迦此には 癡と譯すとあり、因て知るバカは本と梵語なることを、何となれは、バカは白痴（バカ）をいふ、趙

は之部

高が鹿とは、本義れのづから相違あれはなり、又破家とも書けり、家産を破るは、白痴に等しきを以てなるべし、又バカを阿呆といひ、阿房とも書けり、阿房は秦始皇の、阿房宮に本つくといへり、始皇阿房宮を作りて、民を苦しめ、終に天下を失ふ、其義破家に同しきか故なるべし、要するに人を罵詈するの言、バカより簡にして便なるはなし、故に之を冠るの語至て多し、此には本條以下數語を擧げ、他は之を略す、蓋煩を省くなり、

馬鹿慇懃〔毛吹草〕

馬鹿律義〔俚言集覽〕

馬鹿者にねぢよ〔全〕○馬鹿ほど怖いものはなし

馬鹿者はよけて通せ〔全〕

馬鹿と餅にはつよくあたれ〔全〕

馬鹿の夫を待つやう〔全〕

馬鹿の孫ぼめ〔全〕

馬鹿な子は猶かわいゝ

馬鹿な子を持ちや火事よりつらい

馬鹿な親でも親は親

馬鹿の大飯　○馬鹿の三杯汁

馬鹿と相場には勝てぬ

腹ふくるゝこゝち

〔世繼物語〕にねぼしき事いはぬは、げに腹ふくるゝ心地しける、〔本朝俚語〕○〔徒然草〕に、ねぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば云々

腹つゞみうつ

〔土佐日記〕舟子どもは、はらつゞみを打てとあり、よろこびたのしむ事をいへり、〔莊子〕赫胥氏之時、民居不知所爲、行不知所之、含哺而熙、鼓腹而遊、又淮南子に見ゆ〔全〕

腹は海道　又　腹は鎌倉海道〔俚言集覽〕

腹八分に醫者いらず

此語眞に衛生の秘訣といふへし、詞鄙俚なるを以て輕視する事なかれ、

腹がへつてもひもじうない

腹も身のうち、食傷も病の中、

腹の皮はれは目の皮たるむ

腹はかりもの

始のさゝやき後のどよみ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕〔故事要言〕○始のさゝやき後のどやめき〔民のかまど〕

〔日本紀〕に驚駭をどよみとよみ〔萬葉集〕に響又動をよめり、

始きらめき奈良刀〔毛吹草〕同之

〔平家物語〕に云、平の貞盛の武威あるを猜みて、公卿達相議して、闇打にせんと構ゆる由を、貞盛聞て、其夜は木太刀を帶して舞殿し、暗に乘して之を抜く、刀光々衆耀る、後ち主殿司に渡して歸る、衆之を上奏し、貞盛を召て之を問ふ、對て云ふ、之を主殿司に問へと、乃ち主殿司を召す、主殿司木刀銀を塗るものを上れり、此事より言初て、終に世話となれり、〔故事要言〕

始きらめき神烏帽子〔世話書〕

始は人酒をのみ中頃は酒か酒をのみ終は酒か人をのむ

〔町人袋〕に始中終を、一杯二杯三杯に作る〔嘱言集覽〕○〔倭訓栞〕に、〔法華經の抄〕に云、初則人呑酒、次則酒呑酒、後則酒呑人、

始が大事

〔易訟象傳〕天與水違行訟、君子以作事謀始、〔書仲虺之誥〕慎厥終惟其始、〔詩大雅生民〕令終有俶、是萬事、其始を慎むへきを云へり、

坊主のくしたくはへ〔民のかまど〕

法師の公事たくみ〔大和故事〕同之○法師の櫛たくみ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

似合はぬ事に言ひ習はせり、但公事を、世に訴訟の心に用ふれども、公事は公けの事とて、外樣の外聞を繕ふ心をいふなり、〔故事要言〕

法師の軍はなし〔嘱言集覽引北條時分記〕

法師の不信心〔嘱言集覽〕

法師がにくけれハ袈裟までにくし

〔六韜〕云、武王登夏臺、以臨殷民、周公旦曰、臣聞之、愛其人及其屋上烏、憎其人者、憎其除胥、此語言異にして旨同き者なり〔嘱言〕○〔貞觀政要〕云、愛則不知其惡、憎而遂忘其善、はなしの腰を折る

〔破參子〕江戸廣小路「一聲や咄の腰をほとゝぎす」〔大藏禮曾子立事〕云君子不唱流言不折辭、

注不苟折第人解也、〔俚言集覽〕

はなし上手に聞手下手〔仝〕

はなしを綿に書いたやう〔仝〕

はなしい木から

はなしは半分にきけ

はなしの名人はうろの名人

春の寒いと秋のひだるいはこらゑられぬ〔民のかまど〕

春の甲子に雨ふれは旱り夏の甲子に雨ふれい洪水〔俚言集覽〕

〔四民月令引農諺〕云、春甲子雨乘船入市、夏甲子雨赤地千里、秋甲子雨禾頭生耳、冬甲子雨飛雪千里、

春花咲かぬ木は秋實らず

春の雪は麥俵

春袋

春は錢袋を縫ふに宜し、秋はぬふべからすといへり、蓋春は張、秋は空に、國音相通するか

故なり、

針にて見ゆる子はいみじきけうの子なり

〔空物語俊陰卷〕に見ゆ、是は夢に見ゆるなり、夢見草合せ考ふべし、〔皇朝古諺〕

針は小けれとも呑まれず〔和漢古諺〕

針を棒に取なす　○針ほどの事を棒はどにいふ〔俚言集覽〕

〔吾吟我集〕「手のきかぬ女子の親のせつかんに針を棒にや取なをすらん」

針の穴から天をのぞく「針のみずから天をのぞく「針のみずから天のぞく〔仝〕

針のむしろにすわるやう

橋に虹梁〔俚言集覽引森寺玉山書〕

はしにくわうりやう提灯につりかね〔和漢古諺〕〔毛吹草〕

〔愚按〕是はつりわはぬ喩なれは、箸に虹梁なるへし、前條橋に作るはいぶかし、

はしがなけれは渡られぬ〔民のかまど〕　○橋なき小川は渡られず

橋をこせば淡くなる

烹熟物を橋を越してもてゆけば鹽味淡くなるといへり〔俚言集覽〕

は之部

早牛も淀遅牛も淀〔毛吹草〕〔和漢古諺〕○早船も淀遅船も淀〔世語蠹〕

〔畜德錄〕に劉時卿曰、二人同舟して往く、一人性急なり、晝夜程を計り、稍阻めは輙ち憤懣形容枯悴す、一人性寬なり、舟に任せて寢食常の如く、顏色日々に澤ふ、其達するに及ては、二人齊く岸に登る、是躁進者の戒となすべしとゝへり、諺此意に同し、

早馬にしらばづな

信濃の諺、速なる喩なり、しらばつなは、糸取車のしらべづなの轉なり、〔俚言集覽〕

早くてわるいは大事なゝ遲くてわるいは猶わるし〔全〕

早起目の藥

走り船に塵ひかするな〔世語蠹〕

走る馬にも鞭○走り馬に策帆掛船に艫を押す〔俚諺集覽〕

〔說苑〕騏驥日馳千里、鞭不去其背、〔本朝俚語〕

走り馬の草を食ふやう〔俚言集覽〕

八万だら

數の多きをいふ、異見など言ふに此詞あるは、佛經の八万陀羅尼の如きに喩ふる歟、〔類聚名物考〕

八十の三歲兒

〔漢書文帝記〕七八十翁嬉戲如小兒、是異域同譚なり、老て再ひ兒となるといふも同し事也、〔影草〕

畑水練

〔藤原良基公嵯峨野物語〕に、はたけ水練、とかやのふぜいれはく侍り、一俗にはたけ水練、すびきの精兵、うさき兵法、陰の舞、などいへり、是は小藝をたしむ者、他の藝者をねたみ、其聞かさる所にては、ろしりをまうくるたぐひ、又は知らさる事をも、しりたるふりをして、言ひはるをもいへり、〔本朝俚語〕〔愚按〕經驗なき事を、座上に空談する類にて、言ふべく行はるへからざる、書生論の如きも、畑水練ところいふべけれ、

はたけに蛤を求むるやう〔俚言集覽〕

此は木にのぼりて、魚を求るといふに同し、〔孟子梁惠王篇〕に以若所爲求若所欲、猶緣木而求魚也、

は之部

鳩に三枝の禮あり、烏に反哺の孝あり、

〔慈元抄〕鳩に三枝の孝あり、歸雁行を亂らす、孝羊跪て乳を呑、〔學友抄〕に烏有反報食、鴉

有三枝禮、〔俚言集覽〕

鳩に豆鐵砲　○鳩か豆鐵砲をくふたやう

灰吹から龍がのぼるやう〔俚言集覽〕

灰吹と金持はたまるほどきたない

恥をれもはゞ命をすてよ情をれもはゝ恥をすてよ〔俚言集覽〕引〔身のかたみ〕

恥を恥とれもはゞは恥かいた事がない〔民のかまど〕

旗を擧る

〔後漢書劉表傳論〕天下勝擧旗者、莫不假以爲名〔俚言集覽〕

旗色を見る〔全〕

袴のまちにざこたまる〔毛吹草〕

袴かちくりで板目つける

羽なき鳥の如し〔俚言集覽〕

羽が生ねて飛ふやう〔全〕

齒なしの骨たくみ〔毛吹草〕○齒なしの大蛸〔俚言集覽〕

齒にきぬきせぬ

是は善き事にも、あしき事にも、卒忽に評判を添るをいふなり、又貴人高人の前ともいはず、我心に添はさる事は、强なくいやといふて、諾かはぬ人をも云ふ、〔故事要言〕

流行物は廢れる〔俚言集覽〕

はやる稻荷は鳥居からしれる〔同〕

萬事は夢

〔世話支那草〕に云、昔菅相丞、時平大臣が讒言によりて、昌泰四年（是爲延喜元年）正月二十日、太宰權帥に流されし時、詩を作て曰、離家三四月、落涙百千行、萬事皆如夢、時々仰彼蒼、〔羅草〕同之　○因に記す〔平澤元愷か筆適〕に余向歷筑紫而訪菅公遺蹟、得看公手跡、墨痕淋漓、筆致幽逸、實希世之珍也、其詩云、離家三四月、淚落數千行、世事都如夢、時々仰彼蒼、爲集適脫此詩云、後讀羅山隨筆載此詩、而淚落作落涙、世事都作萬事皆、羅山曰、此則杜子美絶句、偶相似矣、然菅家文章已不收此詩、則其說爲未的、」とあり〔愚按〕菅家後草に載る所の詩、謫草及羅山隨筆に見る所と正に相同し、蓋元愷の看たる眞蹟は、公後年是正する所なるべきのみ、

はたち坊主に牛のふぐり、五十坊主に鹿の角、

少年の僧は、墮落しさうにみゑて、反て墮落せず、牛のふぐりの如く、老僧は墮落すまじく見ゑて、反て墮落するもの多し、鹿の角の如し、五十坊主或は四十女ともいへり、〔俚言集覽〕

海鰻鱺も一期鰕魚も一期　○へびも一生なめくじも一生

杜詩に孔丘盜跖共塵埃といへり、俗の諺と意同し〔證草〕

婆々ろだちは錢が百安い〔俚言集覽〕

ばかす〳〵ばかされる〔全〕

はうぐわんひいき〔毛吹草〕

ばひあふものゝ中からとる〔全〕（あ之部爭ふものゝ條參看）

破竹の勢

〔晉書杜預傳〕兵威既振、譬如破竹、數節之後、迎刃而解、〔唐書王晏宰傳〕李德裕、以宰乘破竹勢不遂取澤州、爲有顧望計、

鋏と丁稚は使ひやう

裸でばちれふ

帶を逆に立ると客か歸る

孕女か火事を見ると子にあざが出來る

菜をかいて根を斷つな〔毛吹草〕

蓮葉あきなひ

價の、時によりて甚た貴く、又甚だ賤きを云、〔俚言集覽〕

初物七十五日　○初物を食て七十五日生のびる

前後七十五日の間は、なへて初物なりと、廣くいひたる詞なりといへり、又一說に、花落て後七十五日か、初めて其實食ふへしと云へり、〔全〕○〔愚按〕、初物を食ふて七十五日生延るといふは、味の美なるを賞する詞なり、久しふりにて鮮魚などの美味を食するを、命の洗濯なといへるも同し、七十五日と云は、四季の氣候七十餘日にして一變する故、當期の事にいふなるへし、人の噂も七十五日、なといふのたぐひなり、

薄氷をふむ如し〔毛吹草〕

〔詩小旻〕、戰々兢々、如臨深淵、如履薄氷、

はんぞくがぐち〔毛吹草〕

槃特は釋迦の弟子にして、愚昧なる事甚し、故に文殊の智恵に相對して、諺となりたるな

り、

はんらうがなみだ〔全〕

はゆる山は山口からみゆる〔全〕

母の尼をもていのらすへし

事は信心からと云に同し、〔古本今昔物語卷十四〕三十五條に然れば人の祈は、僧の清濁にも不依、只誠の心を至せるが、驗は有也けり、極樂寺の僧に驗劣れる人、若干の僧の中に有けんや、然れは母の尼君を以て可令祈也とは、此く昔より云ひ傳へたるなりけり、〔皇朝古語〕

萩の盛によき酒なし

〔藤原顯輔家集〕琳賢かもとより酒を送るとて、萩の花さかりは、よき酒世の中になし、此頃よき酒取出たる云云、〔皇朝古語〕

破鏡二たびてらさず〔毛吹草〕

〔揚升菴詩話〕に〔洞山語錄〕を引て、破鏡不復照落花難上枝」又五燈會元に出づ

旁若無人〔影草〕〔漢語大和故事〕

〔史記刺客傳〕已而相泣、旁若無人、始めて此に見ゆ、晉書中頗る多し〔王澄傳〕に探鵲數弄之、神氣蕭然、旁若無人、〔郭文傳〕頹然踞、旁若無人〔王猛傳〕被褐談當世之士、捫蝨而言、旁若無人〔中村忠誠恒言〕

繁昌の地には草はゑず

◎に之部

二の舞にて

人のまねをする事なり、〔榮花物語〕衣珠、今は二の舞にて、人のまねをするに、なりぬべきかと、いとくちをしきなり、〔盛衰記卷四十六〕和殿とても、非可打解、九郎樣に二の舞にや

と、存すれは上洛可相計と宣ふ、〔鎌倉殿誦經者に云ふ〕〔皇朝古語〕

二度目は馬の鞍〔民のかまど〕

二度ねぼて

老て再ちごとなると云に同し〔物類稱呼〕に奥羽にて、小兒をぼこといふ詞は、古代の遺語なるべし、東武にてもをぼこなど云、二度をぼこなど、いふ詞あり云々、

二度搗搦（ヒツクリ）〔故事要言〕

二度あることは三度ある〔俚言集覽〕

二枚の舌をつかふ〔全〕
二階から目薬をさす〔全〕
二階から紙帳〔全〕
二階から尻をあぶる〔全引森寺玉山書〕
二八あまりは人の瀬越〔全引梅草〕
二八月思ふ子を船にのするな〔毛吹草〕〔和漢古諺〕
二十五の菩薩も夫〳〵の役〔毛吹草〕
二足三文

今物の價の安きを、二足三文といふ諺は、元ト金剛（コンガウ）の價より出たり、〔きのふはけふの物語下卷〕に、こんごうは二足三文するものを云々、」といへる狂歌をのせたり、金剛は草履のたぐひなり、藺金剛、藁金剛、板金剛、種々あり、〔管蠡集〕

二足草鞋ははけぬ

人の業務は一事に專にして、多事を兼るなかれとの事にいへり、〔徒然草〕に或人弓射る事をならふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ、師の曰く、初心の人、二ツの矢を持つ事なかれ、

後の矢をたのみて、はしめの矢になをさりの心あり、毎度只得失なく、此一箭にさだむへし、と思へといふ、わづかに二の矢、師の前にて、一ツをねらかにせんと思はんや、解怠の心自ら知らすといへとも、師之をしる、此いましめ、萬事にわたるへしとあり、是諺の意に近し、

二月一ト月は粉糠三合てくらす〔俚言集覽〕
二の句が出ぬ

人間萬事塞翁が馬〔毛吹草〕〔和漢古諺〕〔諺草〕〔漢語大和故事〕

吉凶禍福の定りなきに譬ふるなり、〔東坡詩〕に、人間萬事塞翁馬、推枕軒中聽雨眠、其源は淮南子に出づ、昔シ塞上に翁あり、其馬を失へり、人皆之を吊す、翁曰、何ろ福とせざらんやと、數月を經て、其馬胡の駿馬を將て歸る、人皆之を賀す、翁が曰、是何ろ禍とせざらんやと、其子騎を好み、落て髀を折る、人皆之を吊す、翁曰何ろ福とせざらんやと、一年胡兵大に塞に入り、丁壯の者戰死する事十の九、此子獨り跛たる故を以て、父子相保つ事を得たりとあり、

人間の八苦〔毛吹草〕

〔釋氏要覽〕に、佛地論に云、衆生有八苦、一生苦、二老苦、三病苦、四死苦、五愛別離苦、六

所求不得苦、七寃憎會苦、八憂悲苦、

人間わづか五十年

〔尤の双紙〕短き物の品々に「人間五十年は夢まぼろし」○織田信長、鷲津丸根の急を救ひ、今川義元を討せんとし、前夜桶峽間に來り、將士を會し、驩飲曉に徹す、信長徐に起ちて舞ひ、古謠を唱へて曰、「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢まぼろしの如くなり、一度生をうけて滅せぬもののあるべきや、」と、繰返し〳〵つゝ、舞畢るや、袂を投して立ち、鞭を擧て馳す、左右能く屬する者數人のみなりと、其傳に見ゑたり、

人間盛に神崇なし〔民のかまど〕

〔史記李斯傳〕斷而敢行、鬼神避之、後有傚功、〔伍子胥傳〕吾聞之、人衆者勝天、天定亦能破人、〔正義〕に申包胥言、聞人衆者雖一時强暴勝天、及天降其凶、亦破於彊暴之人、

人間物をしらぬ

〔孫眞人衛生歌〕厲有序兮、犬有義、黑鯉朔北知臣禮、人無禮義反食人〔夫木抄〕茲因「れもひくま人はなか〳〵なきものをわはれに犬の主を知るかな」〔俚言集覽〕

人間みがいれはあふのく〔毛吹草〕○人間はみがいれは仰ぐ菩薩はみがいればうつむく〔野語述說〕

〔俚言集覽〕引〔カナ、ホシ〕

〔東雅〕雞林類事に、白米を漢菩薩といひ、粟を田菩薩といふ、

人面獸心〔和漢古諺〕同之

人として、仁義忠孝の心なく、邪慾放肆なるは、人の面形ありといへども、心は禽獸に同しといふ事なり、〔漢書贊〕云、夷狄之人、被髮左衽、人面獸心、〔靈臺〕○又見〔禮記註〕

人形にも衣裳〔毛吹草〕〔和漢古諺〕○馬兒にも衣裳

漢土の諺に佛是金裝人衣裳の語あり

人見て法とけ

人神々々ろこさりたまへ　又人神々々ろこ去り給へ聖德太子の仰なり

〔黃帝蝦蟆經〕に、針灸の時の三呪をのせて、下文に云、凡治病之時、誦呪三遍、然後鍼灸之とあり、〔俚言集覽〕

人參呑て首くゝる

是は己の分を知らずして、奢侈の爲に窮迫する者の喩なり、

女人に賢人なし　○女事賢人なし〔十訓抄〕〔故事談〕

に之部

〔東齋隨筆〕に、小野宮右府實資公をは、賢人大臣と申けり、中略 女人に賢人なしと答て、逃入たまひけり、〔皇朝古語〕

女房と鍋釜は古きほどがよい〔俚言集覽〕

女房にはれて御家繁昌 下句 家内安全とも〔全〕

女房を去たは錢百落した心持がする〔全〕

女房は家の道具

にくまれ子世にいづる〔毛吹草〕和漢古語〕同之

〔五代史〕諺云、偏愛子不保業、是今の諺と言異にして意同し、〔雜草〕 ○〔吾吟我果〕「にくまれ子世に出るてふたぐひかな憎より外にろたつ若竹」〔孟子〕に孤臣孽子其操心也危、其慮患也深、故達、諺此意なり、

にくまれ子世にはびがる〔俚言集覽〕

にくい鷹には餌を飼へ〔民のかまど〕同之

是は鷹にあらずして虎なるべし、鷹は反て饑ひしむるをよしとす、〔魏志〕云、呂布因陳登求爲徐州牧不得、布怒、登喩之曰、登見曹公言、待將軍譬如養虎、當飽其肉、否則噬人、公曰、不如卿言譬如養鷹、饑則爲用、飽則颺去、布乃解、〔俚言集覽〕

にくきものはいけて見よ〔毛吹草〕同之

〔菅家御集〕に「いのちがないさの松原いさてなを心つくしの人のはて見ん」〔諺草〕

にくい坊主の布施このみ〔俚言集覽〕

似たものは夫婦〔民のかまど〕 ○夫婦はいとこほど似る

似たものは鳥、〔毛吹草〕〔和漢古語〕

〔詩の邶風〕莫黑匪烏、俱曰予聖、誰知烏之雌雄、

似たるを友とす

〔平家物語すゝき〕「似るを友とかやの風情にて云々、〔世諺問答〕「似るを友とせるたくひもあり、〔俚言集覽〕 ○〔呂氏春秋〕荊有善相人者、所言無遺策、聞於國、莊王見而問焉、對曰、臣非能相人也、能觀人之友也、觀布色也、其友孝弟純謹、畏令如是者、其家日益、身必日榮矣、所謂吉人也云々、

似ぬ京物語〔世話盡〕 ○見ぬ京物語〔俚言集覽〕

〔枕草子〕うれしきものゝ條に「まだ見ぬ京物語の多かる云々、

日本一

〔大鏡三〕佐理卿、三島の額を書く處に、またにはかた、是にぞ、日本一の御手のにぼには、この後そとり給へりしか」、〔平家物語〕篠原合戰の處に、あつばれたのれは、日本一の剛の者と、くんでうするなうれとて、筱の前輪にれしつけて、是を謠曲にぐんでう、つよとてとあるはわろし、〔曾我物語四〕曾我兄弟の、小次郎をかたらひ得ざる條、五郎が申けるは之れろ、今はよき事あらじ、日本一のふかく人にてありけるものを」、〔義經記八卷九〕にも見ゆ〔晤語〕

日本の武士は名を惜む〔毛吹草〕〔世話盡〕〔本朝俚諺〕　○もろこしの虎は毛を惜む、日本の武士は名を惜む、〔和漢古諺〕

〔義經記四〕土佐をからめて、參りて候と申けれは、大庭に引すゑさせ、中略 猩々は血を惜み、犀は角を惜み、日本の武士は名を惜むと申す事の候ぞ、歸りて侍共に、二度面を向へし、ともれはとゐす云々、〔吾吟我集〕「すけなりのわかれをなけきあまになる日本の虎は毛をも惜まず」

〔愚按〕名を惜むは即實を勵む所以なり、實あつて始めて名之に從ふ〔莊子〕に名者實之賓也〔顏氏家訓〕に名の與實猶如形與影也、德藝周厚、則名必善焉、容色殊麗、則影必美、〔班固曰〕功不可以虛成、名不可以僞立、と乃ち論語にも君子世を終て名稱せられざるを惡むといへり

日本橋で知らぬ人にあつたやう〔俚言集覽〕

日光を拜まぬうちは結構といふな　○日光を見ずば奇麗をかたるな〔仝〕

雞寒うして木にのぼり鴨寒うして水に入る

〔老學菴筆記〕淮南諺曰、雞寒上樹、鴨寒下水、驗之皆不然、有一媼曰、雞寒上距、鴨寒下觜耳、上距謂足縮一、下觜謂藏其咮於翼間〔證草〕

雞の口となるとも牛の尻となるな

〔史記蘇秦傳〕寧爲雞口無爲牛後、〔本朝俚諺〕

雞の卵をあたゝむるが如し〔和漢古諺〕

遁る魚を惠美酒にまねらする〔毛吹草〕　○いぬる魚を惠美酒に備ふ〔世話盡〕

にげた魚は大きし

逃々月を見る平家（棋客の常言なり）〔俚言集覽〕

逃るも一手〔同〕　○逃るが奥の手

〔北齋書王敬則傳〕敬則曰、檀公三十六策、走爲上計、汝父子惟應急走耳、

逃る者道を擇まず

に之部

西はひんがし

〔伊勢物語智見抄〕に、にしはひんがしといふ事は、是なりけり、〔島朝古歌〕

西の國で百万石も取るやうな面〔俚言集覽〕

烹ても燒ても喰れぬ

〔禪錄〕に鐵饅頭の語あり之に同し、〔同〕

にゑ湯に水さしたるが如し〔和漢古記〕

にんにくむきたるが如し〔毛吹草〕

にぎれるこぶしゑめる面にあたらす

〔砂石集卷五〕世俗のことわざにも、にぎれるこぶしゑめる面にあたらすとて、〔島朝古歌〕 ○

〔言鯖〕嗔拳不打笑面 〔晉書劉伶傳〕嘗醉與俗人相忤、其人攘袂奮拳而往、伶徐曰、雞肋不足

以安尊拳、其人笑而止、又〔事物紀原〕〔歳時記〕に見ゆ

にがひさごにもとりゑ〔民のかまど〕

にごり酒はひげにつく〔世話盡〕

姙娠の時兎を食へは缺唇の子を生む〔俚言集覽〕

〔論衡命義〕故、姙婦食兎、子生缺唇、

錦の上に花をそふ

〔王安石詩〕麗唱仍添錦上花、李璧注錦上添花俚語、

錦を着て鄉に歸る

〔南史柳慶遠傳〕爲雍州刺史、帝餞于新亭、謂曰、卿衣錦還鄉朕無西顧之憂矣、〔又劉之隣傳〕

叙南郡太守、武帝謂曰、令卿衣錦還鄉、

にはをくづしてのにする

歌の謗なり、ニとハのてにをはを、ノの文字に改めつかふ事なり〔俚言集覽〕

俄盲目の杖失ひ

◎ほ之部

佛菩文神正直〔俚言集覽〕

佛さかれは魔さかる〔全引室町物語〕

〔宇治拾遺物語〕に云へるは、昔美濃國伊吹山に、久しく行ひける聖あり、阿彌陀佛より外の事を知らす、他事なく念佛申て年經にけるが、夜深く佛前に念佛申て居たるに、空中に聲あり

て、汝ねんごろに我をたのめり、今は念佛の數多くつもりたれは、明日の未の刻に必す來り迎ふへし、ゆめ〳〵念佛怠るへからすと云ふ、其聲を聞て、限りなくねんごろに念佛申て、水をあひ香を焚き、花をちらして、弟子もろともに念佛申させて、西に向ひて居たりしが、忽佛の御身より金色の光を放ち、さま〴〵の花をふらし、白毫の光、聖の身をてらす、觀音蓮臺をさしあげて、聖の前により給ふ、聖はひよりて、蓮臺に乘りて、西の方へ去り給ひぬ、さて坊に殘れる弟子とも、あく〳〵尊とがりて、聖の後世をとふらひけり、かくて七八日過て後、坊のげす法師ばら、念佛の僧に湯わかしてあむせ奉らんとて、木こりに奥山に入けるにはるかなる瀧に、さしれはひたる梢の木あり、其梢にさけふ聲しけり、あやしくて見あげたれは、法師をはだかになして、梢にしばりつけたり、木のぼりよくする法師のぼりて見れは、我師の聖を、かつらにて縛りつけてれきたり、此法師いかに我師は、かゝる目を御覽するぞとて、よりて繩をときれろして、坊へ具して歸りたれば、弟子とも心うき事なりと、なげきまどひけり、聖は人心もなくて、二日三日はかりありて死にけり、智恵なき聖は、かく天狗にあざむかれけるとぞ、凡そ神佛に心醉して事理に通せさる時は、妖魅の爲に乘せらるゝ事此の如し、諺是等を云ふなるべし迷信者宜く自省すへきなり、

佛のまねはすれど長者のまねはならず〔毛吹草〕

佛になるも沙彌を經る〔俚言集覽〕

沙彌とは、僧侶の初て得度したる者を云ふ、〔釋氏要覽〕に、始落髮後之稱謂也、梵音訛也、此譯爲慈息、謂安息在慈悲之地云々、

佛も本は凡夫〔俚言集覽引平家物語〕

佛も金色に御衣をあらたむ〔毛吹草〕

佛作て眼を入れす〔同〕　○佛作て魂入れす〔俚言集覽〕

佛をなほすとて鼻をかく「さいする佛の鼻をかく」〔仝〕（角直すとて牛を殺すと云ふに同し）

佛もなき堂へ參る〔毛吹草〕

佛の前の經をいふ〔仝〕

佛の疾で地獄へ落る〔俚言集覽〕

佛の顏も三度「地藏の顏も三度撫れは腹をたつ」

佛の前に鬼がすむ

佛の光も金次第

煩惱苦惱

〔枕草子〕に云々、あなわひしぼんなうくなうかな、いまは夜中にはなりぬらん、などいひたる」、とあり、是ろの頭の諺なるへし、〔本朝俚語〕

煩惱は首にのる

〔增鏡〕に云、ぼんなうはくびにのる、さかづきは花にのると、はやして、法皇の御むかひにまゐるとあり、是其頭の諺なるへし、〔全〕

煩惱の犬は打てども門をさらず〔全〕 ○**煩惱の犬は門にかへる**〔尤の壁紙〕

ほまれあらんよりろしりなかれ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

韓退之の、李原が盤谷に歸るを送る序に云、與其有譽於前、孰若無毀於其後、諺こゝに出たり〔諺草〕

ほむるはろしるの基〔和漢古諺〕同之

〔莊子〕云、好面譽人者、亦好背毀之、〔徒然草〕にほまれは又ろしりの本なり、身の後の名殘りて、更に益なしとかけり、〔同〕

ほゝをかは〔毛吹草〕 ○**頰をかは帽子とづきん**〔和漢古諺〕

〔俗語叢〕將猫兒食、拌猫兒飯、諺の意に同し、

頰から火か出る

〔南史曹景宗傳〕我昔在鄉里、騎快馬如龍、逐鹿數助射之、覺耳後生風鼻頭生火〔世話支那草〕

〔愚按〕今俗、赤面の甚しきにいへり、

ほろをかむ

後悔して及はさるを、臍を噬むといふ、〔左傳〕莊公六年云、楚文王伐申過鄧、鄧侯曰、吾甥也、止而享之、騅甥聃甥養甥請殺楚子、鄧侯弗許、三甥曰、亡鄧國者必此人也、若不早圖後君噬臍云々、

ほろの緒きるは罪うること

〔榮花物語〕初花 ほろの緒は殿のうへ、これはつみうることゝ、かねてはたばしめしゝかど、

〔皇朝古諺〕 ○坪內眞左得が〔神民さとし草〕といへる書に、生れ子の臍を、竹篦にて繼ぐ事、神代卷に、木花開耶日女命、三柱の御子を產給ひて、竹刀を以て、臍の緒を裁たまひしより、此國の風儀として、高きも賤きも、用る事なり、其竹刀終に林となる、今日向國竹屋是なゝよし」とあり、〔愚按〕諺の意は、臍の緒をきるといふを忌む事にて、臍の緒を繼ぐといはし

ひるにや未詳、

盃の前〔毛吹草〕

一に、上戸のひたひ盃の前といひて、あつき事に喩へたり、

盃三日は媳と姑の中がよくなる

棒くらはする

〔臨濟錄〕如今更思得、一頓棒喫、〔又曰喫吾三十棒了也、又曰喫鐵棒有日、〔宋朝俚諺〕〕

棒はと願ひ針はとかなふ〔淺瀬のまるべ〕○棒をねがふて針　○富士の山はど願ふて蟻封はど叶ふ

（ふ之部參看）

奉公は仕がち恩はとりがち〔俚言集覽〕

奉公人根性〔全〕

法華の性强〔全〕

蒂墮がせぬ

得と會意せぬ事をいふ、蒂落は熟す義なり、○〔古事記〕に熟瓜振折〔和名類聚鈔〕に熟瓜和名保曾知或說極熟蒂落之義也、〔全〕

北州の千年も限あり　○北州の千年〔尤の双紙長き戸の曲々〕

北俱盧洲といふ國の人は、命長き事千年なりと云ふ、〔世話支那草〕○〔俚言集覽〕に、須彌の北州の果報は、千年の壽命なりと、俱舍論に見えたり、

ぼさつ實がいればうつむく〔毛吹草〕○人間はみがいればあふのく、（に之部參看）

〔和訓栞〕に俗に菜穀を菩薩といふ、遠江天龍川の上にては、專ら稱す、○信濃にては米をぼさつといふ、

穗をひろふてめうにまいらする〔毛吹草〕

星まもる犬〔皇朝古諺〕○（犬の星を守るの條參看）

帆かけ船に艫を押す〔俚言集覽〕引〔爲愚痴物語〕

ほらはつら〔民のかまど〕

ほらも方便

ほうろく千に槌一ツ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

炮烙は土の燒物なり、諺の意は、何ほど苦心して、人の爲に種々の世話をするとも、一言の好惡によつて、忽ち怨を買ふ事あるをいふ、折角の骨折を、一朝にして無にするたとへに、槌

を添へたり、〔故事要言〕○〔吾吟我集〕「是そこのほうろく千に槌ひとつ月に押さるゝ星の光は」

骨折損　○骨折損の草臥まうけ

人をうやまひ、人を愛し、忠をなし孝をするにも、油斷はならず、まして神佛を拜み難行苦行するも、下心は恐ろしき巧なるあり、末の世には人もわるかしこくなりて、我望の筋を叶へんとする、手立の孝あり、手立の忠あり云々、是孟子にいへる、八つ起して勤むるも、利欲の爲なれは、盜人の徒なりと、中略 誠に忠するも孝するも、人を惠むも、手前勝手を離れされは、皆骨折損なり、〔大進夜話〕

梵天國　又六段目

むかし淨瑠璃に、梵天國と題するあり、梵天國の冊子によりて、作れるものなり、梵天國は御伽冊子の内にあり是利の末に作れる書類 此淨瑠璃は、慶長元和の頃、河内左内、南無右衞門等が、かたり出しゝが傳はりて、近く貞享元和の頃までも、虎屋永閑、天滿八太夫なんど、淨瑠璃の祝言には、必す此梵天をかたりけるとぞ、其故に、何にてもあれ、是ぎりと云程の事にて、梵天をうたふといひ、又うたふといふを略きて、梵天國とばかり、云ひし、諺は今ありて、淨瑠璃は絶たり、さて此諺は、いつ頃云ひろめしか、延寶中の冊子にば、たま〳〵見えたり、〔たきつけもおくひ〕延享五年印本

人の身をいため苦しめ、己か喜びとする事、人たるものゝ仁の道にはづれたり、かゝる男のくせとして、身体は風待空のいかのぼりより、なをぼんでんを急ぐものなり云云」とあり、此には國の字を略き、風待空のいかのぼりに比して、身帶の滅却するをいふなり、下略〔還魂紙料〕

◎へ之部

下手の物好　〔大和故事〕〔世間無盡〕同之

是は我が能も知らざる事を、無左と評議をして、了簡を加ふる者を譏る詞也、〔莊子帝王篇〕云、南海の帝を儵と云ひ、北海の帝を忽と云ひ、中央の帝を渾沌と云へり、或時儵と忽と渾沌の處へ遊びに往れけるに、渾沌殊の外悦ひて、種々の饗應あり、依て儵と忽と相談しけるは、此度渾沌の馳走餘りに過分なり、何卒此返禮に、渾沌の調法になる物を參らせ度とて、思案をしけるに、先つ人たるものは、耳目鼻口ありて、視聽食息の樂みを爲せり、渾沌獨此七竅なし、故に耳目鼻口を鑿て參らせんとて、一日に一竅つゝほりしかは、渾沌は七日目に終に死たりと也、〔故事要言〕○〔めのとのさうし〕物を御すき候はゞ、いちこ御すき候へ、名目に

下手の物すきと云事有り云々

下手の横好〔俚言集覽〕

下手の道具だて〔全〕
下手の金的（カナマト）〔全〕
下手の庖刀百返あらへ〔全〕
下手の大工指をきる
〔韓文〕不善爲劍、血指汗顏、〔全〕
下手の大連〔毛吹草〕〔和漢古語〕
下手の長談議〔全〕　○下手の長談議高座のさまたげ〔民のかまど〕
琴笛のたぐひ、すべて何わざにまれ、今しばしと、人の思ふほどにて、とぢめて、のこりゆかしくれもはせまほしき事になん、上手はさる心しらびするを、わるものゝくせに、かたへの人の、しのびやかにあくびうちするをも知らずて、ものするぞかし、〔淺瀨のしるべ〕
下手の高慢〔俚言集覽〕
下手の長置き百目の損（碁客の常言）〔全〕
下手の考ひ休むに似たり〔全〕
下手の長碁〔全〕
下手碁にだめなし〔全〕
下手功者〔全〕
下手律義
〔堀川狂歌集〕「淺くとも事はかけぬに秋霧をたてゝふかきは下手律義かな」〔全〕
蛇に足なし魚に耳なし〔漢語大和故事〕同之
〔淮南子〕兎緣無根而生、蛇無足而行、魚無耳而聽、蟬無口而鳴、〔代醉編三十九〕朱翌云、畫蛇著足無用處、爲蛇畫足見戰國策與史記、按、本草蝮蛇、陶隱居注云、蛇皆有足、燒地令熱以酒沃之置中足出、〔酉陽雜俎〕蛇以桑柴燒之則見足出、曲江老兵、捕一蛇燒之四足垂出、如雞足狀此說の如くなれは、蛇に足なきにもあらす〔藻草〕○〔愚按〕蛇に足あるもの往々之あり、敢て怪むに足らず、諺の意は、人の五體を具備して、其行ひに欠る所あるは、彼の虫魚にも劣れりとの諷喩なるへし、
蛇になる
〔賢愚經〕に云、人あり一生勤苦して、財寶を蓄へ、瓶中に滿てゝ之を埋め藏せり、死して後蛇となり、來て彼の瓶を護て離れす云云とあり、執着の深き者は、死して蛇となると云ふ事なり、

蛇のなまころし

蛇も一生蜈蚣も一生

蛇にかまれた者は朽縄にれそる

蛇は七曲り曲りても我身の曲りたるをしらず

臍が笑ふ　又　へろが笑ふ　又　へろが四ツ竹を打つ

〔鶉衣後篇〕臍頌に、我朝に、人を嘲りては、臍か笑ふともいへり、〔俚言集覽〕

臍が西國する（甚しく嘲り笑ふをいふ）〔全〕

臍か茶をわかす〔全〕

臍の下へ氣を落しつける〔全〕

瓢箪から駒が出る〔和漢古諺〕　○瓢箪から駒も出ず〔毛吹草〕

〔卜卷狂歌集〕うきにうきたる人の心には、へうたんから駒がかけ出る、〔和訓栞〕へうたんから駒が出るといふは、張果の故事、印月江の語録に見ゆといへり、張果老瞎破胡蘆とあり、張果紙を以て驢馬とせし事、太平廣記にあるを、合せて描きしなるべし、○〔太平廣記〕張果嘗乘二白驢一、日行數万里、休則疊之如紙、置巾箱中、乘則以水噴之還成驢矣、

瓢箪の川流れ〔俚言集覽〕

瓢箪で鯰を押へるやう

物のはづるゝをいふ、下官幼き時、佛經を見侍りしに、道理のたがふ事を、胡蘆子鯰尾を捺か如しとなむ、いへる喩ありしと覺え侍る、今何の文にありしといふ事を忘れぬ、胡蘆子は夕顔の實なり、〔世話支那草〕

絲瓜の皮のだん袋

〔物類稱呼〕に諺に、へちまの皮のだん袋といふ事あり、是はへちまにはあらず、「ヘチクワン」が、馬の革、一駄袋といふ也、「ヘチクワン」は觀ノなり茶人にて、茶器を革袋に入れ、馬につけて遊行せしとなり、按するに、へちまの皮といふ諺は、累しき心を棄去る時の詞なり、徽纒を捨るの意也、「ヘチクワン」の說信しがたし、毛吹草に「へちまの皮とも思はぬ」狂歌に「心にはへちまの皮をたやすなよ浮世を穴に落さんがため」〔俚言集覽〕

へちまの皮とも思はず〔毛吹草〕

平家をはろぼすは平家

平二が瓜を耕作すれは源太が坐して之をくらふ

部屋住み三年山伏の峰入り〔毛吹草〕

屁撒りて尻すぼめる〔大和故本〕世話盡

へらぬものなら金百兩死なぬものなら子一人〔俚言集覽〕

べい〳〵ことばがやむべいならかりても三百つんだすべい〔全〕（上野の諺）

辯舌水の流るゝが如し〔醒草〕

〔詩の雨無正〕に巧言如流、俾躬處休、〔晉書列傳二十〕郭象字子玄、少有才理、好老莊能清言、大尉王衍每云、聽象語、如懸河瀉水注而不竭、

◎と之部

虎嘯けば風さはぐ龍吟ずれば雲起る〔和漢古諺〕同之、上句〔毛吹草〕同

〔易文言〕雲從龍風從虎〔淮南子〕虎嘯而谷風至、龍擧而景雲屬、〔醒草〕○〔瑯邪代醉篇〕張璠曰、雲出則龍必隨之、風出則虎必從之、猶曰龍從雲虎從風也、今按、此說甚異諸家、而理至、凡龍起必雲、而謂龍能致雲非也、虎出必風、而謂虎能致風非也、猶蟻徙必雨、乃雨氣感蟻、蜥蜴聚必雹、乃雹氣感蜥蜴、謂蟻能致雨、蜥蜴能作雹可乎、古人多倒語成文、後人不達、便成滯、古樂府云、虎嘯谷風起、龍興景雲浮、淮南子云、虎嘯而谷風至、龍擧而景雲屬、王子淵、聖

主得賢臣頌云、虎嘯而風列、龍興而致雲、無怪乎今之誤也、

虎に翼をつくる　○虎につばさかけ馬にむち〔和漢古諺〕

〔揚子法言〕或問酷吏、虎哉々々、角而翼者也、〔韓詩外傳〕無爲虎傅翼、將飛入邑擇人而食、

〔前漢書〕假賊兵爲虎翼〔日本紀〕天武天皇赴吉野、或曰、虎著翼放之、〔書言故事〕益已强之勢一日虎而翼〔本朝俚諺〕

虎を養ふてうれひをのこす

〔漢書〕張良謂漢王曰、今釋楚不擊、是養虎自遺患也、〔戰國策〕同之〔通鑑綱目〕養虎得噬是かひ犬に手くはるといふに同し〔全〕

虎の尾をふむが如し〔和漢古諺〕同之

〔書君牙〕心之憂、危若踏虎尾、〔月清集〕「もの〻ふのさげはく太刀のしりさやの虎の尾ふみてれそろしの世や」〔醒草〕○〔易履卦〕履虎尾不咥人亨、又眇能視、跛能履、履虎尾咥人凶、

武人爲于大君、

虎の口をのがるゝ

虎の子をわつかふやう　○虎の子を畜ふやう〔俚言集覽〕

物を秘藏するを、虎の子のやうにすると云へり、虎は子を愛すること甚し、先年朝鮮にて或獵師虎兒を獲しが、翌日又母虎を見る、母虎怒て來り向ふ、獵師怖れて樹に攀づ、母虎仰ぎ之を盼みつめ、數時間動かず、獵師怪み下て之を見れば、母虎腸裂けて已に死せりと、彼國の新誌に見えたり、以て其愛の切なると、其性の猛なるを想ふべし、

虎の子渡しするやう

〔繪本故事談〕に、虎三子あり、其一子惡虎にして、二子を食はんとすれども、母虎傍にありて遂げず、故に母虎暫くも去る事能はず、河を越る時は、先つ惡虎を渡し、次に一虎を渡して、前の惡虎をつれ歸り、又一虎を渡して、後惡虎を渡すといへり、

虎は千里行て千里かへる　○虎は千里の藪をこす

〔犬子集〕「丑の日したる事を長引」と云句に貞德「ゑらべたゞ千里をかへるとらの時」〔五雜組九十一〕虎則千里之外、輒迷不返とあり、西土の俗說と異なり、〔全〕

虎は子を思ふて千里をかへる〔尤の双紙〕

虎は死して皮をとゞめ人は死して名をとゞむ〔俚言集覽〕

〔五代史王元章傳〕豹死留皮、人死留名、

虎は風に毛を振ふ〔全〕

虎ふす野邊につれ、くじらよる浦にゆく〔和漢古歌〕上句〔毛吹草〕同

虎狼より漏が畏ろしい　○人の口れそろし〔俚言集覽〕

虎と鼠

〔東鑑廿一〕論勝劣已如虎鼠〔皇朝古諺〕

時にあへは鼠も虎となる

〔漢書東方朔傳〕云、用之則爲虎、不用則爲鼠、この意を歌に、宗尊親王「虎とのみ用ひられしはむかしにて今は鼠のあなう世の中」〔全〕

時はあひがたくして失ひやすし

〔漢書韓信傳〕に云、功者難成而易敗、時者難値而易失也、〔淮南子原道訓〕聖人不貴尺之璧而重寸之陰、時難得而易失也、〔本朝俚諺〕

時にあはず〔漢語大和故事〕同之

〔郁離子〕に云、鄭之鄙人學爲盜、三年藝成而大旱、盜無所用、乃棄而爲桔槔、又三年藝成而大雨、桔槔無所用、則又還爲盜焉、未幾而盜起、民盡改戎服、鮮有用盜者、欲學爲兵則老矣、〔醉草〕

時はまちがたし

〔濫山警策〕云命不可延、時不可待、〔全〕

時の代官日の奉行〔俚言集覽〕○時世時節

時をしらぬ山伏は夜も頭巾〔民のかまど〕

時と所と位と承と相應すへし〔和漢古諺〕○〔俚言集覽〕に承當作年草体之誤ならんといへり、

時の用には鼻さへかくる　○時の用には鼻をそげ〔俚言集覽〕

差當りての要用には、大事にすべき物とも云はせず、先遣ひて、間を渡すべき事を云〔故事要言〕

時の花をかざしの花にせよ

時世に從ひて、身を立てよとの事なり、〔盛衰記卷十四〕時の花をさかしの花にせよといふ事あり、〔皇朝古諺〕

歳在中年常在事故

〔續日本紀〕養老五年二月甲午、元正天皇詔曰、世諺曰、歳在中年常在事故、これ古への諺なり、故にこれを記す、〔本朝俚諺〕

としぎり

くだものなどの、かつてならぬ年あり、これを年切と云〔後撰集〕に法皇かへり見たまひけるか、のち〳〵は、時ならぬところへ、ありしやうにもわらす、なりにければ、里にのみ侍りて奉らせける、せかひの君「あふことのとしぎりしけるなげきには身のかずならぬものにぞありける」是不遇を、菓のとしぎりにたとへたる歌なり、菓物の不遇は、又來る年はなるべけれども、人世の不遇に至ては、花も咲かず實もならずして、生涯をすごすたぐひあり是を一生きれともいふべし〔全〕

年とはんより代をとへ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

年よりの子は影なし〔漢語大和故事〕同之

〔風俗通〕云、老人子無影〔影草〕○俗に人の疲弱なるをかけのなきといふは〔風俗通〕に老人子無影と見えたり〔夫木集〕「日にろへて姿ぞ影になりにけるやせの里なるいもこふるとて」

〔和訓栞〕○〔錦繡萬花谷〕云、老者子無影

年寄は犬もあなどる〔俚言集覽〕引北條時分影問〕

年寄の冷水〔俚言集覽〕

年寄の吉原通ひ〔全〕

と之部

年寄うそいはず〔全〕
年寄と釘のあたまは引込だがよし
年はくすり
鳥のつばさ〔毛吹草〕○鳥のつばさ車の兩輪〔和漢古語〕
鳥は枝のふかきにあつまる
〔淮南子〕水積而魚聚、木茂而鳥集、〔劉向叢說〕樹高者鳥宿之、〔本朝俚語〕
鳥は古巢にかへる〔毛吹草〕
鳥なき里の蝙蝠〔毛吹草〕〔談語大和故事〕〔藪草〕同之
〔夫木抄〕「人もなく鳥もなからん島にてはこのかはほりも君をたづねん」又「うらさびて鳥たに見ねぬ島なれは此かはほりそうれしかりける」〔俚言集覽〕○〔尤の双紙〕用ひらるゝ物の品々に鳥なき里の蝙蝠大名のひとり子
鳥籟で蠅をさすやう〔全〕
鳥は食ふともどりくふな
「ドリ」は、鳥の脊骨につきたる、赤丹色の血をいふ、西教寺潮音云、本草鴆條下、鴆一名同力、弘景曰、江東人呼爲同力鳥、並啖蛇、人誤食其肉立死、脊血毒なる故に、鴆に喩へて同力と云、〔全〕
鳥のあみはる宿
〔紀貫之集〕門前雀羅張「世とゝもに鳥網はる宿なれは身はかゝちんと來る人もなし」〔漢書〕下邽翟公、爲廷尉賓客塡門、及廢、門外可設雀羅、後爲廷尉、賓客欲往、翟公大署其門曰、「死一生廼知交情、一貧一富乃知交態、一貴一賤交情乃見、〔類聚名物考〕
とりないて夜深し　○雞が鳴て夜がふける
是は何事によらず、思ひ立て未だ其事の成否も知れがたきをいふ、伊勢物語に云々、〔故事學言〕
鳥鳴けば風ふく〔漢語大和故事〕全之
〔曲禮〕前有塵埃則戒鳴鳶、注云、鳶鳴則將風〔藪草〕
鳶の子鷹にならず〔民のかまど〕
鳶が鷹うむ　○鳶も鷹うむ〔毛吹草〕〔漢語大和故事〕
〔詩小雅傳〕古語云、鴞鴞生鵰、」是鳶が鷹うむと同意なり〔藪草〕○荒井堯民が〔談鋒資鋭〕に云、越絶書に曰く、蕙の種は蕙を生す、蕪の種は狂を生す、桂の實は桂を生ず、桐の實は桐を生

す、此論は常の理のみ、必しも然らす、凡ろ梨を種る一梨十子、只三子梨を生す、餘は皆杜林檎の類を生す、齊民要術 鬬三子を生む、一は鵠となる、鸛三子を生む、一は鶴となる、夏雀は鶉を生み、楚鳩は鷃を生み、泊宅論 鱸は百數生み、鱸となるものすくに十二、餘は或は蛇となり蝨となる、魂水燕談 此則氣の裸を得るものなり云云、〔愚按〕舜叟の子に舜あり、盜跖の弟に柳下惠あり、一概に常理を以て律すべからず、是諺ある所以なり、

鳶も座作から鷹と見ゆる

人の起居動靜につき、放埒ならぬやうにと、嗜まするの詞なり、〔應鶴方〕に李爛か云鷲と云ひ低强と云ひ、晨風といひ鳶と云ふ、皆鷲の類也、足青く目黑しとあり、又魏の彥深か鷹の賦に、鶉頭の如く、烏首に似たりとも云へり云々、〔故事要言〕

鳶の身ふるひしたやう〔俚言集覽〕

ところを得ぬ玉作り

〔古事記中〕に垂仁天皇の時、皇后狹穗姬の兄狹穗彥謀叛す、事發はれて誅せらる、皇后此難に赴く、天皇軍中の力士に勅して、皇后を取り還さしむ、其下に云、軍士等還來奏言、御髮自落、御衣易破、亦所纏御手之玉緒便絕、故不獲御祖、取得御子爾、天皇悔恨、而悉作玉人等、皆奪其地、故諺曰不得地玉作也、

處ならひ、國きやうだん、つくしなまり、〔和漢古諺〕上一句〔毛吹草〕同

處かはれば品かはる

古歌「物の名も處によりてかはりけりなにはのあしも伊勢のはまをぎ」〔俚言集覽〕

處に似せて繪を書く〔故事要言〕

處には事なかれ〔民のかまど〕

毒のこゝろみ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

〔太上感應編〕云漏脯救飢、鳩酒止渴、〔涅槃經〕云譬如愚人見師子王飢時唾眠、欲覺之、如人以指置毒蛇口、如欲以手觸灰覆火、〔平治物語〕云、毒藥變して甘露と、毒藥變して良藥となる〔毛吹草〕全之

〔淮南子〕云蝮蛇螫人、傅以和蕙則愈、〔註云和蕙野葛、毒藥、〕〔瞬耕錄〕に云、骨咄犀は蛇角なり、

〔淮南子〕云蝮蛇螫人、傅以和蕙則愈、〔註云和蕙野葛、毒藥、〕〔平治物語〕云、毒藥變して甘露と、なるといふ事あればと見へたり、〔全〕○〔故事要言〕に云〔瞬耕錄〕に云、骨咄犀は蛇角なり、

其性至て毒にして、能く毒を解す、蓋毒を以て毒を攻る者也、故に蠱毒犀と云、

毒を食はゝ皿をねぶれ〔毛吹草〕同之

〔水滸傳〕云一不成二不休、〔又云、一不將二不滯、〕〔俚言集覽〕○世俗遂を害事と心得るは不可なり、只一旦見込の立らたる事は、人のうーりを顧みず、成功を期すべーと云ふ意なり、

毒の虫は頭をひしき、腦をとり、仇の末は心を割き膽をとれ、〔全〕引〔活版曾我物語〕

毒蛇の口をのがれたる心地〔俚言集覽〕

〔安宅謠〕に、虎の尾をふみ、毒蛇の口をのがれたる心地して、陸奥の國へろ下りける、

隣嚴しうして寶まうくる〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

怠惰の者も、傍に勤勉者あれは、自然恥る所ありて、自身の德とも成るをいふ、〔日記故事〕

云、昔魯の國に、獨住の男あり、或夜其隣の婦女、風雨烈くして、我家損して居られざりければ、彼獨住の男の方へ、走り來りて宿からんといへども、男固く戸をとぢ開かず、牆より言をかけて云、我聞く男女は六十ならされは同居せずと、今其方も、某も年若し、此故に內へ入れずといふ、女云、君は柳下惠か不建門の女を抱いて寢せられし事を、知りたまはずや、同居すとも、不義さへなくは苦しかるまじ、男云、柳下惠は、左樣にせられても、人は受て譽もすれど、吾乂其万を留めたらば、柳下惠をまねて、却て不義をせし抔と嘲けられぬべしといへり、孔子之を聞し召て、ほめられ、善哉柳下惠を學はんとする者、未た此に似たるはあらしと、宣ひしと也、是寡婦、隣きひしくして、道の寶をまふけたる也、〔故事要言〕

隣の寶をかそふるか如し〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同

〔吾吟我集〕世話「歳の暮」「老の身に末の月日をかそふるや春の隣の寶なるらん」〔華嚴經頌〕

譬如貧賤人、日夜數他珍寶、自無半錢、分於法不修行、多聞亦如是、〔俚言集覽〕

隣の疝氣ゑ頭痛に病む〔全〕○人の疝氣を頭痛に病む

隣の喧嘩門違ひ〔全〕

隣の糟糠味噌〔全〕○隣の糟糠味噌すいうまい

人の物をうらやむにたとふ〔諺百首和歌〕「わがやどに咲けるものから手折てし人の心の花ぞ

ゐならぬ」

遠きは花の香〔和漢古諺〕同之

〔說林〕云、人情貴鵠而賤雞々近也、貴犀象而賤馬牛、馬牛近也、惟人亦然、寺隣之人不重僧而野人重僧、非僧之敎、行於野人而不行於隣人也、野人遠而隣人近也、惟賢亦然、秦始皇重韓非、恐其不得見、非旣至則聽讒而誅之、漢武帝重相如、恨不與同時、相如旣至則疎而遠之、惟文亦然、蔡邕得王充ノ論衡而寶之、秘不以示人也、世遠故也、張竦得楊子雲ノ大玄法言不附

一觀、與其人比肩故也、〔教民要錄〕云、美不美鄉中水、親不親故鄉人、是らの語、諺の意に叶へり〔本朝俚諺〕○〔和訓栞〕に云、花の香は遠く聞くによろし、よて近く狎れは貴からぬに喩たる諺なり〔拾遺集愚草〕に「とへかしな立枝は梅の見へずともにはひをこめて立かすみかは」

遠目ばかりの帷木〔毛吹草〕同之

〔六帖〕に坂上是則「その原やふせやにねふるはは見ねてあはぬ君哉」顯昭の云、はゝきゝとは、信濃國その原ふせやと云所に森あり、其森よろにて見れは、庭はく帚に似たる木の技あるを、立寄て見れは、其木も見へずとなん、申侍へたり、よりてかくはよめりといへり、この意を取て、世話に、目にばかり見て、手にとられぬ事を、遠目ばかりのはゝきゝと云、〔俚言集覽〕○室鳩巣の〔大學詠歌〕に誠意「我心なすへきものか帚木のありとは見ねてあらぬためしに」

遠き親類より近くの他人　○遠き親子より近き隣〔毛吹草〕○遠き親子より近き他人〔和漢古諺〕

〔韓非子〕云、遠水難救近火遠親不如近隣」〔陳后山詩〕不應遠水救近渴〔本朝俚諺〕

遠くて近いは男女の中〔俚言集覽〕

〔枕草子〕に、遠くて近きもの、極樂、船の道、男女の中、

問ふは一旦の恥、問はぬは一期の恥〔和漢古諺〕同之　○問ふは一旦の恥問はぬは末代の恥〔毛吹草〕

諺の意は、凡そ人必先覺の人に順て、審に問ひ、明かに辨せずんは、なんぞよく道を知らんや、然れ共、小人は一旦問ふ事を恥て、一生の恥を抱くと也、〔中庸〕に云、子曰、舜其大知也與、舜好問而好察邇言〔論語〕に云、子入大廟每事問、注、尹氏曰、禮者敬而已矣、雖知亦問、謹之至也、〔諺草〕

問ふにつらさのまさる〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

〔續古今集〕題不知、西院皇后宮「わすれてもあるへきものを中々にとふにつらさをれもひ出けるし」〔同山家〕秋風、入道前右大臣、「吹風もとふにつらさのまさるかなくさめかぬる秋の山さと」〔全〕○〔和訓栞〕つらきはつれなきの義、うきとつらきと相似て、つらきは、人の心の上により、うきは、我心の上に就て云詞也、

問ふに落ちずして語るに落る　○とふに落ぬはかたるに落る〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

我身に惡事あれは、如何に包みかくさんとするも、事にふれて、言にあらはるゝを云、〔故事要言〕

問屋は長者に似たり玉子に似たり

富饒に見にてつふれやすきをいふ〔俚言集覽〕

飛て火に入る夏の虫〔世語畫〕○愚人夏の虫飛て火に入る〔和漢古諺〕（く之部參看）

飛ふ鳥も落る

〔平家物語〕信頼信西不快の事に、飛鳥も落ち草木も靡くはかりなり、〔考證千典〕

飛ふ鳥跡をにごさず〔俚言集覽〕○立つ鳥もあとをにごさず

飛ひ入り果報〔全〕

燈し火い上に人の影見ゆるをいむ

〔續世繼卷十〕をきしまの打聞に、ともし火の、ほのほの上に、彼女の見おけれは、これはいむなるものを、火のもゆる所をかき落して、その人にのまれとて、火のもゆる所とは丁子の事なり〔皇朝古諺〕

燈臺本くらし〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

是は道は近きにあり、之を遠きに求むとあるが如し、〔禍林玉露〕尼悟道の詩に、盡日尋春不見春、芒鞋踏遍隴頭雲、歸來笑撚梅花嗅、春在枝頭已十分、と是諺の意にひとし、〔本朝俚諺〕

○〔傳家寶〕燈臺照人不照己〔家語〕魯人不識孔子聖人、乃曰、彼東家丘者、吾知之矣とあり、

燈火消ぬんとして光を增す〔和漢古諺〕〔毛吹草〕同之

〔法苑珠林〕に云、法滅盡經に、聖王去後吾法滅盡、譬如燈臨欲滅時光更猛盛便滅是出處なり

〔同〕○〔列子仲尼篇口義〕云、燈將滅者心大明、

燈明の火て尻をあふるやう〔俚言集覽引森寺玉山雪〕

十口一ト口にことされず

十口にいふべき事を、一ト口に言ひさる事ならぬと、いふ事なり、〔愚管抄卷四〕十口一ト口にことされす、〔皇朝古諺〕

十で神童十五で才子二十過ては唯の人

十日の菊、六日のあやめ、

徳利に口あり鍋に耳あり

〔隋史遺文〕鑵子也有兩箇耳朶〔俚言集覽〕

徳利から物を出すやう〔全〕

泥の中の蓮〔毛吹草〕同之 ○泥の中の蓮、市の中の隱者、〔和漢古諺〕

〔周茂叔愛蓮說〕云、予獨愛、蓮之出淤泥而不染、濯清漣而妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭々淨植、可遠觀而不可褻翫焉、〔諺草〕

泥を打ては顔へはねる〔俚言集覽〕

豆腐にかすがひ糖に釘
豆腐で齒をいためる
土用布子に寒かたびら
土用半ばに秋風が吹く又土用三日に秋風がふく〔俚言集覽〕
芋ほゞの涙〔毛吹草〕〔故事俗言〕
とちめん棒をふる

とちめん坊を振と云事は、今もいへり、按するに、とちめく坊なるべし、〔節用集〕に、「迷眴」とあれども、狼狽の字よく當らん歟、とちめく坊は、うろたへ坊といふ程の事也、とちめくを今はとちると云振は立振舞なと云事か、或は坊を棒と思ひあやまりて、後に添て云歟、未考、〔洗濯物大鑑〕大和にて「夕立にとちめん棒をふる野哉」松翁〔浮世の北〕「夕立やとちめんぼふる門の麥」黒女とちは橡也、めんぼうは麵棒なり、橡子にて麵をつくるより出し詞といふ、附會の說、寬文前にはやありし故に、ふるといひしか、〔行脚文集〕三千風著には、迷悟と書て、立騷く事とす、又〔姥櫻〕に、あとの路銀の殘りすくなきを、俄にれとろき、これてはならぬとゝちめんばう、旅籠屋とまりを、木賃ところび」なといふ事あり、以上〔用捨箱〕

殿の馬も借れは三日〔毛吹草〕
殿の犬にはくはれ損〔世語雜〕
鈍な子は可愛い〔全〕
同氣相求む〔漢語大和故事〕同之　○同氣相求め同病相憐む
〔易文言〕云、同聲相應、同氣相求、〔吳越春秋〕云、同病相憐、同憂相收、〔藻草〕
泊り旅人朝旅人〔俚言集覽引北條時分藻部〕
とぢめをあはする

俗にとぢめのあひたる、筈の合たるなどいひ、約束をたがへずといふごとし、〔右京太夫家集〕「れもひとぢめれもひきりてもたちかへりさすがにれもふことぞれはかる」〔新選六帖〕衣笠右大臣「ひつ川のきしにはへるかばさくらちるころ花のとぢめなりけれ」〔本朝俚語〕
戸さゝぬ御代〔和漢古語〕〔漢語大和故事〕同之
〔史記〕云、子產爲相三年、門不關、道不拾遺〔藻草〕○〔唐書〕云、太宗貞觀年中、外戸不閉〔大鏡〕云、かばかり安穩太平なるときには、あひなんやとおもふは、れきならが、いやしきやとりも、帶ひぼをときて、門をたにさゝで、やすらかにのびふしたれは、としもわかく、いの

ちものひたるろかし、〔本朝俚諺〕

とてもぬれたる袖〔毛吹草〕〔和漢古諺〕○（毒を食はゝ皿舐れといふに同じ）

とりつき虫の如し〔全〕

何處のとりの聲も同じ事

人情は何國も同しさを云ふ、論語に云ふ、言忠信行篤數ならは、蠻貊の邦と雖とも行れんの意なり、

とられん坊

元吉原の頃よりの流言に、とられん坊といふ事あり、是は遊女に誑かされ、金銀をとらるゝ坊と云意なり、又とりん坊と云は、之に反して、客の方へ金銀をとり坊なり、或はとうりん坊或はとられん坊など、言訛音便にて、さま〳〵にいひ、自他の混したるも見ゆれと、其原はとられん坊、とりん坊の二ッなり、〔あつま物語〕（元祿寛永十九年）目錄に、とられん坊の事、たいこ持の事と、並べ出し「やかれつゝ金のあるほどとられん坊後はかならず桶伏としれ」（下略）〔川柳新〕

とるよりかばへ

冬瓜の花で百ひとつ（言多き人の比喩）

通り者には氣が足らず又「通りものには氣が足らずやぼといへば腹を立つ」〔俚言集覽〕

泥鰌汁に金鐔〔世話盡〕

富ては驕り貧けれは諂ふ〔和漢古諺〕〔漢語大和故事〕同之○とみてはれてる〔毛吹草〕

〔論語〕子貢曰、貧而無諂、富而無驕何如、子曰可也、未若貧而樂富而好禮者也、〔語草〕○此諺、よく小人の通弊に中れり、

◎ち之部

地獄もすみか〔毛吹草〕同之

〔荀子〕云、越人安越、楚人安楚、是も人各其住所に安する事をいへり、諺の意に同し、〔語草〕

地獄にも知る人〔毛吹草〕〔世話盡〕〔故事要言〕

地獄の上の一足とび〔毛吹草〕〔故事要言〕

地獄の馬で面ばかり人〔世話盡〕

地獄の沙汰も金次第○地獄の沙汰も金がする〔本朝俚諺〕

〔剪燈錄〕に令狐譔といふ人、生れつき正しき人にて、本より佛法を信仰せす、又其隣に、烏老と云者ありしが、家富で財多し、然れども貪る心止ます、常に不義をのみなしける、或時頻ひ

て死にぬ、其後三日計して、再ひよみがへる、人其故を問へは、曰く我死ぬるの後我家貧く佛事をなし、錢を以て僧に施す、さるにより、冥官悅ひて放ちかへす、令狐譔其事を聞て、大に怒り、我世の中のありさまを見るに、貪官汚吏の輩多く人民の財を受て、國の法度をまぐ去る程に、富貴なる者は、錢を納めて罪をゆるされ、貧乏なる者は、錢なうして罪にあふ、何ろをもはん、冥官此輩より甚しからんとはとて、詩を作りてそしりし事侍る、（世話支那草）

○〔僧褒が錢神論〕錢無德而尊、無勢而熱、危可使安、死可使活、貴而可使賤、生可使殺、諺曰、錢無耳可使鬼、云々

地獄は壁一ト重〔俚言集覽〕

地獄て佛に逢たやう

〔平家物語〕小松殿教訓に、地獄にて罪人ともが、地藏菩薩を見奉らんも、かくやと覺えて、〔全〕

地獄から火を取りに來たやう（痩たるを云）〔全〕

地が傾いて舞ひが舞はれぬ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

是は餘り物毎に勿体を付けて踪とるをいふ〔故事要言〕○〔吾吟我集〕「地かたふきてまはれぬ舞や是ならん岸根にこけてゆくかたつふり」〔授業篇〕に云、書を讀まんとをもふ人ありても、其取かゝり造作にて、書籍のあるなしの詮議に、月日暮ぬ誠に田舍遠國なとは、書の乏しきに、師の得がたき、學友の無き、作業の世話しき、何のかのと、臭諺に、地が傾いて舞か舞はれぬ云云、

地にぬきわし

〔小町踊〕巻上　春雨「音せぬは地にぬきわしか春の雨」〔俚言集覽〕○〔詩小雅正月〕云、謂地蓋厚、不敢不蹐、

地いればはまいる（棋客の常言）（全）

地にあらば連理の枝〔毛吹草〕○天にあらば比翼の鳥地にあらば連理の枝〔歌草〕（て之部參看）

地藏の顏も三度撫れは腹をたつ〔俚言集覽〕○佛の顏も三度

地頭に法なし

地頭は、古時莊園（公卿の私有地）に地頭を置きしより、其名を因襲し凡て武家采地の民其主を指して地頭と呼ふ、法なしは、暴横苛酷なるをいへり、啼く子と地頭にはかたれぬ抔いふも此理なり、

智は睫（マツゲ）〔俚言集覽〕○祕事は睫の如し〔毛吹草〕

〔韓非子〕智如目也、能見百步之外、而不能自見其睫、

智者は危きに近よらす

司馬相如曰、明者遠見于未萌、智者避危於無形、

智者秋の鹿鳴て山に入る、愚人夏の虫飛て火に入る

〔源平盛衰記八〕法皇三井寺灌頂の條に、智者秋鹿鳴入山、愚人夏虫飛燒火、是れ法皇の御口吟なり、〔義楚六帖卷四〕並〔法苑珠林〕山羊被殺因聲死、飛蛾捉燈由其色、〔類聚名物考〕

智者はまどはず〔毛吹草〕（論語に出づ）

智者も千慮に一失あり

〔史記韓信傳〕廣武君曰、智者千慮必有一失、愚者千慮必有一得、故狂夫之言聖人擇焉〔歌草〕

智者の敵となるとも愚者を友とせされ〔蟇叢抄〕〔俚言集覽引活版曾我物語〕

智者のほとりのわらべは習はぬ經をよむ〔世話盡〕（智者此には僧をいふ）

智者は空門を破る〔十訓抄〕

智恵ない神に智恵つける〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

是は何心もなき人に、傍より色々の附智恵をして、事を誘ふを云、（下略）〔故事成言〕

智恵の鏡もくもる

〔朝野僉載〕云、人貧知短、馬疲毛長、又古諺曰福至心靈禍來神昧〔歌草〕

智恵の拭磨り

長者富にあかず〔毛吹草〕同之

〔韓詩外傳〕云、貪物而不知止者、雖有天下不富、〔遺教經〕云不如足者、雖富而貧、〔歌草〕〇此に云ふ長者は豪富をいふ〔翻譯名義集〕に、長者は西土の豪族なり、富商大賈の、財を積む事鉅萬なるものを、皆長者と稱す、といへり〔五雜組〕云、富者多慳、非慳不富也、

長者二代なし〔世話盡〕〔毛吹草〕同之

〔景行錄〕云世無百歲人、枉作千年計、兒孫自有兒孫福、莫把兒孫作馬牛、〔省心詮要〕云爲子孫作富貴計者、十敗其九、爲善方便者、其後愛惠、〔本朝俚諺〕

長者の門に非人絶ねず〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

〔荀子〕良醫之門多病人、櫟栝之側多枉木と此意なり

長者の脛に味噌〔民のかまど〕〇大黑の脛に味噌〔俚言集覽引北條時分諺〕

〔唐話纂要〕只有錦上添花、那得雪中送炭、

智恵の鏡もくもる

長者の萬燈貧女の一燈〔毛吹草〕同之　○長者の千燈より貧女の一燈〔匂草〕

〔阿闍世王受決經〕に、或國王の供したる萬燈は、油盡きて消ゑしに、貧女が信心を凝らせし一燈は、通宵獨り燿き、明朝日連三たび滅すれども消ゑずといへる說あり、諺の出處とす、〔易既濟〕に東隣殺牛、不如西隣之禴祭實受其福、と亦此意なり

長者に貧をかたるな

〔筆略〕云、貴人之前、莫言窮、彼將謂我求其薦矣、富人之前莫言貧、彼將謂我求其福矣〔本朝俚諺〕

忠言耳に逆ふ〔毛吹草〕○良藥口に苦く金言耳に逆ふ〔和漢古諺〕

〔家語〕良藥苦於口而利於病、忠言逆於耳而利於行、

忠臣二君に事へず〔匂草〕

〔說苑〕燕昭王使樂毅伐齊、閔王亡、燕之初入齊也、聞蓋邑人王歜賢、令於軍曰、環蓋三十里毋入、以歜之故、已而使人謂歜曰、齊人多高子之義、吾以子爲將、封子萬家、歜固謝燕人、燕人曰、子不聽吾引三軍而屠蓋邑、王歜曰、忠臣不事二君貞女不更二夫、齊王不聽吾諫、故退而耕於野、國既破亡、吾不能存、今又劫以兵爲君將、是助桀爲暴也、與其生而無義、固不如烹、遂懸其軀於樹枝自烹絕脰而死、齊亡、大夫聞之曰、王歜布衣也義猶不背齊向燕、況在位食祿者乎、乃相聚如莒、求諸公子立爲襄王又見〔史記田單傳〕

忠が不忠になる〔和漢古諺〕全之

〔漢書〕鄒陽曰、王人獻寶楚王誅之、李斯竭忠胡亥極刑、此類和漢ためし多し、今數ふるに遑あらず、〔匂草〕○〔呂氏春秋〕至忠逆於耳倒於心〔本朝俚諺〕○〔臣軌〕不去小利則大利不得、不去小忠則大忠不至故小利大利之殘也、小忠大忠之賊也、

忠は憎みのもと

〔和歌民のかまど〕忠は憎のもと「さやかなる月にもかゝる雲はあれと晴間を見よや世の中の人」〔俚言集覽〕

忠孝兩全

〔晉書周處傳〕忠孝之道安得兩全〔愚按〕忠と孝とは其道を殊にせず、古より不孝の忠臣なく、不忠の孝子あらざるなり、孝經云、事君不忠非孝也、又以孝事君則忠、〔大戴禮〕云、忠者其孝之本與、又君子立孝其忠之用、とあり、若不幸にして君父の變に處する時は、其重きに從ふを以て、兩全と謂ふべきなり、

挑燈につりがね〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

此諺、ちやうちん出來て後の事なれは、宗鑑法師が〔新撰犬筑波集〕に「片荷輕くて持やかねけん」と云句に「つりかねを挑燈賣にことつけて」とあるなど、はじめて物に見えたるならん、〔嵌雜考〕

挑燈はゞの火が降る

是は人の貧窮なるをいふ、人の貧とは食の乏しきを第一とす、されは飢たる事を、詩にも飢火といふ、飢ては必汗の出るものなり、巢元方が病源論にも、內に飢餓極りて熱を生す、熱は火也、人火に向て久き時は汗自ら出ぬ、夏は火也、炎熱して人汗すともいへり、此心を以て、飢て身に汗する事は、其家に飢火ふると云義也、〔觀佛三昧經〕阿鼻地獄の相を說て云、城內に七ツの鐵幢あり、幢の頭に火沸出る事泉の如し、其炎流れ迸りて、又城內に滿てりといへり、是より出たり、〔故事要言〕

挑燈持ち川へはまる〔俚言集覽〕

挑燈で餅をつく

茶碗を抛げば綿でうけよ〔毛吹草〕〔野槌述說〕〔かなはし〕

茶碗と茶碗〔俚言集覽〕

茶腹も一時 又「湯腹も一時」

茶を飲むと年が寄る

血の涙を流す

〔日本紀〕に血涙（イルヒ）とあり〔空物語〕三人のひと、ひたひをつとへて、血の涙を落して、〔大和物語〕夜ひとよなきあかして、わしたに見れは、涙のかゝりたる所は、ちのなみだにてなんありける、〔大鏡〕染殿后かくれたまひて、白川にれさめ奉る日、素性よみける、「ちのなみだ落てそたきつ白川は君か代までの名にこそありけれ」〔雪玉集〕紀州の、さりもみの不動をれがみて、內大臣實隆公「動きなき身をわかちける姿そとちの涙をもこはしてそ見る」〔韓非子〕卞和獻玉璞於楚王不售、乃抱其璞而哭於楚山、三日三夜、泣盡繼之以血、以上〔本朝俚語〕

血にて血をあらふ　○血で血を洗ふ

〔唐書源休傳〕可汗使謂休曰、汝國已殺突董等、吾又殺汝、猶以血洗血汚益甚爾、注に可汗は回紇王の號なり、源休は唐の使者なり、突董は可汗が叔父なり、唐にて殺せり、〔藻草〕○〔俚言集覽引吉野御事書案〕錦小路殿御返事に云、御合体の事、御問答度々あり、其篇目未斷の最中云云、此別血を以て血を濯ふ也、

近付く神に罰當る〔民のかまど〕○近よる神に罰あたる
近しき中に垣をゆへ〔全〕○よい中に垣をせよ
近しき中に禮儀あり〔俚言集覽〕
女郎のうらなき〔全〕
女郎買の拾ひわらじ〔全〕
女郎買の禄味噌汁〔全〕

古歌に「冷飯に禄味噌汁は諺に女郎買の守本尊」
畜生のあさましさ　又「凡夫のあさましさ」〔全〕
畜生の逆うらみ
畜生は血に迷ふ人間は慾にまよふ
父の恩は山より高く母の德は海より深し
〔童子教〕父恩高於山、須彌山尙下、母德深於海、滄溟海還淺、是佛經に出つと云、
父の子母の子
〔羅山文集〕源判官義經行關東、辨慶等從之、路次店、店主老爺老嫗也、見其九子慶曰、多乎哉、

曰、爺子六人、嫗子六人、合作九人、慶不解、告義經、義經曰、然也有之、爺未娶嫗、々未嫁爺之以前、共有子三人、合作六人、巳娶巳嫁之以後、生子三人、又合作九人、父母有異同故也、慶聞而頷之云、〔本朝俚諺〕
千引の石は動かすとも親にはかたれず
塵積りて山となる〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之　○ちりひちつもりて山となる〔皇朝古諺〕　○塵もつもれば山となる
〔說花〕に云、土積成山則穢薈生焉、學積成聖則富貴尊顯至焉、〔大戴禮〕に云、積土成山風雨興焉、積水成川蛟龍生焉、〔古今集序〕に云、高き山もふもとのちりひぢよりなり、あまくもたなびくまでをひのぼる、〔俳草〕○〔易繫辭傳〕善不積不足以成名、惡不積不足以滅身、小人以小善爲无益而不爲也、以小惡爲无傷而弗去也、故惡積而不可掩、罪大而不可解、
ちりげを三本ぬくと鼻血がとまる
ちぎれても錦〔毛吹草〕
ちやつよりふかい事もなし〔全〕
ちごころすが如し〔毛吹草〕〔和漢古諺〕

「チンコロ」を屋根へあげたやう「座敷へ上たやう」とも云〔俚言集覽〕

「チョ」と犬の尿あとの手あらひ（爲す業の續かぬを云）〔同〕

ちやう〳〵しさはさめ易し（ちやう〳〵は喋々の音ならん）〔同〕

沈丁花は枯ても香ばし〔世話畫〕

重箱で味噌を摺るやう〔俚言集覽〕

晝九夜八船六（酒を篩ぐ法）〔同〕

仲尼の門に罵るものなし

〔那須國造碑〕是以曾子之家无有嬌子、仲尼之門无有罵者、〔同〕

張範がおて呑み〔毛吹草〕同之

熊坂張範は、盜賊の首魁なり、人の家に盜に入る前に、酒店につきて、他の財寶にあてゝ賒り呑む、是を張範がおてのみといひ習はせり、〔本朝俚語〕○因に云張範が事實〔新井白蛾の牛馬問〕に考證あり參考すべし、

丁子頭

俗に燈花を丁子頭と云、丁子に似たるによりてなり、丁子頭たてば、吉瑞なりとて悅ふ事なり、〔事文類聚〕云、樊噲問陸賈曰、自古人君受命於天、云有瑞應、豈有是乎、賈曰、自嚼得酒食、燈花得錢財、乾鵲噪而行人至、蜘蛛集而百事喜、小既有徵大亦宜然、〔蘇子瞻秋陽賦〕云、釜星之雜出、又燈花之雙熙、奴婢喜而告予曰、此雨止之祥也、釜星は百草霜に火の黙するなり、〔醫草〕

中流に船を失へは一瓢も千金〔醫草〕同之

〔鷄冠子〕中流失船一壺千金、水を渡る時、河中にて舟を失へは、一ッの瓢も千金にあたるべし、瓢を腰につくれは、水に沈まぬ也、是は萬の事、時に隨ひ處によりて、用に立つといふ心なり云々、〔世話支那草〕

痴人面前に夢を說かず

〔丹鉛總錄〕痴人前不可說夢、達人前不可言命〔朱人就月錄〕に、以爲陶淵明語、不知何據、又〔陳眉公祕笈〕載之〔本朝俚語〕〔山谷題跋〕觀淵明責子詩、想見其人豈弟慈祥、俗人便謂淵明子皆不肖、可謂痴人前不得說夢也、

竹馬の友〔和漢古語〕○竹馬のたはむれ〔本朝俚語〕

幼き時の友を云、〔世說〕晉殷浩既廢、桓温謂諸人曰、少時與之共騎竹馬、我棄去、已而浩輒取

之、故當出我下、〔書叙指南〕七歳之戯曰竹馬之戯〔歴草〕○唐山の竹馬の戯は、後漢の時すでにあれは、いとふるし、御國の古代の竹馬は、唐山の竹馬とは異なり、葉のつきたる生竹に、繩を結ひて手綱とし、是にまたがりて走るを、竹馬の戯と云ふ、竹馬の友といへるハ即是あり、左に寫し出せる古圖を見るへし、〔閑略〕今の世の如く、駒の形に作りたるものにはあらす、〔袋草紙雜言の條〕に云、壬生忠見、幼童の時、内裏より有召、無乗物とて、難參之由申、然らは竹馬に乗て可參之由有御定、仍進此歌、「竹馬はふしがちにしていと弱し今夕かげに乗りて參らん、」〔夫木抄〕「竹馬を杖にも今はたのむかな童遊を思ひ出つゝ」西行〔新撰六帖〕むかしをこふ「竹馬にねきふしなれしろのかみの世々はふれとも忘れやはする」九條三位入道知家〔骨髓集〕

町には事なかれ〔毛吹草〕

ちよつと來いに油斷をするな

鎮守の沼にも蛇はすむ

◎り之部

龍虎のあらそひ

〔李太白詩〕恠守麋鹿志、耻隨龍虎爭、〔本朝俚諺〕

龍の水を得虎の山によるが如し〔俚言集覽引太平記八幡合戦〕

龍門原上の土骨は埋むとも名は埋めず〔世盡語〕（此語韓文に出つ）

龍は一寸にして舁天の氣を含む〔俚言集覽〕

〔　　〕龍生而有舁天之氣

龍は睡て本体をあらはし人は酔て本性をあらはす〔全引活版曾我物語〕

龍吟すれば雲起る

〔易文言〕云、雲從龍〔淮南子〕云、龍舉而景雲屬〔王子淵聖主得賢臣頌〕龍興而致雲、〔歴草〕○〔虎嘯て風起るの條參看〕

龍の雲を得たるが如し

〔故事成語考〕蚊龍得雲雨、終非池中物、比人有大爲周瑜曰、劉備非久屈爲人用者、恐蚊龍得雲雨終非池中物

龍の鬚をなづるが如し〔毛吹草〕〔和漢古語〕

龍馬のつまづき〔全上〕

り之部

龍頭蛇尾〔俚言集覽〕

〔五燈會元〕に、大小祖師龍頭蛇尾」禪家の語録に多くあり、

兩虎のたゝかひ〔本朝俚諺〕

〔戰國策〕に云、今兩虎爭食而鬪、小者必死、大者必傷、子待傷虎而刺之、則一舉而兼兩虎也、無下刺一虎之勞而有刺兩虎之名、

兩虎たゝかふ時は一狗つゐにのる

〔史記春申君傳〕に云、兩虎相與鬪而驚犬受其弊又見〔戰國策〕〔全〕

兩虎二龍のたゝかひ〔和漢古諺〕

兩手に物持つが如し

〔呂氏春秋〕云、莊讓王韓魏相爭、子華子見韓侯曰、今使天下書銘于君之前曰、左手攫之則右手廢、右手攫之則左手廢、然而攫之者必有天下、又見〔莊子〕〔本朝俚諺〕

兩帆一盃

手一ばいの事なり、〔海舶人の諺〕、〔俚言集覽〕

兩脚にカセウ一つ

〔古今著聞集十二〕博奕云云圍碁の詞「カセウ」は「カケ目」ならん〔俚言集覽〕

兩を聞て下知をなせ〔毛吹草〕○片口聞て理をつけな

〔周官〕云、以兩造聽民訟、兩造とは、原告被告の兩方、共に皆至るなり、〔史記〕鄒陽曰、偏聽生姦、是も亦兩を聞て下知をなせとの意也、〔俚草〕

兩手に花

兩方よきはゝかふり

兩方立てれば身が立たず

利根却て愚知になる

文盲なる人は、物毎指出て、我よくもしらぬ事をも、聞はつりたる儘に、口を叩く、賢き人の文才備りたるほど、利口だてせぬ者也といふ心なり、〔故事要言〕

利は向上に莫れ

諸事に付きて、我智の人に勝りて、十の物七八も利得ある時、猶慾の心を起し、知を憑みて、人を屑とも思はず、貪るの利を、募る事なかれの心なり、〔全〕

利根氣根黄金の三こんなくては學匠になりかたし〔折たく柴の記〕

利口の猿が手をやく〔俚諺集覽〕

〔四十二章經〕云、愛欲人、猶執炬逆風而行、必有燒手患、

利口な子より馬鹿な子が猶可愛い〔全〕

利息を取るより利息を拂ふな

理を破る法はあり法を破る理はなし〔民のかまど〕

理のこうじたるは非の一倍〔毛吹草〕〔和漢古歴〕○理も強いぬれは非の一倍〔世話盡〕

〔愚按〕こうじたるは、剛したるならん、過剛は宜しき所にあらず、〔官箴〕云、當官之法、直道爲先、其有未可一向直前或直前反敗大事者、須用馮宣徽惠穆秤停之說、此非特小官然也、爲天下國家當知之、

理に勝ちて非にまける又理に勝ちて非に落る

楠公旗文　非　非は理に勝事能はず

理　理は法に勝事能はす

法　法は權に勝事能はす

權　權は天に勝事能はす

天　天は明にして私なし

〔愚按〕申包胥の所謂、人多き時は天に勝ち、天定まりて又人に勝の理にて、時としては正義の方、却て不利なるあり、諺此意なり、

理を非に曲げる〔故事要言〕

〔史記殷本紀〕に帝紂、知足以距諫、言足以飾非、

良藥口に苦し〔毛吹草〕〔歴草〕○良藥口に苦く金言耳に逆ふ〔和漢古歴〕

〔家語〕云良藥苦於口、而利於病、忠言逆於耳、而利於行、

良將の下に臆兵なし、旨將の下に勇士なし、〔恩地左近太郎聞書〕○強將の下に弱兵なし

〔東坡集〕題連公壁曰、俗語云、強將下無弱兵、眞可信、〔錢竹汀恒言錄〕云、死人頭邊有活鬼、

強將手下無弱兵、

良禽は木々擇て捿む〔俚言集覽〕

律義者の子澤山

律義末法又律義一片〔全〕

離別後の吝氣〔俚言集覽〕

流水わかず戸樞虫くはず〔塵囊抄〕

〔呂氏春秋〕に云、流水不腐、戸樞不蠹、〔子華子〕云、流水之不腐、以其逝故也、戸樞之不蠹、以其運故也、〔新井祐登聖學自在〕に云、人の害、安逸より大なるはなし、戸樞は蠹せず、流水は腐れず、故に人の安逸を好む、徒に業を成す能はざるのみにあらず、又病を釀すの基、

料理人鱠の不手際〔仝〕

臨機應變

〔唐書李勣傳〕其用兵籌算、料敵應變、皆契事機

綸言汗の如し〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之

綸言とは天子の勅をいふ〔禮記緇衣篇〕云、王言如糸、其出如綸、王言如綸、其出如綍、〔漢書劉向傳〕ニ號令如汗之出而不返者也、〔蘇草〕○〔後漢書三十四胡廣傳〕政令猶汗往而不及、詔文一下、形之四方云々」、注易曰、渙汗其大號渙王居无咎、劉向曰、汗出而不反者也、〔類聚名物考〕

◎ぬ之部

盜人たけ〻し〔毛吹草〕同上

是は我身の非あるを掩たん爲め、爭ふて人を非に陷さんとする如きを云、〔故事要言〕

盜人の隙はあれども守人の隙かなひ〔毛吹草〕〔和漢古語〕同上

萬事に心を配り、氣を付るとも、必人に窺はるゝの怠りあるものなりと云心也、〔仝〕

盜人の畫寢もあてがある〔毛吹草〕同上

〔杜生彦か明說〕に、韶州の旅邸にて、相公と云旅客あり、一匹の猿を連たり、諧語を以てよく之を狎らす、其後清州に往て、吳同知と云人の許に宿りけるに、吳氏は彼の相公か江湖の巨盜にて、猿を使ふて、盜ましむる事を聞しかは、之を迎へて饗應し、其猿を乞ひけるに、固く拒んて諾せす、吳氏愈乞て止ます、金拾兩を與へて終に乞受けたり、相公諧語して、猿に言て立歸りぬ、傍に能く諧語に通する者あり、之を聞くに曰、汝此處にて何も食はず變れすんは、定て汝を放すへし、其時必汝走て來れ、吾又十里の外なる、某の寺に待といへり、吳氏試に食を與ふるに食はす、又人を遣はして相公を窺はしむるに、果して寺に寢居れり、依て相公を殺し、併て猿をも殺したり、〔仝〕

盜人の取殘しはあれど火の取殘しはなし〔毛吹草〕〔和漢古語〕○盜人に償うつ〔毛吹草〕〔和漢古語〕

盜人にかぎわづくる〔毛吹草〕同之

〔戰國策〕范睢說秦王曰、此所謂籍寇兵、而齎盜食者也、しかれば盜に糧といはゝ、古語によゝ叶ふへし、〔蘭草〕

盜人が盜人に盜まるゝ

〔梵網經〕云、四分律之時、有比丘他盜取物而奪彼盜者物、〔本朝俚諺〕

盜人といへば手を出す〔毛吹草〕〔和漢古諺〕○盜人といへは鍋出す〔世語盡〕

盜人を見て繩をなふ〔毛吹草〕

盜人を捕へて見れは我子也

〔犬筑波〕「切たくもありさりたくもなし」と、云句に「盜人を捕へて見れは我子也」〔俚言集覽〕

盜人の番には盜人を使へ〔全〕

竊みする子は憎からで其索取がうらめしい

〔活版曾我物語〕に人の親のならひ、竊する子はにくからで、繩つくるものを怨むるは、常の親のならひにて候そや、〔全〕

棟に釘を打つやう〔全引森寺玉山書〕

ぬれ手で粟　○ぬれ手で粟のつかみどり

易きを云、〔鵬筑波〕「ぬれ手にて沫雪つかむわらびかな」〔全上〕

ぬけさやもたん〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

汝刀をぬけ、我さやもたんと云事也〔全〕

抜かぬ太刀の高名〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

我少も骨折る事なくして、他の手柄を以て、我が働きとするやうなる事を云、〔故事要言〕

鵜のなくをいむ

〔堤中納言物語〕螺女御　ぬるのなきつるにやあらん、いむなるものをといへは、〔皇朝古諺〕

◎る之部

琉璃はもろし

貴品の毀れ易きを云、〔白氏文集簡々吟〕大都好物不堅牢、綵雲易散琉璃脆、〔俚言集覽〕

琉璃も玻璃も照せばわかる〔全〕

類を以てあつまる

善惡各其類を以てあつまると云事也〔易繫辭傳〕方以類集、〔禮記樂記〕方以類聚〕注方謂行蟲也〔全〕

類を引き友を呼ふ

〔隋史遺文〕引類呼群〔六論衍義〕和睦鄉里云、和睦之道、不徒在引類呼朋宴遊樂會云々、〔全〕

流人の伏せ笠

恐るべき事には深く恐れ、慎むべき事には、固く慎へき事そと云、戒の意なり、〔本朝孝子傳〕に、伊周公、罪を得給ふ事ありて、播磨に左遷まし〳〵ける頃、御母宮、重く煩はせ玉ふよし聞こへしかは、伊周公ものうさの餘り、堪へかね給ひて、一日笠をふせ、御身を窶して、流人の御身ながら、忍びて都に入り、母后を見奉らせ玉ひけるか、後日に、此事露顯して、彌御咎重くなりて、國を替て遠く流罪まし〳〵けるとそ、〔故事要言〕

流浪して主のありがたきを知る

留守は火の用心〔世話盡〕

留守見舞は間遠にせよ〔俚言集覽〕

◎をれ之部

親は守りの神〔俚言集覽引北條氏分國法〕

〔古今集〕小野千振母「たちちぬの親の守と相ろふる心ばかりはせきなとゝめそ」

親子は一世師は三世夫婦は二世　○親子は一世師は三世〔毛吹草〕〔諺苑〕〔嘉朝古諺〕上句同

世の字の解、今の俗佛説に泥みて、過去、現在、未來の、三世を云と心得るは、大に非なり、一世は一代をいふ、此には一人といふか如し、父母一度死する時は、又求むる事能はず、故に親子は一世とは、一世一代に、只一人より外なしといふの義なり、夫死して改め嫁せざるは、婦の貞節なりといへとも、改め嫁するも、敢て禁せざる所なり妻死して再婚するは、夫に於て耻とせす、且生別して後妻を娶るは、尋常の事なる故、夫婦は二世といふ、即夫婦は再ひ相迎る事を得るの意なり、又師は六藝を始として、百家衆枝の學を講し、師ある上に師を求むるは、人の尊しとする處なれは、是を指して師は三世と云へり、三とは師を三人に限るにあらす、一二に對して多きをいふ云云、〔故事要言〕○〔萬葉集卷三〕山上憶良「ひと世には二たひ見えぬ父母をおきてや永くわれわかれなん」

親の心子しらす〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

親たるものゝ子を思ふ事、須彌より高く、海より深し、行住にも愛し坐臥にも悲む、故に事ある時、怒り腹立ちて、打ち又は常に掟を緊くして、放辟邪侈を懲さんと、戒め制するも、子は其心をしらすして、頑しき親そなとをもふをいふ、〔全〕

親の善惡は子孫にむくふ〔民のかまど〕
親のもたする子心〔毛吹草〕〔大和故事〕
親に似ぬ子は鬼子〔毛吹草〕〔民のかまど〕同之

〔說文〕肖骨肉相似也、从肉小不似其先、故曰、不肖也とあり、按するに、諺の鬼子といふは、不肖を罵りていへるなり、〔俚言集覽〕

親のあまやかし　又あまやかし　又あまやかし子を捨る　又あまやかしやでうだてる

〔十訓抄〕に云、愚なるたぐひ、親のあまやかし、めのとのもてなすに從ひて、いつとなく、かゝらんするとれもひて、なりたゝん末の事も辨へぬなり、〔全〕

親子は三界の首かせ　又子は三界の首枷〔全〕
親の辱は子の辱、子の辱は親の辱〔全〕

〔詩小雅小宛〕云、夙興夜寐、無忝爾所生、

親の奔走は他人がにくむ〔全〕
親の假で子嬉しい〔全〕
親の恩と水の恩はれくられぬ〔全〕

〔詩小雅蓼莪〕父母生我、母母鞠我、拊我畜我、長我育我、顧我復我、出入腹我欲報之德、昊天罔極、〔傳家寶〕一生在君父恩中、問何報稱、

親の異見と冷酒は後にきく〔全〕
親の罰と小糠雨はあたるがしれぬ〔全〕
親のあたまに松三本〔全〕
親の目に灰ふる〔全〕
親の奥齒て嚙む子は他人か前齒てかむ〔全〕
親の物は子の物〔全〕
親は苦をする子は樂をする孫は乞食をする　又親苦子樂孫ホイトウ

〔產語鳥獸篇〕諺云、父甘糟糠、子飽膏粱、孫拾遺糧〔俚言集覽〕○〔物類稱呼〕に中國、四國、及奥羽より越中、越後にて、乞食を、ほいたうと云ふよし見えたり、

親は思へば子は尿たれる〔全〕○慈悲をたれゝは尿たれる
親はなけれど子は育つ〔全〕
親は親子は子

をれ之部

親あしゝとて子はよき子もありといふことなり〔愚管抄卷四〕おやはおや子は子ところは、げずもいふめれゝ、〔皇朝古語〕

親にかゝる時子にかゝるをり

〔盛衰記卷三十七〕親にかゝる時子にかゝるをりといふ事あり、〔全〕

親は女郎買ふ子は後生願ふ〔俚言集覽〕

親父の夜あるき息子の看經（カンキン）〔全〕

〔岡氏家訓〕萬事只矩を踰る事を慎むべし、親父の夜あるき、息子の看經といふ、よきいましめなり云云、

親を疾視（ヒラメ）と鰈（ヒラメ）になる〔全〕

親と月夜はいつもよい〔全〕

親ずれより友ずれ〔全〕

親子でも金錢は他人〔全〕

親なき後は兄が親〔全〕

親の讓の皮のふんどし〔全〕

親の聲は神の聲

親の因果は子にむくふ

親の慾目

親の淺ましさ

親ほど親をれもへ

〔土佐日記〕「世の中に思ひあれども子を思ふ思ひにまさる思ひなきかな」〔三草集〕源定信「子を思ふ心の道の心もて親につかへよ世の中の人」〔最明寺時頼道歌集〕「子を思ふ親ほど親を思ひなば世にありがたき人といはれん」

親の恩を子でれくる

一家を起し祖先を顯はすは、孝道の尙ぶ所なり、故に子孫を敎育して、世用に供するも、親の恩に報るの義に適へり、親既に沒するの後は、宜く子孫の敎育に、留意せすんはあるへからす、

親孝行は我が爲め子孫の爲め

〔傳家寶〕孝莫辭勞、轉眼便爲人之父母

をれ之部

鬼の一口　○鬼一口〔世語畫〕

〔大和故事〕あまり小事にして、爲すに足らぬといふ心、又心安く、爲し安き心にいふなり、

〔小町跡〕チラシ　秋初秋「目に見ぬ鬼一口か秋の風」〔俚言集覽〕○〔本行經〕未來死鬼却奪人命、

一入鬼口悉皆食盡、

鬼の霍亂　仝

鬼に鐵棒〔毛吹草〕鬼にかなぐいぼう〔翁問答〕

〔太平記八〕かなさい棒の八角なるを、手本二尺ばかり圓めて、輕げに提げたり、

鬼の目にも取殘し〔俚言集覽〕

鬼の面をかぶつて小兒をれどす〔仝〕

鬼を欺く〔仝〕

鬼に瘤とらるゝ

〔宇治拾遺物語〕むかし或人、山路に行暮て、側なる朽木に一夜をあかせり、夜半ばかりに、鬼のやうなる人大勢集り來れり、かの人之を見て、甚た恐ろしき事に思ひたり、しばらくあつて、鬼ども酒宴をはしめて、うたひ舞ふ、かの人れもしろく思ひて、恐ろしき事をうちわすれ、酒宴の座に交はりて、鬼と共に舞ひうたふ、夜も漸く明がたになりければ、鬼どもかの人に向て曰、汝重ねてこゝに來り遊ふべし、約束をたがゆることなかれとて、かの人の額にある、瘤を質にとりてさりぬ、かの人悅び、家に歸りしかゞの事を咄しければ、かの人の隣に、瘤ある人、此事を聞て、羨ましく思ひ、くだんの朽木の中をたづね行き、夜を明しければ、あんの如く、夜半ばかりに、又鬼ども來り、酒宴しうたひ舞ける、隣の人其中に打まじりて、あろびければ、鬼ども見て喜び曰く、汝約束をたがへずして來れり、定て質物を取返さん爲なるべし、今汝に返すぞとて、懷より瘤を取出し、隣の人の額に投付ければ、瘤の上に瘤をかさねて、なく〳〵家に歸りけるとぞ、是誠に、世の人の富貴利達をうらやみ、其身に生れつかぬ、幸を求むる者の、戒となるべき寓言なり、〔醒草〕

鬼の念佛　又鬼のそら念佛

〔唐の李義山雜纂〕不相稱に、屠家念經といへるも、似合はぬ事をいとへしなれは、其心亦同し、〔瓦礫雜考〕

鬼の留守に洗濯

是は鬼の留守に新宅の訛なるへしといへり〔民のかまど〕に鬼の留守に新宅「諺に傳へしと

ても破るなよかたたがへして家移すべし」とあり、方位家の説に原つけり、〔俚言集覽〕

鬼の女房に鬼神がなる〔毛吹草〕〔民のかまど〕

鬼の人くらはず〔毛吹草〕

鬼の目にも涙〔毛吹草〕同之

此は如何なる不敵莫義道なる者にも、自然と、事に觸、折に逢ては、哀を知り、仁の心生せすと、いふ事なしと云心なり、〔古今集序〕に天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも、哀とれもはせ、猛き武士の、心を和くるは、歌なりといへり、是より言出たり、只鬼と云ふ心はえは、違ありと云ふ人もあるへけれとも、只詞の緣をとりたるまでなりとそ、〔故事要言〕

鬼とざれごと〔全〕

鬼も十七番茶もにばな〔大和故事〕○鬼も十八〔毛吹草〕〔世語集〕

鬼も見慣たるがよし

〔源氏夕霧〕雲井雁 いつことてれはしつるそ、まろはやうしにき、おにとのたまへは、れなじくは、なりはてなんとてとのたまふ」、夕霧 かく心れさなげに、はらたちなしたまへればにや、めなれて今はれろろしくもあらずなりにたれ、神々しき氣をそへばやと、たはふれことにいひなしたまふ、〔本朝俚言〕

鬼は弱きに乘る

〔維摩經〕天女曰、譬如人畏時非人得便、〔注〕什曰、一羅刹變形而爲馬、士夫乘之、馬問士夫、乘馬好哉否、士夫即拔刀問曰、此刀好哉、如此以不畏、不加畏、〔類聚名物考〕

鬼と女とは人に見えぬそよき

〔堤中納言物語〕鬼と女とは、人に見えぬそよきと、あんじ居たまへり、〔皇朝古諺〕

鬼瓦にも假粧

〔毛吹草〕「朝霜は鬼瓦にもけしやう哉」〔俚言集覽〕

鬼の前の餓鬼〔全〕

鬼に神とらるゝ〔全〕○〔皇朝古諺〕に袖中抄卷九を引く

鬼にせんべい〔全〕

鬼のすみか

〔諺歌〕に「草も木も皆大君の國なれはいつくか鬼のすみかなるらん」〔全〕

鬼も笑顔〔全〕

鬼も頼めは人くはぬ〔全〕

鬼の起請を見るやう

鬼の首を取たやう

れ日様證據（有如暾日の意）〔俚言集覽〕

れ月様とすつぽん〔全〕

れ乳母日傘

今の世、いやしき者の人にはこるに、れ乳母日傘にて育ちたる者そと云諺あり、昔は乳母をめしつかふほとの、しかるへき者の子には、日傘をさしかけさせたる故に、左は云ふめり、其傘は丹青もて、さま〳〵の繪をかきしなり、特に菱川か繪に多く見ゐて、延寶天和貞享の頃もつはら用たり云々、〔骨董集〕

れ國の松が見ゐる

いまだ利潤はなけれども、元金の返りさうに、見ゐたる時に、いふことばなり、〔俚言集覽〕

れ釜の團子で數ばかり〔民のかまど〕

〔史記申屠嘉傳〕自嘉死後、爲丞相者皆促々、庶謹備員而已、

れ釜を興す

家を興す事釜は竈なり〔俚言集覽〕

れ庭の櫻で見るばかり〔全〕

れ前さま御持佛様〔全〕

れ前の御無理は御尤〔全〕

れ爲れ益（タメエキ）

主人の勘略をたすけて、群下を手詰にする役人を、女の名に喩へいふなり、〔全〕

れためごかし〔全〕

れうらやまぶき日陰の紅葉

人の事をうらやみて、我は日かけの紅葉と云ふなり、〔全〕

れたが杓子

〔用捨箱〕に鍋取杓子の圖を載す、其解に云、上略 此蕎の杓子の柄いたく曲れり、按するに、昔は皆かくの如くなりし故に、杓子定規などの諺あるなるべし、此古製百餘年前までは、江州多賀社より、守に出す杓子のみに殘りありしとぞ、〔尤の草子〕曲れる物の品々の段、「大

工のかねや藏のかぎ、檜物屋の仕事、なべのつる、れたがしやくし」と並べ出せり、又俳諧にも〔玉海集〕（貞享遺明暦二年印本）「ゆがみなりにも壽命長かれ」「手づよさはた多賀杓子の荒けづり」（正式）など見ゆたり、蝌蚪をれたが杓子といふも、（れたま杓子と云は誤）水中にて、尾のうね〳〵とうごめくさま、柄の曲りたる杓子に似たる故の名なる事必せり、今のれ多賀杓子は、常の杓子にかはらねば、蝌蚪にも似す、柄は定規ともなるべく、眞直にて古製を失ひたり、以上〔用捨新〕

れ多賀樣の御庭のやう

多賀宮は、願をかくる人、色々の木を上て祈る故に、雜木杯のござ〳〵としたる喩なり、〔俚言集覽〕

お乳の人乳あがりたるが如し〔毛吹草〕

お髮のちりをとる

〔事文類聚〕に丁晉公、魏萊公と會食せしに、萊魏萊公の鬚を浸したるを、丁晉公起て拂ふと見ゆたり、諂諛の喩なり、〔和訓栞〕

れんそろ〳〵心靜にそこたつときはあと見よろはか

他處に行て其處を去る時、此眞言を唱ふる時は、決して物をわするゝ事なし、〔俚言集覽〕

れんべいかつぎ　又御幣眞直

れ腑で茶をわかす

れ先眞暗

男の心と太極柱は太うてもふとかれ〔大和故事〕

〔和訓栞〕に云〔萬葉集〕ニ眞木柱太き心ともいへり、されば、男の心と大國柱は、太くても太かれと云ふ、俗諺ある是なり、

男の我にば居屎たるゝ〇ひくにひかれぬ男の意地

男の思ひ立たる事は、善事なりとさへ心得たらは、是非共に成し遂くべき、ものそといふ義なり、〔後漢書陣蕃傳〕に蕃が室には糞あれども、敢て掃除を加へず、薛勤曰、孺子何ぞ酒掃せざるやと云ける、返答に、大丈夫の心を見よ、吾はやがて天下を掃除せんと思ふ故、心いろがしきなり、何ぞ一室を願るに暇あらんやと、云ひしとなり、是より出たり、〔故事要覽〕

男は辭儀にあまれ〔大和故事〕

男は禮にあまれ女はくわしよくにあまれ

〔めのとのろうし〕いにしへは、男は禮にあまれ、女はくわしよくにあまれと申せども、今は

さのみ上蔵とて、あかしたるも見にくし云云、くわしよくは貨殖か、過職か、いまだ思ひわかたず〔類聚名物考〕○〔愚按〕くわしよくは華飾なるべし禮壇弓に、婦人不飾不敢見舅姑といへり

男はめからなり

妻の心かしこけれは、男の身持も自然とおさまるよしなり、〔菜花物語〕初花、男はめからなり

〔皇朝古語〕

男は敷居をまたけは七人の敵あり

男の光は七光〔毛吹草〕

男の口から出た事は反古にはならぬ

男の四十は分別ざかり

男一匹〔俚言集覽〕

男は氣でもて餘は酢でもて又男は氣で食へ餘は酢でくへ〔他我身の上に〕に男は氣でする

〔俚言集覽〕

男は男につけ女は女につけ

〔御成敗式目四十一〕に、奴婢所生之男女事、如法意者、雖有子總任同御時之例、男者付父、女者付母也、」按するに今俗、男は男につけ、女は女付けと云は、竈子の類をいふ也、貞永式目に本つきて、訛り傳へたる也、〔全〕

男に似たる女はなけれど女に似たる男は多し〔全〕

男の目には糸を引け女の目には鈴をはれ〔全〕

男やでめにざこたかる〔全〕

やでめはやもめなり、寡をよめり、俗男女を通してやでめといふ鰥寡なり〔和訓栞〕ざこ、雑看と書けり、ざつこうとも云、安藝にて、いさふなといふ、雑魚の義なるべし、

男だてより小鍋だて〔全〕

男の心と川の瀬は一夜にかはる〔全〕○夫の心と川の瀬云々〔世話書〕

男の心と秋の空は夜の間に七度かはる〔全〕

女は若き時は親に從ひ人に行ては夫に從ひ夫死しては子に從ふ〔和漢古語〕

〔儀禮〕婦人有三從之義、無專一之道、故未嫁從父、既嫁從夫、夫死從長子、故父者子之天也、夫者妻之天也、

女に家なし〔毛吹草〕○女に三つの家なし〔俚言集覽引北條五代記〕

女に家なし夫の家を以て家となす、易に所謂男以女爲室、女以男爲家、の義なり、即ち女は夫に從ふを以て、一家を專有せざるをいふ、然るを、住居なしと解するは僻事なり、

女氏なくて玉の輿にのる〔毛吹草〕〔和漢古諺〕〔野語述說〕〔大和故事〕

女は國の平げ〔俚言集覽〕

女の智惠は後へ廻る〔世話盡〕

女のちゑは鼻の先〔大和故事〕同之 ○女の鼻の前智惠〔民のかまど〕

〔鷹筑波集〕「女房の智惠や末つむはなのさき」

女わらべの言ふ事用ふべからず

〔史記陳平世家〕鄙語云、兒婦人口不可用、〔諺草〕 ○〔管子〕婦言人事、則賞罰不當、

女さかしくて牛賣そこなふ〔世話盡〕

女は會釋にあまれ〔民のかまど〕

女は口さがなし〔俚言集覽〕

女の根性は蛇の下地

〔詩斯干篇〕維虺維蛇、女子之祥也、註、虺蛇陰物穴處、柔弱隱伏、女子之祥也、〔全〕

女の張る弓は射られず〔全〕

女の夜あるき〔全〕

女の寒いと猫のひたるゝは手のわざ〔全〕

女の物思ふにはうなだれ、男の物を案するにはあふぐ〔全引發貞記〕

女やもめに花が咲く、男やもめにうじがわく〔全〕

女の中の豆煎り 又女の中の豆いり、いつてもゝなまぐさい〔全〕

女にまけて七ふくり〔全〕

思ふ子に旅させよ○いとをしき子に旅させよ〔和漢古諺〕 ○可愛い子には旅させよ

人の子たるもの、家にのみ在て、父母の愛育を恃み、世間の人情の、險惡なる事を知らざれは、身を立る事難し、故に寵愛ふかき子ほど、旅に出して、鋭氣をくじけと云諺なり、尤故ある詞なり、程子曰在旅之時、謙降柔和、乃可自保、而過剛自高、失其所宜安矣、〔諺草〕

思ふ念力岩を通す〔民のかまど〕 ○念力岩をとほす〔ね之部參看〕

思ふ中には公事さするな〔毛吹草〕

思ふ中には垣をせよ〔全〕〔和漢古諺〕

思ふ中のつゞりいさかひ〔全〕○思ふ中の小いさかひ

〔吾吟我集〕寄衣戀「からころもうらみて袖を引さくやたもふか中のつゞりいさかひ」

思ふ中は涼しい　又知た中は涼しい〔俚言集覽〕

〔夫木抄〕納涼　西行「草の葉も動かぬ夏の照日にも思ふ中にや風は吹らん」

思ふ人はほだしとなる〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔藻草〕

〔今古集〕物部其名「世のうき目見ぬ山路に入らんにはれもふ人ころほたしなりけれ」

思ふ人に遠ざかれ、思はぬ人のしげ〳〵、〔俚言集覽〕

思ふ事を夢に見る

〔竹窓隨筆〕云、夜夢中多見生事、罕夢於死何也、蓋夢以想成、想多見生、不及前生故也、〔草木子〕云、諺曰、南人不夢駝、北人不夢象、缺於所不見也、〔本朝俚語〕○〔列子周穆王篇〕晝想夜夢、

〔潛夫論〕晝有所思、夜夢其事、

思ふ事を寐にいふ〔毛吹草〕〔和漢古語〕

〔吾吟我集〕寄枕戀「れもふ事ねごとにいへはしきたへの枕やかくす戀をしるらん」

思ふより産むかやすい　又案じるよりうむかやすい〔俚言集覽〕

思ひ内にあれは色外にあらはる〔湯谷語〕〔松風語〕〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔野師述說〕

〔堀川狂歌集〕櫻「非情とて思ひは内になき花の色外になとあらはれにけん」

思ひをつゝむは罪ふかし〔毛吹草〕〔和漢古語〕

思ひかけなき蛇の汁をすふ〔俚言集覽〕

思ひたつ日か吉日〔唐船語〕

思ふにろはで思はぬにそふ

思ふ事は口に出る

〔張子厚東銘〕戲言出於思

老たるを敬ふは父の如し〔世語畫〕

老たるを父母に若きを子弟〔和漢古語〕○老たるを父母〔毛吹草〕

〔孟子〕老吾老以及人之老、幼吾幼以及人之幼〔曲禮〕年長以倍、則父事之、十年以長、則兄事之、五年以長、則肩隨之、〔祭儀〕貴老爲其近於親也、敬長爲其近於兄也、慈幼爲其近於子也、

老ては再びちごとなる〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之　○八十の三歳兒

〔漢文帝紀〕七八十翁、嬉戯如小兒、〔漢書大和故事〕

老木にも花咲く〔和漢古歴〕

〔夫木抄〕立春　仲實朝臣「一とせにふたゝび春は立ぬれど老木の花はいかゝ咲へき」

老の身はけふかあすか〔全〕

老のくりごと〔毛吹草〕〔和漢古歴〕

老の幸〔毛吹草〕

老ては子に從ふ〔全〕

是女の道なり、解上に見ゆ、

老ての後學〔世話畫〕○老の學問〔空物語〕

老ては事にひがむ〔六々部集〕

大勢に手なし

〔駿臺雜話〕に云、世話に大勢に手なしと云やうに、一世の風俗には勝かたし、〔俚言集覽〕

大取せうより小取しろ〔全〕

大鳥の尾より小鳥のかしら〔全〕

大口をあけると膳か見ゆる〔全〕

〔無門關〕云、趙州開口見膽、露出心肝、」或俳句に「口あけは腸見ゆる田螺かな」

大鹿の蚊を呑たる如し〔世話畫〕○蛇の喉を蚊

大馬も八斗小馬も八斗

土佐の諺なり、才不才同しく用るをいふ、〔俚言集覽〕

大坂は日本の臺所〔全〕

大いなる物には呑まれ、長き物にはまかれる、〔全引大友興廢記〕○太き物にはのまれよ長き物には

まかれよ

大男の見かけだふし

川柳家「大男からだに智恵がまはりかね」

恩を見て恩をしらぬは鬼畜の如し〔毛吹草〕〔和漢古歴〕

〔水滸傳〕に、古人云、知恩不報非爲人

恩を仇でかへす〔世話畫〕○恩を仇て報する

恩愛の主の目ぎら〔全〕

〔北條九代記十一〕秋田城介泰盛は、外祖の威を假りて、勢に跡り榮耀に飽盈て、奢侈ゞ極め、諸侍に向ひて目銛を立て、百姓を責虐して、貪を逞らす、〔類聚名物考〕

恩の死はせぬとも情の死をする〔毛吹草〕〔野間述說〕○恩のは腹はきらねと情の腰は切る〔世話燒〕

恩しらずは乞食の相〔俚言集覽引北條時分記〕

恩報じは出世の相〔俚言集覽〕

尾張盜人美濃がんどう〔全〕（がんどうは强盜なり）

尾張法師〔全〕

尾羽うちからす（入牢者などの、窶れたる貌を云、）〔全〕

尾の多い烏賊のぼりで尻があがらぬ〔略語引世話燒草〕

尾に尾をつける

尾を掉る犬はたゝかれず

落武者は芒の穗におづる〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

是は落武者になりては、臆病心まして、草木までも、人と見なで恐るゝなり、晉の謝玄といふ人、軍立して、賊の大勢を打やぶりて、之を追ふ、賊の兵遁れ走り、程隔りて後、八公山の草木動くを見て、謝玄か軍兵追來るとて、怖れし事あり、又日本にても、平家の軍勢共、水鳥の羽音に驚て、敗北せしなど、皆諺の意の如し、〔諺草〕

落こぼれ沙彌の物〔民のかまど〕

落としふみはよむ所にとがあり

〔十訓抄八〕嵯峨帝御時、無善惡と書きたる落書ありけり〔中略〕おとしふみはよむ所に咎ありといふ事、是よりはじまるとかや、〔皇朝古諺〕

落穗をひろふ

〔詩小雅大田篇〕彼有遺秉、此有滯穗、伊寡婦之利、〔伊勢物語〕此女ども、穗ひろはんとて云々「うちかひて落穗ひろふと聞かませは、われも田つらにゆかましものを、」〔夫木抄〕田家 俊成

「長岡や落穗ひろひし山里にむかしをかけてたづねるそゆく」〔俚言集覽〕

落たあとで高みをおろる

臆病神にひかさるゝ

巳か心の暗きより、物に恐れ、鬼に擊るゝをいふ、心明なれは、魑魅の類も犯す事なし、〔故事要言〕

臆病の目火に責らるゝ〔源平盛衰記〕

臆病風か身にしみる〔世話盡〕　○臆病風に吹かれる

臆病者の據なし〔俚言集覽〕

面に泥をぬる〔全〕

面白狐の腹つゞみ〔全〕

面白狸磯に侍る（象棋にいふ諺）〔全〕

おとなそらことといはす〔世話盡〕　○老人うそいはす〔俚言集覽〕

おとなは目はづかし下衆は口はづかし〔全〕　○都はめはづかし田舍は口はづかし

おとなまじりて骨なきすくふ　又翁交りてとも云〔全〕

陰陽師身の上しらず〔毛吹草〕同之

〔顏氏家訓〕世傳云、解陰陽者、爲鬼所嫉、坎壈貧窮、多不得泰、吾觀近古以來尤精妙者、唯京房管輅郭璞耳、皆無官位、多或罹災、此言令人益信、〔俚言集覽〕

陰陽師と北風には遇はぬが祕密〔町人袋〕〔大和故事〕〔毛吹草〕（皆北風を辻風に作る）

〔徒然草〕に明雲座主、相者に遇て、己に兵仗の難やあると、尋たまひけれは、相人誠に其相れはしますと申す、如何なる相ぞと尋ねたまひけれは、傷害の難御座しますまじき、御身に

て、假にもかく思召寄て尋ねたまふ、是すでに其危みの兆なりと申けり、果して矢に中りて失給ひにけり、かやうの心にて、言ひ始めたる詞なり、〔故事要書〕

陰陽師の門に艾絶えず

上畧　諺にも、陰陽師の門に艾たえずとて、餘り强く物をいめば、草とる日とてもなくなり侍る、吉日也とて、惡事をなしなば惡かるべし、惡日なりとも、善事をなしなば善かるべし云々、〔雜國叢書〕

伯父が甥の草をかる〔毛吹草〕〔和漢古諺〕　○甥の草を舅がかる〔俚言集覽引淋寺玉山書〕

〔愚按〕貧富時を異にすれは、尊族も却て卑族の爲に役せらるゝをいふなかべし、豈慨嘆に堪ふべけんや、

伯父鳩鬼千にひかふ〔世話盡〕

祖父のすねごと〔全〕

祖父の髮は七日に生えて八日にすらり

〔小町踊〕冬、枯草　嶺利「かれろめて八日にすらり尉が髭」〔女夫草〕けふころ月の七日なれけり」

と云句に　玄札「はゑ茂る祖父の髭も長き夜に」〔俚言集覽〕

夫われは親忘る〔全引北條時分藩留〕

をれ之部

女子嫁しては、夫を天とするを以て、専ら生父に事るを得ず、然れども、妻は齊也とて、夫妻は同体の義なれば、生父に對するも、共に子たるの道を盡さゝるへからす、諺よく愚夫愚婦の病痛に當れり、〔荀子〕に云、妻子具而孝衰於親、嗜欲得而信衰於友、爵祿盈而忠衰於君、

夫に對して唾をかへすな

同し穴の狐〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之 ○同穴の狸〔民のかまど〕○一ッ穴の狐

高木文弼が〔燃柴錄〕龍陽之泣前魚、汲黯之激積薪、豈啻當時爲然、古今一丘之貉耳、唯知命君子爲能無悶、此一丘之貉、古語乎、祇當時諺乎、未考、〔俚言集覽〕

同し猫の面

〔新選字鏡〕「頭人短面」稱古於毛氏、按するに此諺は物を比するは、俱に侔しく、皆短しと云に喩ふ、猫の面の短き故に云、〔全〕

頤の雫口に入らず〔世話書〕

頤て蠅を追ふ（腎虚して顔の痩たるを云）〔俚言集覽〕

重荷に小づけ〔毛吹草〕〔餝草〕

〔萬葉集〕「ます〳〵もれもき馬荷にうつといふごと」云云〔後撰集〕賀の部に、今上梅壺にはしましゝ時、薪こらせて奉り給ひける「山人のこれる薪は君か爲め多くの年をつまんとろれもふ」御返し御製「年の數つむとするなる重荷にはいとゞこづけをこりもろへなん」

重荷をおろす

〔穀梁傳〕昭公二十九年、冬十月鄆潰傳、昭公出奔、民如釋重負、〔淮南子精神訓〕而莞布衣云云、

舉天下而傳之於舜若解重負然、

已を忘れて人を怨む〔大和故事〕〔世話書〕〔故事要言〕

己の事は棚へあげて置く

おとゝゐのけいやく魚と水〔和漢古諺〕○をとゝゐのけいやく〔毛吹草〕

おとゝゐ他人の始り〔毛吹草〕○兄弟他人の始り（け之部參看）

驕る者久しからす〔和漢古諺〕同之 ○驕り平家

〔平家物語〕に、おごるもの久しからずとかけり〔老子〕に、自敖者不長、希逸注、不長不可久也

〔餝草〕

おく聞かんより口をきけ〔毛吹草〕

をがくづもいへはいふ〔毛吹草〕○おがくづもいへはいはるゝ〔俚言集覽〕

〔鷹筑波〕「いへはいはるゝ言の葉の末」と云句に「木の枝にのこきりくづをかきまぜて」をがくづもとりゐ〔俚言集覽〕

おづるはづるゆづる〔和漢古諺〕

鴛鴦の一聲

〔續狂言記五〕三人カタハ「主是はいかなこと、啞がものいふた、去ながら、をしの一聲福貴の相と申す、〔俚言集覽〕

啞子の夢見るが如し

〔洞山初錄〕に、問不犯一切請師提綱、師曰、啞子得夢〔無門關〕打成一片、如啞子得一夢、只許自知、〔本朝俚諺〕

狼に衣きせたるが如し〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

人の惡性なるは、狼の衣着たる如く、人の形を學ぶと雖も、心は禽獸にひとしといふ喩なり、〔史記〕齊王母家、恥鈞惡戾、虎而冠者也、〕是諺の意の如し、〔俚言集覽〕

帶にや短し襷にや長し

〔伊勢年中行事〕櫻宮十七日神事、鳥名子歌に云、「阿古女乃曾天、也不禮天波牟倍里、於比仁也世牟、多須支仁也世牟、伊左世牟、多加乃乎仁世牟、」この鷹の緒とは、〔和名抄〕に、攀あしをとあり〔日本紀〕には、緡の字を用ひられたり、今の俗、いづれにもはしたなき物を、帶には短したすきには長しといふは、これらよりやいひなりけん、この歌は、俗諺の義とはたがひて、無益の物にせんより、同しくは有用のものにせんと、いへる心と聞ゆ、〔北遊隨筆〕

れりものにかみみたる〔未詳〕

〔榮花物語〕つほみ花れりものにかみゝたると云ふことは、かみのかるひれ少さときのことなりけり、〔島朝古諺〕

沖にもつかず磯にもつかず

〔陶淵明全集〕閑情賦云、若憑舟之失棹、譬緣崖而無轡、〔十六夜日記〕阿佛短歌「今は只くがにあがれる魚のごと、かぢをたゆたるふねのごと、よるかたもわびわつる」〔本朝俚諺〕

追手をふせげは搦手がまはる

〔草木子〕前門拒狼、後門進虎、〔仝〕

公の私〔毛吹草〕〔和漢古諺〕〔著聞集〕同之

公の中に寛裕なる事あるをいふ、此諺或は公とはかりもいふものあり非なり、〔十訓抄〕公の

中の私とは是なり、〔俚言集覽〕
穩密の沙汰は高くいへ〔世話盡〕
岡目八目（メハチク）仝 ○わき目八もく〔浅瀬のしるべ〕
〔鹽鐵論〕從傍議者易見、其當局則迷、〔漢諺〕云、當局者迷、傍觀者有眼、
小田原評定 又小田原評定でまとまらぬ 又小田原談合〔俚言集覽〕
れろか者に福あり
〔東坡詩〕人皆養子望聰明、我被聰明誤一生、惟願孩兒愚且魯、無災無難到公卿、〔山谷詩〕人生不材果爲福、〔愚按〕東坡詩は時に激するの辭にして、訓となすに足らず、愚者の福あるは蓋機心奸智を用ひすして、質朴仁に近きを以てなり、
おくれ先たつ世のためし
〔新古今集〕遍昭「するの露もとの雫や世の中のれくれ先たつためしなるらん」〔玉葉集〕前大僧正源恵「れのつかられくれさきたつ事もあれとおひてとゝまる數そ少き」〔仝〕
煽動（ワヂテ）と持籠にのりたくない
奥齒へ物のはさまつたやう

多いは足らぬ基
終りが大事
〔詩大雅蕩〕靡不有初、鮮克有終、〔又生民〕に、令終有俶、皆終始を慎むべきを云ふなり、

◎わ之部

我が身をつみて人の痛さをしれ〔毛吹草〕〔和漢古諺〕 ○我身抓つて人の痛さをしれ〔俚言集覽〕
〔後拾遺集〕永源法師「身をつめは入もをしまじ秋の月山のあなたの人も待らん」〔續拾遺集〕行能女「過ぬとて恨もはてじはとゝきす待らん里の身にしられつゝ」〔論語〕己所不欲、勿施於人、范純仁が曰、責人之心責己、恕己之心恕人、
我が身の事は人に問へ〔毛吹草〕同之
〔韓子〕云、古之人、目短于自見、故以鏡觀面、智短于自知、故以道正己、是も諺の意に同し、〔毛吹草〕
我が身の一尺は見ぬ〔故事俗言〕 ○人の一寸我一尺〔俚言集覽〕
我が身の上は見ぬ
古歌に「かゞみ山人のしがからさき見ぬて我身の上はかへりみずうみ」〔俚言集覽〕 ○〔莊子天地篇〕知其愚者、非大愚也、知其惑者、非大惑也、大惑者終身不解、大愚者終身不靈、

我が身不能にして人の智慧をしらず〔仝引竹齋物語〕

我が身よけれは人わるい〔仝引北條時分藪留〕

我が身のくさきを我しらず〔俚言集覽〕

我が身の爲の觀世音〔仝〕○我らが爲の觀世音〔田村話〕

我が家の佛貴し　○あがはとけと斗りも云ふ

廣く世間を見ざる、頑しき心より、一向我儘を以て、人に逆らふ心なり、〔砂石集〕に、獨の僻める姥あり、常に矢田の地藏薩埵を信じて、參りけるが、或時此姥、田舍へ行て住む事ありけるが、朝晩の勤にも、向ひ馴たる矢田寺にも遠ざかりて、物憂けれ?も、去とて願はざらんも便なければ、手を合せて申すやう、此國にも、餘多地藏の御坐ますべけれども、別て朝夕願ひ參らせし、己が矢田の地藏樣とぞ拜みけるとあり、〔故事要言〕○「徒然草」よき女ならば、此男をらうたくして、あが佛とまもりゐたらめ」、

我が家の關白〔町人袋〕

我が內の釜了簡〔俚言集覽〕

我が門ではゐぬ犬なし〔毛吹草〕同之

己が心の頑なる儘に、非道を以て人を從へんと好むといへとも、他は彼が惡を知て從はざれは、却て從はざる者を辟めりと思ひ、怒り詈るやうの事を云ふ、〔讀書筆記〕に云、犬は生得守禦の德あるに依て、四門に付けて以て盜賊を辟くといへとも、多く人の衣きたる貌の善からず、整はざるを見ては吠ゆ、稍整へる時は犬も亦止む、蓋彼は人の外貌の美にして、貴むへきのみを知るものなり、人の智は、犬よりも辨あるへきに、亦只人の富貴なるを見ては敬し、貧賤なるを見ては忽にして、偏に其賢なるか、不肖なるかと云事を知らす、是誠に眞犬といふへしとあり、此心なり、〔故事要言〕

我が物故に骨を折る　○我身故に骨を折る〔毛吹草〕

凡一切の生ある者、一生の間に勤め苦しむ處は、衣食住にあり、禽獸蟲魚は、衣住を思はざるに似たれとも、食を思ふ故に、東奔西走して、一生骨を折る此心なり、〔演雅〕に云、桑蠶は繭を作て自纏裹す、蛛蝥は網を結ひて工に遮遏り、燕は居なくして舍を經始する事忙し云々、〔仝〕○「和訓栞」に我物故に骨を折ると云俗諺は、衣食住に勞するをいふなり、

我が物食て主の力もち〔民のかまど〕同之

何の利得もなき事を、ひたと世話やく樣の事を云ふ、〔仝〕

わ之部

我が物故にねをなく〔日本書紀〕

〔日本書紀〕に應神天皇崩し、皇子大鷦、稚郎子、互に位を讓り、稚郎子遂に菟道に遁る、海人鮮魚を献るに、二皇子相讓て受たまはず、鮮魚途に餒れぬ、海人魚を捨て泣く、其條下に云、故諺曰、有海人耶、因己物以泣、其是緣也、

我が物顔

〔夫木抄〕「夏の夜は光涼しくすむ月を我物顔にうちはとそ見る」「山めぐる時雨のやどかはゝそばら我物顔に色の見ゆらん」〔藻草〕

我が家樂の釜盥〔俚言集覽〕

家樂一に永樂に作る、永樂は明の太宗の年號にて、當時製作の陶器を、永樂燒と稱し、有名のものなり、諺の意は、貴重なる永樂燒の釜を、盥につかふ如く、我家にのみ在て、放逸不精なるをいふ、内辨慶の類なるへし、

我が船の順風は人の船の逆風　又入船の逆風は出船の順風〔全〕

我れもしろの人かしまし〔全引民のかまど〕

我はして人のぼらけを嫌ふ〔世話畫〕

〔醒睡笑〕昔或人歌を學びけるが、朝ぼらけと云詞を、其師制して、朝はらけと云言は、かりろめには申し難き事なりといへり、其後師朝はらけをよめりけれは、其男うらみて、「我はよみ人にぼらけをよませすに」と云けり、此は此弟子の、晝ぼらけ、夕ぼらけなど云ひたるを、師の制せしなり、

我が子には目がない〔俚言集覽〕

我が馬の轉んだやうにはせぬ〔全〕

我が絢ひたる繩で首縊る〔全〕

我が事と下り坂に走らぬ者なし〔全〕

我があたまの蠅を追へ〔全〕

〔古今譚槩〕各人自掃門前雪、莫管他家瓦上霜、諺の意に近し、

我が田へ水ひく〔全〕

若きを子弟〔毛吹草〕　〇老たるを父母若きを子弟

若き時は親に從ひさかりにしては夫に從ひ老ては子に從ふ〔全〕　〇女は云々（れ之部參看）

若い時の遊藝が用に立つ〔世話畫〕

若き時の苦勞は買ふてせよ　○若き時のしんどはかひてせよ〔淺瀨のしるべ〕

〔古樂府〕に少壯不努力、老大徒傷悲、〔俚言集覽〕

若い時は二度はない

〔陶淵明詩〕に、盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人、〔居家必用〕少不勤勞老必艱辛、少能服勞老必安逸、

若木の下で笠をぬげ〔毛吹草〕同之

若木は少年に喩ふ、即ち少年とて侮るましきをいふ、〔論語〕に後世可畏也、焉知來者不如今、の意なり、〔漢語大和故事〕

若木に腰かけな〔毛吹草〕

是は若木の奚弱なる如く、年少の者は、倚賴するに足らざるを云ふ、

笑ふ所に福來る〔毛吹草〕同之　○笑ふ門には福來る〔和漢古諺〕

劉向曰、和氣致祥、乖氣致異、〔辭草〕

笑ふ顏には矢がたゝず　又むかふる顏には矢もたゝず

〔言鯖〕云嗔拳不打笑面、〔俚言集覽〕○〔晉書劉伶傳〕嘗醉與俗人相忤、其人攘袂奮拳而往、伶徐

日、雞肋不足以安尊拳其人笑而止、

笑ひの中に刀を礪ぐ　又　笑ひの中に劍あり　又　笑ひの中に劍をかくす〔全〕○笑の中の劍（え之部參看）

〔其笛〕寄惠比壽鯛　琴風「櫻鯛笑はゞたゞにくれつべし」〔全〕

笑ふて損をする者なし

禍は下から起る〔毛吹草〕○慈悲は上から下る禍は下から起る（し之部參看）

〔吾吟我集〕世の中の男女のわさわひも下から起るものにこそあれ」

禍は口より起る

〔傳玄口銘〕云、疾從口入、禍從口出、〔家語〕云、口是何、傷禍之門也、〔文中子〕云、禍莫大於多言、〔辭草〕

禍を招く

〔左傳〕云、禍福無門、惟人所召、〔全〕

禍もさいはひのはしとなる〔毛吹草〕〔和漢古諺〕同之

〔老子〕云、禍兮福所倚、福兮禍所伏、〔全〕

禍も三年置けは役に立つ

物毎に慎を深くして、怨むへき事をも、卒忽に其仇を報する事なかれと、云ふ意なり、〔故事要言〕○秦の穆公、祕藏の馬を亡ふ、岐下の民三百餘人是を殺して食ふ、官人等法度に行はんとす、穆公曰く、畜生の故を以て人を殺すべからず、良馬を食ふて酒を飲まざれば人に害ありとて、酒を賜ひて赦されぬ、其後隣國に戰起り、穆公已に危かりし時、彼の三百人の者共も、命を捨て拒き戰ひ、終に勝軍となれりとそ、是等も禍の役に立ちしもの歟、

藁づとにこがね〔毛吹草〕〔和漢古語〕

藁千本ありても柱にならぬ〔民のかまど〕

藁屋の雨と御法義は出て聞かねはしれね又わら屋の雨は出て聞け〔俚言集覽〕

藁で作つても男は男〔全〕

藁で尻ふき手で手鼻〔全〕

藁人形も衣裳から

童いさかひ長知らず〔世話甚〕

童と公方人には勝たれず〔全〕

童の水ぐきと歌の五文字はなだらかなれ（古き諺也）〔和訓栞〕

童に花持たせたる如し〔毛吹草〕

童は風の子

〔醒睡笑〕にわらんべは風の子と、知る知らぬ世にいふい何事そ、ふうふの間の子なればなりと、愚案するに此說非なり、小兒は風日にわはしむるが宜し、愛ずる餘に煖衣さすべからざるをいふ、〔俚言集覽〕

わるい夢は貘にくはする

今世俗に、惡夢を見れは、貘にくはするとて、貘々と呼て禁厭ふ事あり、唐にも此事あり、貘は白き豹を云ふ、夢を食ふ事は見ねねども、辟邪辟瘟の事あり、〔白氏文集三十九〕貘屏贊井序曰、貘者象鼻、犀目、牛尾、虎足、生南方山谷中、寢其皮辟瘟、圖其形辟邪、予嘗痛頭風每寢息常以小屏衛其首、適遇畫工偶令寫之、按山海經、此獸食鐵與銅不食他、因有所感遂爲贊曰、云々〔類聚名物考〕

わるい夢は咄さぬもの

わ之部

〔山居四要〕云、夜夢不祥不宜說〔俚言集覽〕

わるい聲には味噌に蓋する

〔續博物志〕傳云、雷不蓋醬、令人腹中雷鳴、是諺に似たり、

王になるも生れから最（サツトモ）

人の貴賤高下ある事も、生れ落の小兒の程より、早其兆はあるものとの心にて、最とは勝れ

優れる所あるを云ふ、〔故事要言〕

王を擒にせんと思はゞ先其馬を射よ

是は論語に、其奥に媚ひんよりは、竈に媚びよと云ふに意相近し

和歌に師匠なし〔毛吹草〕同之

〔詠歌大概〕に云、和歌に師匠なし、たゞ古歌を以て師とす、〔雜草〕

和光同塵

〔老子〕云、和其光同其塵、我智の光を深くかくして、顯さゞるを和光といひ、世に從ひ、塵俗の中に混して、時を知るを同塵といふ、〔全〕

破鍋にとぢぶた〔世話盡〕〔毛吹草〕

破鍋も三年れけは用に立つ〔民のかさど〕

鰐の口をのがる

〔太平記〕阿新事に、鰐の口の死を遁れし、〔俚言集覽〕

鰐足の道早〔世話盡〕

綿にて頸を絞めるが如し〔毛吹草〕〔故事要言〕

綿に針をつゝむ〔毛吹草〕同之

小人の交り、外にはねんごろの樣をあらはし、內には怨敵の心をいだくと云ふ諺なり、〔孟郊詩〕云、面結口頭交、肚裏生荆棘、〔醒草〕

渡りかねたる世の習ひ

〔和訓栞〕白居易新樂譜云、行路難、不在水不在山、只在人情反覆間、といへる意なり、〔俚言集覽〕

渡りに船

〔法華經藥王菩薩本事品廿三〕此經能大饒益一切衆生、充滿其願、如清涼地能滿一切諸渴乏者、如寒者得火、如裸者得衣、如商人得主、如子得母、如渡得船、如病得醫、如暗得燈、如貧得寶、如民得王、如賈客得海、如炬除暗、此法華經、亦復如是、〔類聚名物考〕

王將も歩のもの〔毛吹草〕

◎か之部

神は正直の頭にやどる〔和漢古諺〕○神は正直の頭にやどりたまふ〔十訓抄〕〔毛吹草〕○正直の頭に神やどる

〔倭姫世記〕神垂以祈禱爲先、冥加以正直爲本、日月雖照六合須照正直頭

神正直

神は非禮をうけず〔本朝俚諺〕〔俚言集覽引龍田譚、平家物語、太平記〕

〔性理字義〕神不歆非禮、不犯非族〔梅園叢書〕云、むかし漢武帝鬼神の說に迷ひ、殊更越の巫を信向ありしに、董仲舒と云臣、しば〳〵諫め奉りしに、武帝彼の巫をめし、仲舒を詛せしめ給ひける、仲舒正しく南面して、經論を誦詠しけるが、何事もなく、巫即時に死しけり、神は非禮をうけずといふも、こゝをいへる事なるべし、

神うれづく〔故事記〕

〔古事記中八十一〕故茲神之女、名伊豆志袁登賣神坐也、故八十神、雖欲得是伊豆志袁登賣、皆不得婚、於是有二神、兄號秋山之下氷壯夫、弟名春山之霞壯夫、故其兄謂其弟、吾雖乞伊豆志袁登賣不得婚、汝得此孃子乎、答曰易得也、爾其兄曰、若汝有得此孃子者、避上下之衣服、垢身高而釀甕酒、亦山河之物悉備設、爲宇禮豆玖云爾（下畧）此者神宇禮豆玖之音本名也○宇禮は慨たきの「ウレ」豆玖は償ひの畧にて、賭物なり、賭物に負て、慨ふるものなる故に、うれづくといふにや、

神は人の敬ふに依て威を增す〔白髮話〕同之

〔卷絹譚〕に神は人の敬まふによつて威を增し、人は神の加護に依り運をろふ〔將門譚〕「神は人の敬ふに依て其威益盛也、人は神德を受ていよ〳〵運をろふとかや」〔俚言集覽〕○〔御成敗式目〕に云神者依人之敬增威、人者依神之德添運、然則恒例之祭祀、不致陵夷、如在之禮奠、莫令怠慢、

神は見通し〔全引民のかまど及すねはじかみ〕○天道見通し

神もきねがならはし

〔歌枕名寄〕「ねのつから神の心にならはしのきねが宮居の月そさやけき」〔方按〕に攝津國に敝尼神社あり、一に粁禰に作り、又杵根に作る、今の西村と云所にありと云へり、」〔蟻通譚〕

〔太平記評判陶山條〕「神はきねがならはし、木佛は僧の行功による、」今きねを禰宜と云」〔和訓栞〕に神は禰宜のはからひ」〔俚言集覽〕

神の樹で主がある

今の人、多く女子の結髮して、夫の極りたるをいふ、然れども此世話の起りは、數千歳を經たる木には、樹神と云ものありて、人に仇する事あり、故に只恐るべく、愼むべきの義なり、〔故事成言〕○〔愚按〕物の年所を歷て、變怪あるは、獨り樹のみにあらず、然れども凡妖怪は、正人君子を犯す事能はざるなり、漢の張遼、田中の大木を伐らしめしに、切口より血出たり、人々驚き返りてかくと告げしかは、老たる樹は汁出るものなりとて、自ら下知して伐らせけるに、中に大なる穴ありて、丈々四五尺ばかりなる、白髮垂たる、人の如きもの出て、張遼が方に歩みよる、張遼むかへて打殺せしに、續て四人まで出來るを、盡く打殺したり、人々怖れて地に伏して居たり、能々是を見るに、人にあらす獸にあらす、怪物なりき、張遼何の障害なきのみならす、其年天子より司空に辟され、侍御史袁州刺史となれりとそ、

神せゝり　又「神いちり」〔俚言集覽〕○近づく神に罰あたる

神のひきおはせ〔六月政略〕

神のつかはしめ

「神のつかひ」と云事は、日本紀、古事記に出たれは、据なき俗說にあらす、ろれが中に猿を伊勢大神の使といへる事は、〔齋明紀〕に見ゆ、八幡の鳩は「ハタ」と「ハト」と音通し、春日の鹿は、鹿島よりかせきにのりて、來りたまひし歌あり、稻荷と狐は、御饌津を三狐神と記せしにより、熊野の烏は、神武天皇八咫烏の導を得たまひ、熱田氣比の鷺は、仲哀天皇白鳥を愛したまふ事、俱に紀に見ゆたり、松尾の龜は龜の尾山の號に基き、日吉の猿は、月行事の社猿田彦大神なるに起れるなるへし、此外に愛宕の猪は、宍戸氏の再興せしにより、三島の鰻抔の類、擧て數へかたし、又鼠を大黑の使といふは二義あり、大巳貴神にていへは、〔古事紀〕に鼠の故事見ゆたり、大黑天にて云へは〔聖寶藏神經〕に、左手持鼠囊と見ゆたり、〔倭訓栞〕

神と佛は水波のへだて〔毛吹草〕

神の正面佛のまじり〔世語集〕

神の網も佛の網もきれはつる〔毛吹草〕

川中に立ちても親の脇の下は香ばし〔世語集〕

川中には立てども人中には立たれず〔毛吹草〕

〔白民文集大行路〕に云巫峽水能覆舟、若比人心是安流、」と此意に通ふべきか、〔解草〕

川たちは川ではつる〔毛吹草〕同之